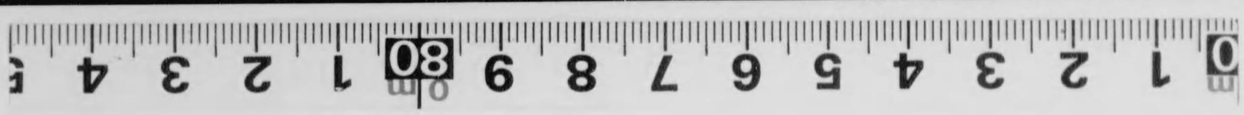
391
441



故

小説

宿命

沖野岩三郎著

福永書店版

大正
15. 10. 25
内交

391-44

お常は一寸目には六十以上にも見えるが、實は安政二年生れの、此の物語の初まる明治四十二年には、まだ五十五であつた。

二十七といふ若い身で良人（おつと）に死別れてこのかた、三十萬以上の財産を守つて、人に後指もさされずに、六つの利雄と當歳の堅爾とを一人前に育て上げた苦勞といふものは並大ていでは無かつた。だから年よりもふけて見えるのは無理のない事である。

お常は四十一の春、二十になつた利雄をつれて、十幾年ぶりで遠州の濱松へ行つたのであつた。そして弟の家にしばらく滯在してゐるうちに、弟の一人娘で東京の櫻井女塾を卒業して歸つてゐた姪の清香を無理に所望して利雄の妻にもらつたのであつた。

清香は語學の天才があつて、宣教師のミロル博士から頻りにアメリカ行をすゝめられた程であつたが、田舍の小學校を卒業したばかりの利雄と結婚した事について、少しも後悔の色を見せはしなかつた。

利雄も學問こそ無けれ、十九二十の頃から、もう町の有志達と一緒になつて町政を談じたり、實業上の意見を闘はしたりして將來に望をかけられてゐたのであつた。

夫婦の間に生れた可愛い須基子が、やツと誕生を越したばかりの翌年に、清香は風邪の揚句に胸が痛むと言ひ出して間も無く、コスモスの花の裏庭に咳詩つてゐる頃ひどく血を吐いて一夜の風にもろくも散つてしまつた。それ以來利雄は俄かに厭世家となつて、政治も論ぜず實業も語らず、町から半里ばかり離れた王子が濱に晩雅樓といふ小さい別莊を建てゝそこに引移り、十年餘りもアメリカへ出稼ぎして割烹や洗濯を覺えて來た松藏といふ老人に、炊事から身のまはり萬事の世話をさせ、母をも弟をもたつた一人娘の須基子すらも、決して近づけなかつたのみならず、弟の堅爾に母の生家の大伴の家名を繼がせると同時に、東京の白金學院へ入學させ、『卒業しても歸るな、直ぐ米國へ行つて、自分の好む學科を修めて、成業するまでは一家に如何なる不幸が起らうとも、斷じて歸つて來てはならない！』ときびしく言渡したのであつた。

須基子が尋常一年を修業した時、利雄は何を思つたのか、お常には一言の相談も無く、白金

學院の院長に頼んで女學部出身の古座ナオミといふ娘を家庭教師に迎へ、今後須基子に關する事は一切ナオミに一任して、萬事ナオミの思ふまゝに教育してもらへと言つて、產みの母のやうにお常になついてゐた須基子を、つれなくもお常から引離してしまつたのであつた。お常は最初の程、手飼の小禽を奪はれたやうな淋しさと、可愛い可愛い孫の心が自分を振捨ててナオミに對つて移り行くのをまざ〳〵見る嫉ましさとが、多少老いの心を苦めないでも無かつたが、すべてを辛抱强くぢつとこらへて、利雄とナオミとを信用してゐるうちに、いつの間にかすつかりナオミの性格に感心してしまつたのであつた。

同じ年の六月には堅爾も學院を卒業したが、かねての兄の嚴命通りに、直ぐ米國へ出發して國へは歸つて來なかつた。

お常は何といふ淋しい境涯であつたらう。一家の杖柱とも云ふべき利雄には、ツイ眼と鼻との間に棲みながら年に唯の一度だつて、面と對つて話をする事も出來ず、毎月朔日と十五日の午後には、王子權現の祠の前まで俥を引込ませて、右手の小高い砂丘の上から小一町ほど離れた所にある利雄の住居を眺めて、時折には遠目ながらも利雄の姿を見るのが、せめてもの慰め

であつた。

雨が降らうが風が吹かうが、同じ日の同じ時刻には、必ずお常の姿が此の砂丘の上に現はれるので、それを見ると直ぐ松藏は、

『旦那樣、東の窓をあけて御覽なさいまし、川口はあんなに荒れてゐます。』と言つては利雄を表庭へ誘ひ出し、たとひ一分一秒でも永く、お常の眼を滿足させたいといふ優しい松藏のなさけはお常の心にも能く通じた。それと口には言はなかつたが、敏感な利雄にも松藏が自分を外へ呼出すたびに、砂丘の上に立つ黑い影の主が誰であるかといふ事は、ようく知つてゐたのであつた。

『御隱居樣、あなたの御心の程はお察し申します。何と言つたつて、あアいふ御病氣なんですから……』

松藏が斯う言つてくれる言葉はお常に取つて『我子ながらも餘りに氣强い仕打だ。』とこぼしたくなる愚痴や不平を打消す唯一の慰めであつた。

お常が斯うして、明けても暮れても同じ淋しい想ひを繰返してゐるうちに、須基子はもう十五の春を迎へて女學校へ通ふやうになつた。明日は入學式だと云ふので宵の口からナォミと須基子とは着物よ袴よと騷いでゐたが、翌朝はいつもより早く起きて、すべての準備をした。そして八時過に二人が伴立つて玄關の靴脫に立つた時、お常は左もうれしさうに、

『ね、早いものぢや、もうちやツと女學校へ通ふやうになつたから……』と言つて、すつきりとした須基子の姿をつく〴〵と見入つてゐたが、『お祖母さん、行つて參りますッ。』と須基子が輕快に敷石の上を二三歩あるいた時、お常は思ひ出したやうに、

『あ、ナォミさん、式がすんでお歸りに、一寸横町の久保寫眞館へ行つて、お二人の寫眞を寫して來て下さい。あの絲錦の帶を久保さんまで後からお末に持たせて置きますから、あれを『お立』に結んで須基子一人だけのも一枚とらせて置いて下さいまし。』と言つたが須基子の方を一寸ふりむいて『それをお父さんに二枚共送つてあげませう。』

『さうネ、それからアメリカの堅爾叔父さんにも……』

須基子は無邪氣にさう言つたが、ナォミは默つて俯向いたまゝ『さア、須ウちやん參りませ

う。』と言つて靜かに門の方へ歩き出した。

『お傘は要らないでせうネ。』呟くやうに言ひながらナオミの傍に摺寄つた須基子の後姿を見たお常は、もうナオミと殆ど同じ背丈になつてゐるのに驚いた。

寫眞が出來上つたのはそれから一週間ばかり後であつた、須基子がまだ學校から歸らない前に寫眞屋から屆けて來た二いろの寫眞をつく〴〵と見入つてゐたお常の眼には、いつしか熱い涙が浮んで來た。

『ナオミさん、斯うしてお寫眞にとつて見ると、須基子は本當に亡くなつた母親に生寫しですよ。いつの間にか斯んなにおほきくなつて……ナオミさんあなたにもずゐぶん長い間御面倒を見て戴きましたワネ。』

お常が涙ぐんで、其の寫眞をぢつと見詰めてゐると、俄かに表門の所からバタ〳〵と駈け込んで來る草履の音が聞えた。

『おや！　ぢいやぢやア無くつて？』

『ねえ、松藏かも知れません。』

二人は思はず一度に起上つて高窓の所から外を見ると、果してそれは松藏であつた。

『御隱居樣！　大變でございます、早く一時も早く濱の家へお出で下さいませ、旦那樣が……あの旦那樣が……』

『えッ？　あの利雄が大變惡いと云ふのかい、え、え、大變に……』

『さ、左樣でございます。私はこれから田原先生の所へ駈けつけて、一緒に俥で參りますから、御隱居樣も大急ぎで……大急ぎで俥でかけ付けて下さいませ。左樣なら一足お先へ失禮しますから……』

松藏はアタフタと表の方へ飛出して行つた。お常は手早く前にあつた寫眞を二枚懷に容れて起ち上りさま、

『ではナオミさん、大急ぎで俥を一挺こゝへよこして下さい。そしてあなたは帳場から直ぐ女學校へ行つて須基子を迎へて來て下さい。』

言ひながら奥の一室へ走り込んで羽織を引掛けて出て來た時、もうナオミはそこにゐなかつ

た。

『お末、お末、一寸濱の家へ行つて來るから、お留守を頼みますよ。』

お常は俥を待遠しくて、コト／＼と表門の所まで出て行つたが、丁度出入の車夫がそこへ迎へに來たので『急いで下さい。大急ぎですよ。』と言ひながらそれへ飛乘つて晩雅樓へ驅けつけ、あたふた病室へ通つて十四年振の我子の顏を見ようとしたが、利雄はきちんと寢臺に起直つたまゝ兩手を組合して俯向いてゐた。傍には新約聖書が、哥林多後書七章の所を、開いたまゝになつてゐる。

『太地君！　利雄君！　おつ母さんだよ。』と田原は聲を掛けたがもう何の返事もなかつた。

『今、注射をしたのだが……』田原は呟きながら、亦一度『太地君！　おツ母さんだよ。』と呼んで、靜に其の首を抱くやうにして仰向に寢かした。そして急いで瞳光を見、脈搏や呼吸を檢べたが、もう何にも感應が無つた。

『もう、いけません。何とも御氣の毒でございます。』田原は潤み聲で云ひつゝ、太い溜息をついた。

『利雄！　これ利雄……なぜ斯うならない前に……もう一時間早く知らせてくれなかつた？　可愛い／＼須基子は……須基子はこんなに成人した……お前に此の寫眞を見せたいと思つて……今出來たばかりだのに……利雄！　お前とした事が……それはあんまり強い仕打ぢや、あんまり……』

お常は十四年間の悲みや悃みが一時に込み上げて來て、今更のやうに正體もなく泣崩折れてしまつた。

『旦那樣……旦那樣。』と松藏爺も寢臺の脚にしがみ付いて震へながら泣いた。三人の啜り泣が室内の空氣を微動させる中に、白い寢卷に包まれて、雪のやうなシイツの上に、胸の所で兩手を組合せたまゝ靜かに眠つて居る利雄は、如何にも神々しい死の嚴肅を現はしてゐた。

利雄の枕邊に散る紙片があつたので、田原はそれを取上げて讀むと、

總てを感謝す、なぐさめ滿ち悦び餘あり。

吾が死を堅爾に知らする勿れ。

と鉛筆の走り書きに認めてあつた。

松藏は老の眼に溢るゝ涙を拭き拭き、押入から春慶塗の小箱を出して來て、

『御隱居樣、田原先生、わしが此の箱をあける時がたうとう參りました。旦那樣は始終私に仰しやいました。（松藏、われは俺の死ぬるのを見屆けた上で、此の中にある手紙を田原さんのとこと家とへ屆けてくれ）……わしはいつも畏りましたと云つて置きましたが、どうも今日は旦那樣の御樣子が普通で無いと思つたので默つて飛出したのでした。しかしこんなに早く此の箱を開ける時が來ようとは思ひませんでした。定めし旦那樣は……旦那樣はわしを呼ばしやつたらうに……』

『ぢいや、お前のおかげだよ、能く世話してくれました。永の年月能く面倒を見て……』とお常は兩袖を顏に押當てたまゝ半身を起した。

田原はやがて二通の手紙を手に取つて表を見つゝ『一通は私にあてたのだが、あとの一通は（堅爾歸朝確定の際お讀み下さい母上へ。）と書いてあります。足掛十四年も母子兄弟に會はないといふ世間並はづれた剛情を、よくあなたは何にも言はずに辛抱して下すつたが、之には

いづれ利雄君としてもせつない事情があるのでせうから、いつその事に此の遺書も利雄君の意地を通させて、堅爾君の歸るまでは開封しないで置いて下さい。それが利雄君に對する何よりの供養になります。』と言つた。

『はい、承知しました。しかし人間てものはいつ、どうなるかわかりませんから、私に若しもの事があつた節は、あなたが其の遺書を御覽下すつて、どうぞ萬事を宜しく……』

『無論そんな場合には、私の出來るだけの事を致します。』

『近くに親戚が一軒も無い心細い身ですから、此先とも何分宜しく……』

お常は靜に起上つて寢臺の側へ來て、田原が仰向に臥かした利雄の遺骸をそつと見た。心持拔上つた廣い額から頰へかけて透通つたやうに白く、薄い八字髭は一刷毛（ひとはけ）描いたやうに美しかつた。眼が少し凹んだやうに見える外は左程に衰へてもゐなかつた。

『能く養生をしてくれました。お前なればこそあア氣强くなれたのだ。私はお前の氣象に感心してゐます。不覺の愚痴は赦して下さい。サ、これは須基子の女學校へ入つた記念の寫眞だよ。お前に見せようと思つて寫したのだ。これは私のお前に對する永アい〳〵訣れの餞別だよ、

サ、利雄。左様なら……』

お常は須基子の寫眞を利雄の組合せた兩手の所へ靜に措いた。

『有難い、有難い、さう褒めて下さりやア、旦那様も浮ぶ。傳染する病だからガイに氣强い事も言はつしやつたんで、どこの國にお前様、親子兄弟に會ひたく無い人間があるものですか。旦那様はどの位切なかつたか、私は毎日々々心で泣いてゐました。』

松藏は大きな拳でそつと涙を拭いた。

『御隱居様、私にあてた此の遺言は實行してあげて下さるでせうネ。』と田原は手紙を兩手で擴げて突立つて居た。

『實行致しますとも、まアどんな事が書いてございますか、御聞かせ下さいませ。』

田原はふるへ聲で讀み上げた。

一、僕の屍體は君と松藏の外、誰にも見せぬ事。

一、屍體は火葬にして其灰を拾はぬ事。

一、墓標、石碑など決して造らぬ事。

一、葬式を廢する事。

一、此の晩雅樓を燒拂ひ、更に四五十坪の平屋を新築し、乞食、行路病者の合宿所とし松藏を監理者とする事。

一、松藏には死に到るまで從前通りの給料を與ふる事。

一、僕の手を觸れたる書籍、及び寢具等は一切燒却の事。

一、從前通り太地家は不動產の所有をなさぬやう君より忠告せられたき事。

右實行せられなば實に嬉し。

太地利雄

信賴する田原清一兄

葬式をしないといふ事に對して、お常の心に多少の異存もあつたらうが、たうとう思ひ切つて總て本人の意思通りに實行する事にした。『萬事は田原さん、あなたに御一任致します。』とお常がはつきり言つた時、田原は重々しくうなづいて、『では明後日の正午まで私は宅へ歸りませんから、毛布を二枚と金子を五十圓だけ夕方までに持たせて下さいませ。後始末は私が一

切を引受けますから。』と言つて、白い布片を靜かに利雄の顏にかぶせた。

故郷にこんな事件のあつた事を知らう筈の無い弟の堅爾から、翌年の一月末に『いよ〳〵此の四月上旬には戀しい日本へ歸朝する』といふ通知が來た其手紙の中に、

『十四年間逢はなかつた兄上はどんなに變つてゐるだらう、やはり面會は許されないだらうか、遠く故郷を離れた異國の空で、色の蒼白い痞せ衰へた人を見るたびに兄上の事を想ひ出します。私が卒業して歸つた時、もう兄上の病氣が全快して喜んで私を迎へてくれるのでは無いかといふやうな事を空想して見たり、私が家を出る時『をぢちやん、をぢちやん』と廻らぬ舌で言つてゐた須基子が、もう立派な娘になつて、どつかへお嫁に行つてゐるのではないかといふやうな事をも想像します。兎に角歸國が近づくにつれて故郷の事がいろ〳〵と心にかゝつて時々涙ぐむやうな事もあります。』云々とあつた。

斷腸の思ひで此の手紙を讀んだお常は、すぐ田原を招いて、利雄の遺言狀を開封する相談を

した。

『堅爾がいよ〳〵四月には歸つて來ますが、それについては、もう何もかも知らせて置いた方が宜しからうと思ひますけれども……如何でございませう、あの遺言狀を一度讀んでいたゞきたいもんですが……』と言ひつゝ簞笥の中の文箱から遺言狀を取出して田原に渡した。

田原は封を切つて、中から四折のレターペーパーを拔出した。小い咳を一つして讀み初めたが其手は細かに慄へてゐた。

須基子の顏が母の清香に生寫しだと松藏から聞くたびに、私の胸は刺されるやうに苦しい。私は十九歳の時病院で肺尖加答兒だと診斷された時、それはもう肺病の第一期だとは私自身でも知つてゐた。だから私は一生獨身で暮さうと思つてゐたのだが、何しろまだ年も若く無智であつた爲、母の勸めにしたがつて清香と結婚してしまつた。そして憐れにも清香に私の恐ろしい病氣を傳染させて殺してしまつた。

私は清香が血を吐いて死んだ時、彼女を殺した下手人が私と母とであると云ふ事を痛切に感

じた。母は私がかうして變屈な態度になつた事を、悲しくも腹立たしくも思ひなさつたでせうが、死んだ清香に對して其の苦痛を忍んでやつてもらひたい。

私は清香から英語を習つて一通りの英字新聞雜誌も讀むやうになつた。清香は妻と云ひ條私の教師であつた。しかし彼女は實に謙遜で私に對して一言の怨も言はなかつた。私は清香の言行を通じて彼女の信じて居た基督教の眞意がわかつた。彼女は私から恐ろしい病毒をうつされたといふ事を悟らない程の無智ではなかつた筈だ。

須基子は體格が弱いやうだ、結婚などを決して無理に勸めてくれるな。

ナオミさんには御目にかゝらないが、しつかりした氣質をもつてゐる御婦人らしい。須基子の行末はナオミさんの思ひ通りに教育するやうにして下さい。どんな思ひ切つた事をしても、よし其の結果が如何に失敗しても、それはナオミさんの責任ではない。萬事をナオミさんに一任する事を拒んではならない。

堅爾には十萬圓を與へて下さい。そしてそれを一ケ月に費消しようと一年間に無くしようと彼れの意のまゝにして下さい。しかしそれ以上は一圓たりとも與へてはならない。

堅爾が卒業して歸つた時、若しナオミさんと意志が疎通したなら、二人は結婚して須基子の行末を保護して貰ひたい。が、こんな事はホンの私の空想として言ふまでゞす。決して他人から押付がましい事をしてはならない。若しもナオミさんがそれを承諾してくれたなら、太地家が發狂系統であり堅爾も肺病の素質を有つてゐる血統だといふ事を明かにして置かねばならない。

實を言へば、私はこんな遺傳と血液とをもつた太地家が此世界から消滅する事を望んでゐる。私の死ぬ事は人類の爲に裨益だ。私の死んだ後で、此の遺言が必ずしも實行せられるものとは思はないが、やはりこんな事を書いて見たのである。

田原は讀了つて頻りに感心した。お常は此の遺言狀に細々と其後の有樣を書添へて、早速堅爾の許へ送つてやつた。ナオミの寫眞も添へて。

堅爾がいよ〳〵四月十二日に横濱へ着くといふ電報が來た時、お常は田原を訪問して、利雄

の遺言をナオミに話してナオミの心持を訊いて見てくれと頼んだ。

田原は早速ナオミを呼んで逐一利雄の遺言を話したが、ナオミは默つて聞いただけで何とも云はなかつた。

其晩ナオミはいつもの通り須基子に英語を教へてから、自分の室に戻ると、そこにはお常が待つてゐて、『ナオミさん、今日田原さんにお會ひ下さいましたか。』

『はい、お目にかゝりました。』

『堅爾とあなたとの事に就いて、何かお話がありましたでせう。』

『はい、ございました。ですけれどもかう申しては我まゝすぎますが、まだ一度もお目にかゝつた事の無いお方と結婚しろとおつしやられても御挨拶の申上げやうがありませんので……』

『では堅爾が歸つてから、田原さんにでもお願ひして、改めて申あげればよろしいのでございますか。』

『いゝえ、申込なんて、そんな事はどうでもよろしうございますが、とにかく此の問題は一年か二年後の事にしていたゞきたいと思ひます。』

『解りました、あなたのお心持は能くわかりました。』

お常はあつさりと此の話を打切つて、十時すぎまで世間話をして自分の室へ歸つて行つた。

で、ナオミは須基子の室に行つて見ると、須基子はもう前後も知らず寢入つてゐた。枕もとの洋罫紙に『自分一人でお禱りして、お先へ失禮しました御免下さい。』と書いてあつた。

ナオミは枕邊で默禱して、そつと脱け出して自分の室に歸るとすぐ床に入つたが、どうしても眠付かれなかつた。彼の可愛い優しい須基子の血管にも、發狂と肺病との恐ろしい魔の姿が封じ込められてゐるのかと思へば、たまらなく悲しくなつて、恐ろしい聯想が後から〳〵と湧いて來る。

堅爾と結婚する。最初の程は新婚らしい空氣もあるが、二月三月たつうちに亡くなつた兄の氣質が弟の上にも現はれて、何でも無い事からふツと物を言はなくなる。はては一室へ閉籠つたまゝ一月たつても二月たつてもちつとも出て來ない。遂には脅迫觀念が強くなつて、母も須基子も私までも疑ぐり深い眼で見る。食事を持つて行けば、それには毒が盛つてあるといふ。

藥を勸むれば劇藥だと言ふ。おしまひには……

『いやだ！』ナオミは心の中で叫んで眼を堅く閉ぢた。眼を堅く閉ぢれば閉ぢる程、赤や青や金色や銀色の雲が渦のやうに眼の前にちらつく、やがて短い銀の征矢が無數に飛んで來て、紫の靄の中に流れ込んだと思ふと、そこには美しい須基子が立つてゐる。

『まア須うちやん！　どこへ行らつしやるの？』

『あたし？　あたし先生を探してるのよ、ナオミ先生を！』

『私がナオミですよ。私が……』

『おや！　さう？　まア嬉しいッ。』

駈寄つて來た須基子は、黒い眞黒い草の上にぺつたりと坐る。

『須うちやん！　どうなすつたの？』

『どうもしないの、少し胸が苦しくつて。』

『え？　あの胸が：』

『えゝ、私、もう死ぬのよ。』

『須うちやん！　何をおつしやるのです？』

『苦しいッ、ね、先生、苦しいッ……』

見る〳〵須基子の美しかつた顏は蒼白く不氣味なものになつてしまふ。

『まア！　須うちやん、須うちやん……』

ナオミは大聲で呼ぶ。しかし呻吟くばかりで聲は出ない。すると今度は其の眞黒い芝草が、いつの間にか廣々とした海に變つて、大きな汽船が波止場に横付にされてゐる。

『先生、どうしても私を一人ぼつちにしてお歸りなの。私が死んぢやつても可愛さうだとは思つて下さらない？　先生、私はお父さんもお母アさんも無い……本當に頼り無い哀れな一人ぼつちなの、それは先生も御承知ネ。』

『えゝ〳〵能うく知つてゐます。だけど須うちやん、私は……私は……』

『ではやつぱり此の船で東京へお歸りなの？　ぢやア私も一緒に伴れてつて下さいネ。ね、先生……』

『それはいけません、須うちやん、あなたは私を愛の足りない薄情なものだとお思ひでせうが……私は、私はやつぱり歸らなければならないのです。だけど神様はきつと……』

『きつと此の病氣をなほして下さるでせうか。』

『えゝ／／きつと／／おなほし下さるヲ。』

ナオミが斯う言つた時船の中から五六人の若者が一度に『嘘つき！　大嘘つき！』と聲を揃えて呶鳴つた。

『まア夢でよかつた！』ナオミは蒲團を撥ねてそつと起直つた。身體中一面に汗でびつしよりになつてゐた。時計を見るともう四時である。小さい羽根のある蟲が一つ電球の周圍をめぐつて、かすかな羽音を立てゝ居るのが、はつきりと聞取れる程の靜けさであつた。

ナオミは寢まきのまゝで足音を忍ばせつゝ須基子の室に行つて靜かに障子を開けると、

『誰ッ？』須基子は頭をあげた。

『もうお眼覺め？』

『えエ、三十分も前から眼が覺めてるのよ。先生にお祈をして戴かなかつたもんだから、こはい夢を見てよ。本當に……』

『そんなに安いのですか、少々酸ッぱくッたつて、あれを僕の故郷へ十ばかりも送つてやらうものなら、喜ぶ事でせう。』

『お國はどちら？』

『嚴手縣です。』

『嚴手縣？……あッ、あの海嘯のあつた所ですネ。』

『えェ其の海嘯の爲に僕の兩親は死にましたので……』

『まア！　では御兩親は海嘯にお淩はれになつたの？』

ナォミは氣の毒さうに覺也の顏を見た。

『忘れもしない、二十九年の六月十五日、丁度僕は十歲でした。』と言つた覺也は暫く默つてゐたが、『三萬七千人からの死傷者でしたから、僕一家ばかりの不幸ではありませんが、あの時僕の家は半潰れになつて、兩親とも悲慘な最後をとげたのです。子供心にも何といふ神の罰だらうと……今だに其時の恐ろしさが頭の中にしみ込んで居ます。それから僕はゼームス博士に引取られました。』

『おや、石塚さんですか、お珍らしい事。私も是非一度お伺ひしたいと思つてました所で、くまア入らして下さいました。』とナォミは丁寧に挨拶しつゝ座蒲團をすゝめた。

『此間も一寸伺つたんですが、田原さんが入らしつて何だか御相談事でも有るらしいやうでしたから、失禮しました。』

『さうですか、ちつとも存じませんで……』

『どうせ何にも用は無いんですから。今日もツィ散歩かた〳〵御伺ひしたのです。もう大抵町の樣子もわかりました。』

『さうでせうとも、何しろ狹い町ですから、三日も歩けば大抵おわかりでございませう。』言いながらナォミは障子を開け放つて『お暖かでせう、こちらは？』

『南國ですな、夏蜜柑がもう黃ばんでゐますネ。』

『一月も前からですワ。名古屋あたりへどん〳〵出るさうです、一個が一厘か二厘で。』

『ゼームスさん。あの弘前に居らしたゼームスさん？』
『さうです、僕はあのゼームス博士の御世話で白金學院へ送られたのです。』
『神學部でゐらつしやいましたのネ。』
『えゝさうでした。しかし……』覺也は一寸言葉を濁して、『僕は考へましたよずゐぶん。神學部を出たのだから直接傳道をしなけりやアならないんだが、傳道といふ事を說教と禮拜だけだと狹義に解釋しないで、僕は新聞記者になつて筆で傳道してみたいと思ひましてネ、此事を卒業前にゼームス博士に言送ると、博士夫妻は非常な反對でした。多分私が信仰から離れてしまつたとでも思つたのでせう。能く有る例で學校を卒業するまでは神よ祈禱よと言つて居ても、卒業となるとまるで正反對の商買を初めたり、基督教の惡口を言つたりする連中が、今までに數限りなくあつたのですからネ。僕もやはり其の裏切連中の一人だと思はれたのでした。同窓生も僕の爲にいろ〳〵心配してくれて、自修寮の連中は僕の爲に祈禱會まで開いてくれました。しかし僕の意志が先づ博士夫妻に諒解され、遂に學院の教師達にも理解されて、そして田舍新聞の記者といふ段取になつたのです。三人五人の信者求道者を一週間に一度づゝ會堂へ

集めて繰返しごとを言つたつて詰りませんからな。』
『だつてたツた一人に說教することも、無意味ぢやアありますまい。私、さう思ひますワ。』
話なかばへ女中のお末が顏を出した。
『先生、松本さんが入らツしやいました。こちらへ御通し申しても宜しうございますか。』
『松本時子さん？　さう、珍客だワネ。石塚さん御免下さいましよ。』
ナオミは玄關まで出迎へて、
『まアお珍らしい事、さツ、どうぞ……丁度いい所なのよ、石塚さんが來てらつしやるの。』
『石塚さん？　あの落陽社の？』
『さうよ。』
『やはり白金學院出ネ。』
『さう、何でも御承知ネ、あなたは。』
二人は並んで廊下を歩きながらナオミの室の外まで來た。
『さあ、どうぞこちらへ！』

時子は愼ましやかに座敷へ通つて覺也と初對面の挨拶をした。色白の細面に似合ふ金縁眼鏡は、才はじけて見える顏をいよ〳〵引立たした。どちらかといふと稍大きめな口から鯨の骨のやうな美しい齒並を見せて、絶えず微笑を含みながら、頭を少し左にかしげては相手の顏をしげ〳〵見入るのが時子のくせであつた。

『たしか牧師をなすつてらつしやる音無信次さんと、御一緒にお着きになつたんですワネ。』

『はア、熱田から同船しまして、』

『さうでしたか、い〻御都合でしたワネ。』

時子は溢れるやうな愛嬌を見せた。

『紀州灘は初めてでしたから、本當に愉快でした。』

『浪はお靜かでしたの？』

『まア靜かな方でした。紀州領へ入つてからの海岸の風景には驚きましたネ。あの鬼ケ城を甲板から見た時、思はず音無君と一緒に聲を擧げましたよ。』

『本當に熊野の景色はよろしうございますのネ。』

『暖かくツて、景色がよくツて、幸福ですネこ〻らの人は……』

『しかし人情は風景程にい〻かどうか知れませんワネ。』

時子はナオミの方を振向きながら言つた。ナオミはにつこと笑つてかすかにうなづいたが、

『音無さんとは餘程以前から御懇意で居らつしやるの？』と覺也に對つてきいた。

『八年前から知つてゐます。僕が普通部の一年に入つた年でしたネ。クリスマスにハウプトマンの一幕物の餘興がありましたのは。あの時の牧師コルリンが音無君で……さう〳〵ケエテヲツケラアトが……』と言ひかけた時、

『よしませうよ、そんなお話は、』ナオミはあわて〻覺也の言葉を遮ぎつた。

『やツ、お揃ひだネ。』音無は元氣よく座敷へ入つて來た。

『今丁度君の噂をしてゐた所だよ。』

『大伴君もいよ〳〵明日は歸るツてネ、船は何時に着くんです？』
「さア、多分夕方の四時頃に三輪崎へ着くんでせう。』
『さうですか、三輪崎まで一緒に迎へに行くかナ、石塚君。』
『行きたいんだが、編輯の都合で行かれるかどうか……』
『なアに鋏を少し多く動かして早く締切るサ。鋏と糊とが面倒なら、どつかの新聞をそつくり其のまゝに借用するんだネ。三面記事なども場所と姓名とを、ちよい〳〵と書變へて置けばいいぢやないか。』
『さうだ、君達が日曜の朝寢床の中で讀んだ說教集の文句を、食後に直ぐ敎壇で吐き出すやうにネ。』
『これはひどい、石塚君もなか〳〵隅へは置けないよ。熊野へ來るとみんな口が惡くなる。』
二人は思はずどツと笑つた。もらひ笑ひをしてゐた時子は、ナォミの方を振向いて、
『あなたも行らつしやるの？』
『私？　私はお留守居。』

『ぢやア誰が行くんです？』音無は側から口を出した。
『御隱居と須基子さんと、田原ドクトルも行つて下さるさうです。』
『ぢやア僕も田原君と一緒に行くかナ。時子さん、あなたは行らつしやらない？』
『私？　私どうしませう？　お出迎へすればいゝのですけれど、何しろ十年もお目にかゝらないんですから、御互ひに顏も忘れてゐませうし、何だか變ですワネ。だが、ナォミさん、あなたはなぜお迎へに行らつしやらない？』
『ナォミさんは留守師團長だとサ。』音無は笑ひながら起上つて、『僕はまだ四五軒訪問しなけりやならないから、お先へ失禮します。御兩君はまアごゆつくり。』
云ひ捨てざまに音無は襖を開けて出て行つた。
『まアお宜しいぢやありませんか。』ナォミは送り出しながら言つた。音無は玄關で靴をはいてナォミの手から帽子を受取らうとした時、ナォミの眼に涙の光るのを見た。
『どうなすつた？』
『どうもしやしませんワ。』とナォミは笑ひに紛らした。

音無が氣にかけながら、『さやうなら！』と振返り〳〵門を出たあとで、ナオミは障子を閉めると共に柱の姿見の前でそつと涙を拭いた。なぜ悲しくなつたのか自分でもわからないが、涙があとから〳〵湧いて來る。

ナオミが座敷へ戻つて來た時は、初めて會つた同士の時子と覺也とがもう馴々しく縁側の欄干にもたれて、權現山の上に飛び交ふ烏の群を見てゐた。

『何を見てらつしやるの？』

ナオミは時子の肩に輕く手を置いた、

『鳶と烏の戰爭よ、ね、ホラ……面白いのよ。』

云ひつゝ時子はナオミを自分と覺也との間に立たした。そして三人は熊野河口の白い浪を眺めながら十分ばかりいろんな話をしてゐたが、大寺の鐘が五時を知らしたのを合圖に、覺也と時子とは一緒に太地家を出た。

『石塚さん、熊野權現の櫻をみて歸りませう。』

時子は門の外へ出た時、かう云つて覺也の顏を見上げた。

翌る日、覺也が新聞社から歸ると直ぐ俥を呼んで宿を出たのは三時過であつた。三十前後の屈竟な車夫が、大きな牝犬に先曳をさせながら矢のやうに走つて、間も無く勾配のゆるい坂路へ差懸つて二三町も登つた頃、トンビや赤ゲットの田舍びた三四十人の一行と摺れ違つた。

『何です？　あの連中は？』

『奥州兵衛の熊野まゐりです。』

『さうかい、僕も奥州兵衛の一人だが……』

車夫は何にも言はなかつた。曲りくねつた坂をゆる〳〵と登つてゐる間に、覺也はふッと一月前に那智の觀瀑亭へ泊つた時の事を想ひ出した。

あの廣い御寺のやうな縁側で瀧を觀てゐた時、ナオミと須基子とに偶然出會つて、ナオミが宿の若いかみさんと話してゐる間に、須基子と二人で彼の瀧壺を觀に行つて、拜殿の所から細い路を一町ばかり樹の根に縋つたり、岩の上を這つたりして瀧壺の眞ぎはまで行き、冷たい飛沫を浴びながら八十丈の高さから落ちて來る、練絲のやうな瀧をまた〳〵きもしないで見入つた

時の有様が、ツイ昨日のやうにあり〳〵と頭の中に浮んで來た。

『石塚さん、こはいワ。』 斜になつた巖の上から須基子が泣聲を出したので、『大丈夫です。』と兩手を廣げて須基子を抱いてやつた時の事は今でも、まざ〳〵と眼にちらつく。二十二に明けたばかりの青年が、妙齢の女性から聲をかけられるだけでも胸のどよめきを禁じられないのに、ましてや、ふうはりと綿のやうにもたれて來た須基子を、あの樹立の深い巖蔭でたとひ二分三分の短い間であつたにしろ、助け合つて手を取合つて歩いたといふ事は戀でも何でも無かつたにしろ、生涯記憶から離れられない大きな出來事であつた。

覺也は俥の上で眼を閉ぢながらこんな事を追憶してゐると『石塚さん！』と矢庭に聲をかけられたので、びつくりして眼を開くと、聲の主の時子が路傍の小い岩の上に立つてゐる。

『あなたも三輪崎へ行らつしやる？』覺也はドキマギしながらきいた。

『どうせ用の無い身ですから……もう三十分も前に家を出たんですが。あまりいゝ景色なもんですから……あなたも車をお降りなさいナ。こゝは二軒茶屋ッて昔は旅人の休み場だつたのです。私、今こんな事を思つてゐましたの……彼のパウロが、』 と云ひかけて、『まア一寸お降

りなさいナ。まだ時間は大丈夫ですよ。汽船の着くのは四時ですから。』

『パウロがどうッて？』言ひつゝ覺也は俥からおりた。

八重の眞盛りに咲亂れてゐる下で、美しい白い齒を見せつゝ立つてゐた時子は、

『使徒行傳のおしまひの方に、パウロが死を決してロマの都へ行つた時、ロマにゐた信者達が、Three Taverns（スリー・タバーンス）といふ所まで迎へに行つたとあるのを三つの館（やかた）と譯してゐるでせう、三つの館は可笑しいのネ。餘り直譯過ぎますワ。私が聖書の改譯委員だつたら三軒茶屋と譯しますワ。』 言ひながら二人は畦傳ひに小山の方へ歩いた。

小半町も行くとそこに大きな黑い巖があつた。時子は身輕に其の巖の上に登つて、

『石塚さん此所へいらつしやい。本當に景色がいゝんですよ。』

覺也も續いて登つて行つた。

『ね、いゝ景色でせう。』 時子は微笑を含みつゝ『ホラあしこの絶壁、あれが御手洗（みたらひ）ッて言ふのよ。神武天皇が御手を洗ひなすつたといふ傳說（ツラッション）があるのよ。』

『ツラジションなんかどうでもいゝが、兎に角絶景だネ。』

覺也は首を伸して海岸を眺めた。其時街道から、

『おうい、一緒に行かないか。』と呼ぶものがあつたので、覺也は惡事でも見付けられたやうに、胸をどきつかせながら振返ると、俥の上から田原がこつちを見てゐる。

『あら先生御一緒に參りますワ。』時子は裾もホラ〳〵街道の方へ畑中を小走りに走つた。

『まだ時間はあるがネ、三輪崎へ行つて待つとしよう。鯨の吸物でも出るだらうから。』

田原は笑ひながら言つた。

『鯨の吸物？』と覺也は好奇の眼を見張つて問ひ返すと、

『はゝゝは、鯨がいやなら碁石の吸物にしよう。鯨と碁石は熊野名產だから……』

田原は滿面に笑を含んで覺也の顏を見た。

『正直ネ、あなたは。』

時子は覺也の方を振向きながら笑つた。

三人が三輪崎へ着いた時は四時を二十分ばかり過ぎてゐた。船待宿の女中に案內されて二階へ通るとそこにはお常と須基子が音無牧師と話してゐた。で、六人が車座になつて五分ばかりも話したと思ふ頃、港の外で汽笛が鳴つた。

『早いな、まだ四時半だぜ。』と云ひながら田原は時計を出して見てゐると、宿の女中が、もう十分ばかりで瀨取が出るから濱まで出てゐるやうにと知らして來た。

須基子は嬉しさうに障子を開けて、岬の方を覗いたり起つたり坐つたりして、ちつとも落つかなかつた。

『須基子さん、もう濱へ行つて見ませうや。』

音無がかう言つて立ち上つたので、一同は一緒に二階を降りた。

石疊みの路傳ひに濱邊へ出ると、靑だの赤だの刺戟の强い色で、いろんな模樣を描いた舟を引揚げてある其側で、赤銅色した子供達が貝殼を集めて砂いぢりをしてゐる。

『叔父さんて、脊の高い人？』須基子がきくと、

『祖母あさんだつて十四年も會はない人だもの、忘れてしまつたよ。』と云つたお常は、急に

うつむきこんでしまつた。冷い風が松原からさツと吹いて來て、煙のやうに砂が舞上る。
『こいつは酷い！』といつて音無が漁船の蔭へしやがむと、お常も時子も須基子もみんなそこへ集つて來た。
『浪が高いから艀舟が難義だね。』
田原は汽船の傍で木の葉のやうに搖られてゐるはしけを見詰めながら言つた。
『大變な浪ですネ、本船で暈はなかつたものでも、あのはしけですつかりよつてしまひますよ。』
覺也は帽子を片手で押へながら、自分が上陸した時、浪の高かつた話をした。
『あれ、あの小さい窓からはしけに乘つてゐますワ。をぢさんもきつとあの中にゐらつしやるんだワ。』
須基子は田原の傍で高浪に搖られながら來るはしけを眺めてゐた。はしけが段々磯ぎは近く漕ぎ寄せて來た時、
『堅爾君の顏を確かに覺えてる者はこゝに一人も居ないんだネ。』と田原は一同を見廻した。

『呼んで見ませう。』音無は帽子を高く指上げて『大伴君……』
すると艀舟の中程に立つてゐた青年が茶色の中折帽を振つて答禮した。
『あれだ〳〵、やつぱり寫眞に似てゐるな。』と田原は笑つた。お常もほゝゑみながら須基子の後に立つてゐた。
艀舟が着いた時出迎人一同は浪打際まで走つて行つた、しかし勢よく浪がザアーツと打揚げて來るので、みんなはキヤツ〳〵言ひながら又た小高い所まで逃げ戻つた。
船頭は長い板を持つて來てはしけに橋を架けやうとした。が浪が高くて思ふやうにならないので、一人の屈竟な男が襦袢一枚で浪の引いた隙をねらつては船客を一人々々濱まで負つて渡し初めた。何しろ一人々々だから三十分たつても半分も渡し切れない。
『成程日本は世界の一等國だネ、此の文明の上陸法を見給へ！』
田原は皮肉な笑ひを洩しながら音無を顧た。音無が何か言はうとした時、
『をぢさんよ、今おんぶしたのは……』
須基子が甲高い聲で言つたので、一行は二三間前の方へ小走りに走つて行つた。

『やア堅爾君。』 田原は駈寄りざまに握手した。
『田原さんですか。』 と堅爾は稍や顫へを帶びた聲で、『一昔になりますが、いつも御變りなく……どうも兄貴は長らく……』
『音無信次です。』
『おう、神學部に居た？』
『石塚です、自修寮で、あなたが寮長時代に普通部の三年にゐました……』
『さう〳〵、石塚覺也君、能く覺えてゐます。あなたもこちらに？』
『田原さんの經營なすつてる新聞社の方に働いてゐます。』
『學院時代の友人が、お二人も揃つて……實に奇遇ですな。』
堅爾はやがて須基子とお常との立つてゐる所へ來た。
『堅爾、よく達者で……』云つたきり、お常は暫く言葉をとぎらしたが、やがて須基子の方を見つゝ『これが須基子だよ……お前が國を出た時は、まだ物の言へない頃だつたが、もう今年は十六だよ。』

『ねえ……もう十六か……』
堅爾は感慨に堪へないらしく默然としてゐた。

『石塚さん、あなたはフレンチがお上手ですッてネ。』時子は甘へるやうにきいた。
『いゝえ、誰がソンナ事を云ひました。フレンチなんかまるで知りませんよ。』
『御謙遜ネ。』
『本當ですよ。』
『では、ヂヤアマンはお得意でせう？』
『ヂヤアマンならば讀めます。』
『さう、うれしいワ。私、實はヂヤアマンが習ひたかつたの、あなた敎へて下すつて？』
『敎へる程の力はありませんよ。』
『いゝのよ、敎へて頂戴ネ。此間中西さんに勸められて藤澤古雪さんのハイマートを讀んでみたの、大變面白かつたので、どうかしてズウデルマンやストリンドベリイをぢかに讀んで見たいの。ね、石塚さん、明日から私、敎はりに行きますワ。』

二人は太地家を出て、淋しい町を東へ三町ばかり來てゐた。もう十時を過ぎてゐたので材木問屋ばかりの舟町筋はひつそりとして、そこ〻の軒燈が薄暗く光つてゐるばかりで、兩側の家は大抵戸をおろしてゐた。
『ね、敎へて頂戴ナ。』時子は甘へるやうに言つてピタリと覺也に寄り添つた。覺也は默つて歩いてゐたが、ゆふべ熊野權現の境内で、美しい夜櫻の下を時子と肩をならべて歩いた事やら、今日二軒茶屋で美しい海の景色を、一ツ岩の上に連んで立つて眺めた事やらを思ひ出した。そして覺也の心は何となく躍るやうに感じた。
『お伺ひしてはいけない？　良妻賢母主義ネあなたは。ね、石塚さん。私、かう思ふのよ。短い人生ですもの、詰らない事にびく〳〵して過してしまふなんて馬鹿げてゐますワ。私、ハイマアトを讀んでつく〳〵感心しちまッたワ。因襲に俘はれた人の眼からは危險に見えるかも知れませんが、どうせ一度は襲つて來る思想ですもの。私なんか石塚さん、本當に自由なのよ、小鳥のやうにネ。毎日行きたい所へ行き、歌ひたい事を歌つてますワ。石塚さん、古い文句ですが若い時は二度無いのネ。出來るッたけ自由に花々しく……』言ひかけて時子は立止つてス

カーフを一寸直し、『私、寒くなつたワ、あなたは寒かアなくツて？』

追縋るやうに時子は覺也の右側へ寄り添つて來た。青春の血の漲つた若い二つの肉體が衣一重を隔てゝ觸れつ離れつ人目の少い薄暗い町を歩いてゐる時、覺也の神經は俄かに鋭くなつて、時子が話す度に送る息の香が、自分をまだ行つた事の無い未知の世界へ引張つて行かねば置かないといふ、強い〳〵力を持つてゐるかのやうに感じた。

『石塚さん、どうなすつたの？』

『どうもしやしません。』

『だつて、默つてらつしやるぢやないの？』

『僕は今、獨逸語の事を考へてゐたのですよ。』覺也は出たらめを言つたのである。

『教へて下さるワネ、私、明日からお伺ひしますワ。エンゲリンの一を持つて行きますワ。』

時子は石塚を見上げながら其の袖をひかへるやうにして言つた。

『では、おさらひをするつもりで始めませう。』

『うれしいワ。私、勉强しますよ、一所懸命にネ。』

二人は舟町を突當つて本町通りへ出ると、『あの向ふに黑い森が見えませう。あの下が私の宅なの、途中が淋しいのよ。送つて下さる？』

『お送りしませう、そんなにまはり路でもありますまい？』

『さう。だけどすみませんワネ。』

時子が先へ立つて行く暗い途を、覺也は彼女から三尺ばかり離れて默つてついて行つた。

『あすこなの、私の家は。一寸お休みなすつてらッしやいな。』

『いや、もう失禮致します。』

『ぢやア、明晩ネ……今晩は晩いから無理には願へませんワネ。』

『明晩は常仙寺の談話會で僕が講演をする事になつてゐるので……』

『ぢやア明後晩……きつと！　忘れるときかなくツてよ！』

翌る朝出勤の途中、覺也は一町程わざ〳〵迂り路をして時子の宅の前を通つてみた。街道筋

から十間ばかり奥へ引込んだ蜜柑畑の中に立つてるあつさりした西洋風の二階家であつた。庭前の大きな山櫻が散殘りの花をつけた枝を屋根の上まで伸ばして、四五羽の雀がちゝちゝと鳴いてゐる。『まつもと』と書いた瀬戸の表札が街道からはつきり讀まれる。

覺也は一寸立止つて見たが、さゝさと夢中に早足で歩き出した。新聞社へ行つても何だか浮々して仕事が手につかない。受持の論說を書きかけたが一二枚書いては引裂き二三行書いては引破り、一時間ばかりかゝつてやつと四五枚書いた。で、手當り次第にいろんな新聞を拾ひ讀して、面白さうな社會記事を十ばかり切抜いて、それで一の面を埋めて置いた。そして十二時前に社を出て町をどこへ行くといふ目的も無く、唯ぐる〳〵と駈け廻つて下宿へ歸つたのは二時過であつた。

覺也は食事のあとで、ぼんやりと机に頰杖突いてゐたが、三時過にまた下宿を出て、ぶらぶらと町を歩いた。やがて小い坂を越えて教會の前まで來ると、音無牧師と田原ドクトルとがつれ立つて來て、

『やア石塚君、昨晩は失敬した。』

音無は近よつて來て彼の手を握つた。

『もう編輯は締切つたのですか。』田原はにこ〳〵笑ひながら問うた。

『えエ、もう締切つて清水君に後を頼んで置きました。』

覺也は餘程ドギマギしたが、強いて平氣を粧つてゐた。

『では、王子ケ濱へ行かう、晩雅樓へ。』

田原の言葉の終らないうちに、音無は、

『晩雅樓で今晩說教するんだが、面白い集りだぜ、乞食が來るんだからネ。』と言つて覺也の魂の隅々までも覗き込むやうに、ぢろ〳〵と其の顏を見詰めながら、『石塚君、少し顏色が悪いやうだぞ。』

『別にどこも悪くはないが……今夜は先約があるので失禮します。用事がすんだら後からでも御伺ひしませう。』

『是非來てくれ給へ、實は讃美歌を助けてもらひたいのだ。』

『讃美歌？　僕では駄目だよ。』

『なアに、學院時代に聖歌團の一員で、しかもベースで鳴らしたものぢやないか。』

『だつて近頃はもう駄目だよ。』

二人に別れた覺也は物に追はれたやうに急いで下宿に歸つた。そしてすぐ風呂に浴つて襦袢も袷も新しいのと着換へ、魚子の羽織を引かけて火鉢の前に坐つてみた。

『まだ飯が濟まなかつたッけ。』と小聲で言ひながら無意識に火鉢の縁を火箸で輕くたゝいた。時計を見たがまだ四時五分だ。こゝの夕飯は大抵五時半だからマダ一時間も間がある此のまゝぼんやりしてゐるのも馬鹿々々しいと思つたので、又た家を出てうか〳〵時子の宅の方へ歩いて行つた。しかし時子の家の壁が櫻の葉蔭に見え初めた時、何だか急に愧かしいやうな恐ろしいやうな心持になつたので、いつそ思ひ切つて引返さうかとも思つたが、丁度角の石屋で若い男が綺麗に磨き立てた大きな石碑へコッ〳〵文字を刻つて居るのが目に留つたので、二三歩近寄つて見るとはなしにそれを見て居ると、不意に後から『石塚さん！』と呼ぶ者があつた。覺也はびつくりして振向いた。石屋も鑿の手を止めてこちらを見た。

『まア石塚さん！　どちらへ？』

時子に聲をかけられた覺也はよつぽどマゴ〳〵した。時子は風呂からの歸りと見え、大きなタオルと小い金盥とを抱へてゐる。白粉氣の無い湯上りの顏がホンノリと紅らんで、金縁の眼鏡が美しく光つてゐる。英ネルの單衣に葉出なおめしの羽織を無ざうさに引かけて、羽織の紐をダラリと下げてゐるのが如何にもあだッぽく見える。

『昨晩は失禮致しました。私、これから御宿へ御伺ひしようかと思つてゐましたのです、さアどうぞお先へ。』時子の調子は昨日にひきかへ艶な容子と不似合に凛然としてゐた。

『をばさん、お客樣よ。』時子は玄關の所からさう言ひ置いて、覺也を二階へ案内した。覺也は少し怖ろしいやうな氣持で二階へ上つて見ると、美しい花模樣の筵を敷き詰めた眞中に四角なテーブルを据ゑて、ミッション風の角椅子を四五脚周圍に並べてあつた。

『さ、どうぞお掛け下さい。』言ひつゝ時子は西日を受けた窓際のソーフアに腰を卸した。覺也は默つて椅子の後に立つたまゝ壁の油繪を見入つて、

『誰です？　これは。』

『名も何にも無い人でせう。フランスから歸つたお友達のお土産ですが、多分セザンヌか誰か

の弟子ぐらゐかも知れませんワ。』
『全體何を描いたんでせう？』
『山ださうですよ。土を掘つたあとなんですとサ。』
『僕は又、西瓜の腐つたのかと思ひましたよ。』
『ずゐぶん酷評ネ。思ひ切つた事を仰しやる！』
『酷評でも何でもありません、僕にはちつとも繪がわからないんですもの。』
言ひつゝ覺也は椅子に腰を掛けながら傍の書棚を見ると、『良人の自白』『靈か肉か』『火の柱』『巴里』『モリエル全集』『父と子』『其前夜』などか並んでゐる。其下には英書が五六十冊。トルストイやツルゲーネフの脊文字が光つてゐる。
時子は呼鈴のボタンを押へながら、『石塚さん、あなたは小説をお嫌ひ？』
『あんまり讀みません。シエークスピーヤだのアービングだのを教科書として讀んだ位なもので、日本のものは新聞や雜誌に載つたのを時々拾ひ讀しますが……』
『文學を解さないお方は本當にお氣の毒ネ。私なんか全く小説がお友達よ。』

覺也には返事の仕樣がなかつた。そこへ下から五十恰好の女が上つて來た。
『をばさん、クキスが燒けてゐませうネ、それからコーヒの濃いのをネ。』
『畏りました。』女は直ぐ引さがつてしまつた。
『私、此間からマダム、ボヴリーを讀んでますのよ。』
『マダム、ボヴリーてのは誰の作です？』
『フローベルよ。私、あのエマといふ奥さんに本當に同情しましたワ。』
『どんな筋ですか、梗概だけでも伺ひたいもんです。』
『ではお話いたしませう……一寸失禮しますよ。』
時子は憶ひ出したやうに梯子段をおりて一言二言何か言ひつけたらしかつたが、直ぐ上つて來て覺也の右側に坐を占め、エマがシヤルルと結婚して失望した顚末から說出して、小說好のレオンと戀に落ちてから俄に活々して來た話を語り終つて、
『私、本當にさう思ひますワ。元氣だとか活潑だとか云ふのはみんな性慾ですよ。滿たされた生が張切つてそれが事業や宗教になつて、いろんな方面に發揮されるんだと思ひますワ。』と

言つた時、をばさんがお膳を運んで來た。

『さ、何にもありませんが、どうぞ召上つて……私もお相伴致しますワ。』

時子は再び坐を變へて覺也と對ひ合せになつた。覺也は默禱して箸を執つたが今朝からのいら〳〵した氣分がいつとなくやはらいで、時子の話を感心してぢつくりと聽くやうになつた。

時子は食事半ばに想ひ出したやうに、『それからエマとレオンはたうとうお互に打明けないで別れたんですが、レオンが巴里へ出る時、もうこれが一生の訣れかも知れないと思つたから思ひ切つてエマを訪問したが、やつぱり明らさまには言ひ出せなかつたので、エマの產んだ赤ん坊のベルタにキスして其まゝ默つて別れた所が私、本當に嬉しいのよ。』

時子は片手の茶碗の模樣を見詰めながら言つた。

巨人の兜のやうに見える蓬萊山を左に眺めながら、二人は秦の徐福の墓の近くを田圃路の方へ出た。

『私ネ、男の方には誰にでも出來るだけ甘へるの、行きなり甘へて見るのよ。あなたにだつて此間からずゐぶん甘へましたワネ。さうして二三時間も話して見ると、大抵な男の方のお心はすつかり解るやうな氣がしますのよ。』

覺也は傷痕にでも觸られたやうな氣持がした。

『男ツて本當に弱いものネ。一旦童貞を捨てた男は尙々駄目よ。男ツてものは大抵男の心で女の心を推察するから女に馬鹿にされるのよ。自分がかつえてると、ひとも餓えてるやうに思つてネ。私、本當に女に產れた事をつく〴〵感謝しますワヨ。』

『さうですか……』と覺也は一向氣乘りのしないなま返事をした。

『本當にさうよ。』と時子は疊みかけて、『女は處女を捨てゝも亦た元の處女になる事が出來ますワ。早い話が私にしても結婚もしました。戀愛もしました。けれども夫に死別れた今では再び元の處女の心持よ。十五六の時とちツとも違ひませんワヨ。だから私、男の方に甘へたり駄々を言つたりするの。女ツてものは斯うしたものネ。だけど男ツてものは童貞を捨てたらもう決して再び元の子供には歸られません。其の證據に十八九から一生後家を立通す女は澤山あ

りますが、二十や三十で妻に死なれて一生獨身で暮す男は萬人に一人もありますまい。妻に死なれた時は本當に悲しさうに嘆きます、そして自分の半身が切取られでもしたかのやうに悲しんで見せます。甚だしいのは亡くなつた奥様の傳記を書いたり、記念錄を發行したりなさるお方があるでせう。だつてそんなお方に限つて、其の書物の活字のインクがまだ乾かないうちに、もう第二の候補者を心の中で探してらつしやるんだワ。だから私、童貞を捨てた男は大嫌ひ。石塚さん！』と時子はピツタリと覺也に摺り寄つて『あなたも出來るッたけ、永く〳〵其の美しい童貞を捨てないでゐらつしやいナ。ね、石塚さん……』

覺也はこれまで女の口から斯んな話を唯の一度も聞いた事が無かつた。月を浴びた二人の長い影が青い麥の畑に映つて動いてゐるのを見た時、お伽の國で『女人の精』とでも話してゐるのでは無いかと思つた。

『しかし時子さん、今あなたの仰しやつた其のお二人が新しい戀を感じて結婚なすつたのならそれでいゝぢや無いですか、あなたは戀愛を非神聖なものと思ひますか。』

『戀愛？　そりやア美しいものですワ。だけど童貞を捨てた男の方には、もう戀愛なんてありませんワ。性慾なんですもの、みんな……』

『それは獨斷です。』

『いゝえ獨斷ぢやア無くツてよ。童貞を捨てた男ツてものは、もう終生性慾に生きてるんですワ。洒落を言つても笑つても、みんな性慾を連想して一から十まで性慾の事ばつかり心に止めてるんですワ。そして其の性慾を抑へ切れないで、いつでも新しい異性を追ひ廻すのよ。』

『それはあんまり殘酷な評ですネ。』

『殘酷でも何でもありませんワ、事實ですもの、ねエ、石塚さん、私は一度良人を持つたけれど心はバージンよ。ですから童貞が戀しいの。實は石塚さん、私、昨晩からあなたを散々試してみたのよ。そして、あなたが本當に清い初心なお方だつて事は、やつと解るにはわかりましたけれど、石塚さん！』時子は立止つてぢつと覺也を覗き込むやうにして、『石塚さん、あなたは今危い所に立つていらッしやるのネ。』

『何です？　僕が今危い所に……』

『あなたは今晩常仙寺で御講演をなさる筈ぢやありませんか。それに私が晩雅樓へ行くッて申

したので、つい浮々私についてらしつたのネ。』

覺也は心の中で『しまつた！』と思つたが同時に時子の意地惡い仕打を怨まざるを得なかつた。しかしわざと、おちつき拂つた風をして、

『さうでした、しかし僕が講演をしなくツても他に今一人話す方があるんですから……』

『さう？　だつて御約束なすつたのですから行つてお上げなさいよ。』

『何しろ晩雅樓まで御一緒に參りませう。』覺也はテレかくしにさツさと歩き出したが、どうしたものか此の意地惡い時子に對して、ちつとも憎しみの情が湧かなかつた。

『石塚さん、あの曲り角の所に俥屋がありますワ、私、行つて呼んで來てあげますから待つてらつしやいナ。』

時子は一散に駈けて行つた。覺也は四辻の所で待つて居たが、二三分すると時子は車夫と一緒に戻つて來て、

『マダ八時二十分前よ、講演會が終らない前に一寸でも顏を出してらつしやいまし。それからネ、御用がおすみになつた後で私の宅へお話しに入らツしやいナ。私も晩雅樓から十時過には

歸りますから。』

覺也は『有難う』と言ひざま俥に飛乘つて『馬鹿！　俺はよつぽどどうかしてゐる。』と口の中で呟きつゝ拳を固めて力一杯二つ三つ膝をたゝいた。憐れな愧かしい氣持が俄に込み上げて來た。帽子を脫いで髪の毛をむしつたり掴んで引張つたりした。其中に俥は勢よく二十分ばかり走つて常仙寺の表へ梶棒をおろした。

見ると本堂にはランプが燈つてゐて、上り段の所には二三十足の下駄が並んでゐる。覺也は暫く氣遲れがしてモヂ〳〵してゐたが思ひ切つて緣側へ上つて行つた。

『石塚さん、此頃ちつともお見えになりませんネ。』

『ツイ社の方が忙しいもんだから……御無沙汰ばかりしてゐます。』

『私、今日から獨逸語を敎はりに來たのよ。あなたを驚かさうと思つて一所懸命ジヤーマンコースを讀んで見たんだけれど、やつぱり獨習は駄目ネ。』

時子は紫縮緬の包からエンゲリン讀本を取り出した。
『ルーサアの話が書いててあつてよ。ルータアての。ルーテルての。どつち？』
『ルツタア（LUTTER）ださうです……』
覺也は机を眞中に持出して對ひ合せになつた。時子は恥かしさうに顏を紅くして讀本に眼を落した。覺也は近視なので顏を書物に近寄せると異性の香が彼の心を木の葉のやうに搖ぶる。
『では、私、讀んで見ますワ。』覺也が一通り讀んで譯をつけた時、時子はほゝゑみながら讀本を一二寸自分の方へ引寄せて、すら〳〵と讀んで直ぐ淀みなく譯をつけた。
『其の調子で一年もおやりになれば、僕なんぞは直ぐ取殘されてしまひますよ。』
『だつて私、忍耐が無いのよ。』
『興味が出て來ますと、よせと言つたつてよされますまい。あなたの御氣象では……』
『さうなればいゝんですが……』
時子は讀本を包んで、きちんと坐つた膝の上に兩手を置いた。
『先夜は失禮しましたワネ。私、度々あの時の事を想ひ出しますのよ。どうしてあんな蓮葉な

事を申上げたらうと思つてネ。』
時子は耳朶を紅くして俯向いたまゝ羽織の紐をいぢつてゐた。
『僕は大變な教訓を得ました。何しろマダ學校と教會とより外の空氣といふものは殆ど知らないんですから、私共の社會觀といふものは四角な小い窓から見た社會觀ですからネ。私は彼の晩すつかり別世界へ投出されたやうな、急に大人になつたやうな氣持が致しました。』
『さう？　私、何とも御挨拶に困りますワ。そんなに仰しやられては……』
『それから時子さん……』覺也は急に俯向いて、『僕は此頃どうしたものか眞面目に祈れなくなりました。』
『まあ、どうなすつたんでせう？』
『今まで非常に强く感じた事でも、近頃は何の刺戟にもならなくなりました。どういふわけでせう？』
『もつと〳〵大きい刺戟を、要求してゐらつしやるんぢやア無くツて？』
『大きい刺戟とは？』

『燒き盡すやうな、火のやうな……』

覺也はぼんやりとして時子の容子を見詰めてゐた。

『石塚さん、も一度言はして頂戴ナ。處女と童貞とが相寄る所にのみ、眞正な戀愛が生じるのです。此外に神聖な戀愛は決してありません。私は童貞の……貴い童貞の所有者を愛したいのです。私の處女が燃えるやうな熱情で童貞を愛して愛して本當に愛して見たいのです。私はこれまでいろんな人にぶツつかりました。しかし大抵の男は駄目でした。私の望む童貞を持つてゐるお方は石塚さんあなたお一人よ。ですから、ね、石塚さん、さうした意味で……精神的にネ、私は本當に純粹な精神で、童貞を愛してみたいのよ。』

胸の中では熱火の焔えるのを感じた覺也は、眼が眩むやうになつて來た。

『時子さん！』と覺也は机を押のけて夢中になつて兩手を前に伸ばさうとした。

『あなた！　誤解なすつちやいけません！』

時子は飛のきざま、包を小脇に障子ぎはに寄つて、覺也が一寸でも乘出したら直ぐ緣側へ逃出しさうにした。

『時子さん！』覺也は机の上に身體を投げかけて、『もう僕はお目に掛りません。あなたと交際してゐては滅びです。』

時子は机の傍へ戻つて來て、『石塚さん、御免下さい、本當に惡い事を申しましたワネ。』

『いゝえ、お歸り下さい。もうお目に掛りません。どうぞ御歸り下さい。』

覺也は極度に自分と自分に愧ぢながら言つた。

覺也は其晩まんじりと眠れなかつた。彼れの頭は生來初めての混亂に遭遇したのであつた。

翌日新聞社へ行つても、クシヤ〳〵して何にも手に付かなかつた。

『清水君、僕はどうも頭痛がして仕樣がないから……君に此のあとを賴んで置くよ。一の面は此の投書と此の切拔で埋められるやうになつてゐるんだ。それから二の面はもう材料がすつかり揃つてますから……』

覺也が眉根に皺をよせながら、拳で頭を輕く二つ三つたゝいたのを見た清水は親切さうに言

つた。

『どうぞ、御歸り下さい。僕が引受けてやつて置きます。御顏色が大層惡いですから、ゆつくりお休みなさい。』

『では賴みますよ。』

下宿へ歸つた覺也は、和服に着換えてゴロリと疊の上に寢轉んだまゝぢつと天井を見詰めて先づ天井板の廣さを目分量ではかつてみた。それからそれが二間の通し板であるか、一間板の繼合せであるかを檢べてみた。そして木理(きめ)の細いのと荒いのとを比較してみた。

兩手の指を組合して、それに頭をのせて、板の木理を見詰めて居ると、それが急流のやうにも見え、渦のやうにも見え淵のやうにも見える。ぢつと眼を閉ぢてゐると、天井一面が大渦卷になつて、自分の身體が其の中に捲込まれてしまふやうに思ふ。

『あゝ〳〵』と嘆くやうに唸つて撥ね起きた時、トン〳〵と段梯子を上つて來る足音がして、『今日は！』と聲を掛けつゝスウーツと障子を開けたのは時子であつた。

『御免下さい、少し早過ぎましたワネ。さアどうぞ御着換下さいまし。』

時子にさう言はれて氣付いて見ると、覺也は寢衣の細帶を結んだまゝでゐたのであつた。覺也は狼狽(うろた)へながら、押入の中から縮緬の兵兒帶を出して、それを手早く結んで机の前に坐つた。時子は神妙な顏をして風呂敷包から讀本を出して、もう昨日の事は忘れたかのやうに平然と取りすまして火鉢の横へきちんと坐つた。よもやと思つたのがまたも不意討されたので、覺也は机に對つたまゝ暫く默つてゐた。

『今日は下讀みして來ましたから、三章ばかり進めていたゞきますワ。』

時子は膝の上に本を載せて、小聲で讀んでゐた。

『では次を讀みませう。』覺也は震へる聲を咳拂に紛らしながら一章讀んだ。

『お次をお願ひ致します。』

復た一章讀んで譯をした。

『もう一章お願ひしませう。』

續いて三章目を讀んだ。すると時子は『お直し下さいましよ、發音が惡いから愧かしいのよ。』と云つてスラ〳〵と讀んで直ぐ立派に譯をつけて、『有難うございます、明日は朝疾く

御出勤前に御伺ひいたしますワ。』

覺也は度を失つて返事が出來なかつた。時子は早速書物を包みながら、『左樣なら、』と小聲で言つた。

『左樣なら……』

言ひつゝ覺也は始めて我に歸つたやうな心持で時子を見上げた。今日の時子は昨日のやうにケバ〳〵しい裝(つくり)では無く、茶掛つた地味な袷に、白地の羽二重に簡單な草模樣を墨繪に描いた帶を、キチンと結んだ嫌味のない姿が、却つて平生よりは二つも三つも若く見えた。

時子は靜かに障子を閉めて、子供のやうにパタ〳〵と階段を降りて行つた。

覺也はワク〳〵と踊る胸を抱えながら、障子の所へ行つて廂の蔭から時子の姿が內庭へ現はれるのを待つてゐた。誰かゞ盥水でもひつくりかへしたと見えて、そこ〻に小い水溜りが出來てゐるのを、時子は護謨雪駄で飛び〳〵拾つて行つたが、ヒヨイと振向いて二階を見上げたので覺也は思はず二三寸しさつて、暫くしてまた障子の際から覗いて見たが、もう時子の姿はそこらあたりに見えなかつた。

其うちに風呂が沸いたと知らせて來たので風呂場へ行つた。彼は風呂につかつてゐる時、ふツとこんな事が心に浮んだ。

『時子の讀方が餘りうますぎる。どつかで勉强したに違ひない。彼女の先の夫は醫者で米國のドクトルだつたといふが、事によると獨逸に居たのかも知れない。すると時子は其の男に獨逸語を敎はつてゐて、十分知つてゐながら、此のおれをおもちやにしてゐるのでは無からうか。もしさうだとすればあの女は何の爲にこ〻へ來るのだらう？　こつちが眞面目にしてゐれば甘へて來る。甘へに乘ればスルリと拔ける。强くなつてゐれば艶(いろ)めく、弱くなれば眞向(まつむき)から敎訓と來る。いやだ〳〵、おれはきつとおもちやにされてゐるんだ！』

覺也は風呂から上ると直ぐ一通の手紙を書いた。

『紙面改良の爲、暫らくの間多忙に御座候間獨逸語の御稽古は御休み下され度候、いろ〳〵考へる所も有之候へ共何れ其中御目にかゝり申上ぐべく候。』

書終つて覺也は（種々考へる所も有之候へ共）といふ所へ圈點を打つた。それは此の手紙を見た時子がそれツきり、ふつりと來なくなつては、やつぱり淋しく感じるだらうといふ未練な

心からであつた。

女中に頼んで手紙を時子の宅へ持たせたあとで、時子からすねた〳〵怨みつらみの長い手紙が來るか、さも無くば本人が押掛けて來て、縋りついて泣倒れるか、どつちかであらうと思ひながら、それとなく待設けてゐたが、卅分たつても一時間たつても女中は二階へ上つて來なかつた。

覺也はこちらへかねて欄干の所から下を覗くと、女中はとつくに歸つて來たらしくせつせと緣側を拭いてゐる。

『おい、ねえさん、手紙の返事は無かつたかい？』と訊くと、女中は一寸二階の方を振仰いで、『いゝえ、何にもありませんでした。』とにべもなく言つた。

『さうか。』と云つたまゝ座敷へ戻つた彼は、自分の聲が泣聲であつたやうに思はれた。無論翌朝も時子は見えなかつた。

『御手洗の濱へおいでるんかノシ、そりやア此の廣い道を眞直ぐに行きなはれ、すぐ其の下が濱ぢやはノシ。』

二つの籠に小石を容れたのを擔いだ女は斯う言ひながら、音無の方を見向きもせずに、石ころの多い坂路を、『ハア、ヨイショ、ハア、ヨイショ。』と掛聲しながら登つて行つた。

音無は雨水の爲に眞中が谷のやうに掘れ凹んだ路を、幾度か轉びかけては危く靴を踏みしめ踏みしめ、一町ばかり降りて行くと、さあッ！　さあッ！　と岸を洗ふ波の音が左手の林を通して聞えて來た。

『もうすぐそこだナ。』と呟きながらトコトコと小走りに二三間走り降りると、急に右手がパーッと明るくなつて、道の兩側から參差んで茂り合つた雜木林の緣のトンネルの向ふに、かなり廣い青草の芝生が見えた。芝生は斜になつて濱の砂原まで續いてゐる、一疋の牛がもうタンノウしたといふやうな顏付でこつちを眺めてゐる。

『あゝ！』と音無は珍らしい物にでも飛付くかのやうに叫びながら芝生の所へ走り出た。涼しい風が濱に生えてゐる雜草を搖動かしながら吹上げて來たので、右の手で中折の眞中を攫んで左の手をポツケツトに突込んでハンケチを取出さうとしてゐる時、不圖芝生の向ふに小い乞食小屋のあるのに氣付いた。

音無は汗を拭きながら芝生を越えて小屋の前まで行つた。そして開放した戸の中を見ると、そこには三十七八でもあらうかと思はれる能く肥えた女が、垢拔のした、しかし所々繼布の當つた單物を着て圍爐裡の中に小い鍋を吊して、何だかコト〳〵煮てゐた。

『御免下さい、いゝ天氣ですネ、今日は。』と云ひながら音無は戸の中へ入つて行つた。女は山窩狩の巡査に脅やかされるたびに繰返すやうな驚愕と恐怖とを面に表はしながら、少しく睥むやうに、ぢいッと音無の顏を見詰めてゐたが、靴音に嚇かされた彼女は段々に、音無の洋服には金釦が無く其の腰にはサアベルが光つてゐないといふ事を意識して來たらしく、『何か御用事で……』と素直に言つて丁寧に頭を下げた。

『いゝや、別に用事も何も無いのですが、そこまで散歩に來たついでに一寸休ましていたゞかうと思ひまして……』

『まア、こんな所へ？』女は怪訝な顏で音無を見上げた。音無はニコ〳〵笑ひながら藁むしろの上に腰を卸したが、丁度其時表へ一人の男が來て、家の中を不思議さうに差覗いた。額のずんと禿げ上つた五十恰好の男で、前齒の二三本脫けた洞穴のやうに暗い口を少し開けて、『ようお出でなさいました。どこのお方か知りませんが？』と言つて不安らしい顏付で音無をぢろぢろと見た。兩の頰にぐッと顏の肉を殺ぎ取つたやうな大きな縱皺があつた。それが其の男を非常な惡人であるかのやうに見せた。

『いゝ天氣ですナ。今日は。』音無は快活に言つて海の方を眺めた。

『結構なお天氣です、我々に取つては本當に有難い日よりです。』

男は腰を掛けながら言つた。

『あなたはもう永く此所にお住ひですか。』言ひながら音無はぐる〳〵と家の中を見廻した。

座敷には藁席が二三枚敷いてある。杉皮の壁が漆で塗つたやうに眞黑く煤びてゐる。

『はい、かれこれ五年になります。』

『この家に五年も居たのですか。』

『はい、其の以前は新宮の川原に居たのですが、部長さんが立のけと仰しやるので……』男は俄に言葉を柔げて、媚びるやうな氣味悪い笑顔をしながら、『時にあなたは警察のお方ぢやアございませんか。』

『いゝえ違ひます。僕は耶蘇教の牧師です。』

『はゝア、耶蘇教の先生ですか。』男は安心したらしく女の方をふりむいて、『ぢやアあの晩雅樓の……』と言ひかけて二人はうなづき合つた。

『あア、此間の晩私は晩雅樓で説教致しました。これからも時々致しますから、どうぞお出かけ下さい。』

『有難うございます。田原先生にはいつもお藥をたゞで戴いてゐますので……』

『田原君を知つてゐるのかネ。』

『知つてゐますとも、かないが時々癪を起すので、其のたんびに田原さんのお藥を頂戴するのです。五年も七年も御恩に預つてゐますから、何かで御恩報じをせねばならんとは思つてゐる

のですが、我々の分際ですから時たま鰻を差上げたり鮎をお上げする位のものですが、それでもそんなものを差上げると（俺はお前達に物をもらふわけは無い）と仰しやつて、其の都度何かかを下さるので……』

『本當に田原先生には、もう……』と側から女も口を添へた。音無は話のいとぐちを尋ね當てたので非常に嬉しかつた。

『どうです、あなた方は斯うしてお暮しなさるうちに、本當に愉快だと思ひなさる日がございますか。』

『さうですなア、ありますナ。』男は笑ひながら音無の方へ少し身體を捻ぢ向けた。

『旦那は警察のお方ぢやアございませんから、今日はアケスケにお話し致しませうか。』

『お伺ひしたいもんだネ。あなた方の生活狀態を？』

『生活狀態？　そんな洒落たもんぢアありませんが、私もかれこれ三十年近く、こんな、なさけない生活をしてゐるんです。私は二十三の時あれと（顎で妻君の方を示しながら）一緒に故郷を飛び出したんですが……』

『お國はどちらです？』

『私もあれも、やつぱり此の縣のもので、日高生れなんです。』

『さうですか。僕も日高奥の者ですよ。』

『まあ。どちらでございますか。』

『寒川といふ所です。知つてゐますか。』

『はア、知つてゐますとも、私は高木村といつて海に近い所ですが、寒川へは度々鰻捕りに行きました。』

『鰻捕りに？』と言つた時音無は、折角話しかけてゐた面白さうな話の腰を折つてしまつた事を殘念に思つた。

『私は鰻捕り鮎捕りが仕事ですから。』

『鰻や鮎のとれない時節はどうなさるのですか。』

『其時は辻占賣と、これとですよ。』男は右の掌を上向けて二三度動かした。それは博奕の骨子を轉がす眞似であつた。日若い時に骨子や骨牌を弄ぶ仲間と交際した事のある音無には直ぐ

其の意味がわかつた。

『以前はそんな眞似も出來たらうが、今は現行犯で無くとも罰せられる規則になつたから、博奕は一切出來ないだらうネ。』

『旦那、それは歴々のお方の言ふ事ですよ。身に浸み込んだ事は規則や法律では、とても堰止められるものぢやありません。私もあれも性來コレが好きなんで骨子を轉がすまねをしながら二人は手に手を取つて國を出て西に東に所々方々を轉がり歩きましたが、あれは何所へ行つても樓蒲一の頭取りになつたもんです。所が旦那面白い事がありましたよ。』男は左も追憶の快樂を味ひたいといふやうな顏付をしながら、『こんな事があつたんです。それは丁度私共が故郷を出て八年目の冬でした。和泉の深日といふ所で土地の金持衆とちよぼ一をやつたんですネ。やつぱりあれの頭取で……所がどうして運が向いて來たものか、旦那衆が張つても張つても、みんなあれに奪られてしまふんです。私はあれの側で金の始末をしてゐたんですが、どうしても八九百兩は勝つたと思つたんですナ。其頃の八九百兩と言やア太したもんですよ。米が一石五兩でしたから……そこで私は腹をきめて、（此れは餘り不思議ぢや、一つ頭取りを

代へてもらはう。）と言ひましたので、大金持の主人があれに代つて頭取になつたのです。すると、私もあれも段々落目になつて來て、一兩張つてはとられ、二兩張つてはとられしてゐました、私は其時（今こそ博奕の止め時だ。）と思ひました。そこで私はわざと朝まで坐つて居るやうな風を見せる爲にまづ、褌を脱ぎましたよ……そりやア旦那、さうやつておちつきを見せたんです。それから私は其の褌の兩端を確と結び合して、其中へ宵から勝拔いたお金を少しづゝそつと容れましたネ。賭場へは思ひ切つて六七十兩のお金をほつちらかして置いて、（少し腹工合が悪い、此金を頼むぞ）ツてあれに言付けて置いて、褌を抱えたまゝ用足しに行くやうに見せかけて裏へ出たのです。そして、（おうい、元枝、ちよいと來てくれ、早く早く）と呼んだんです。するとあれは六七十兩のお金を隣りに座つてゐた男に頼んで置いて緣側へ出て來ました。そこで私共は其のまゝ跣足で裏口からぬけ出して、逃げた逃げた一所懸命に逃げました。孝子越をどう越えたか知らないで、翌朝和歌山在の木ノ本の八幡まで逃げて來まして、やつと追手にも追ひつかれず故郷へ歸つたのでした。さて八年振りで歸つてみますと年老つた私の兩親は食ふや食はずで難儀してゐました。そこへ私が七百三十何兩といふ金を持

つて歸つたので、まア兩親は喜んでくれましたが、妻の先の亭主といふのがやはり袁女道の仲間で、そいつがうるさい事を言つて來るので、私は五百兩を兩親にあげて置いて、又た二人で旅へ出て行つたのです。しかし、それからといふものは七百兩どころですか七十兩の金だつて、一度に懐へ納まるちふ事無しで、たうとう御覽の通りのお乞食樣におちぶれてしまひました。其間に監獄へも三度行つて來ました。あれも三人產んだ子はみんな死なしてしまふ。私も少々無茶な心を起しましてナ。』男は暫く俯向いてゐたが、『隨分面白い事もありましたよ。』と云つて冷たく笑つた。

『無茶な心とは？』音無は話の繼續を願ふやうな眼付で男の方を見ながら問うた。

『旦那は警察のお方ぢや無いから申しますが、私ア辻占を賣る時人間の心といふものを能うく見拔くんです。マア此の熊野の海邊では亞米利加へ出稼ぎしてる人の家へ目處を付けて行くんですナ。大抵マア一枚は買ひます。其時運勢の惡いのを一枚賣るのです。すると『今一枚！』と來ます。そこで今度は中等の所を一枚賣るんです。十人で五六人までは其の中等の次が極惡いか極善ェか、どつちかだと思つてきつと三枚目を買ひますネ。其時惡い運勢のを賣付ける

と、もうそれッきりで買ひませんが、お金を溜めるとか出世するとかいふ奴を當てがふと、どうも人間といふものはをかしいもので、そんな事は信用出來んと見えて、後へ後へと四枚も五枚も買ふんですよ。』

『ふん、それはどういふわけでせう。』

『そりやア旦那、人間てものは不幸が當り前で運の善ェのは萬人に一人ですもの、自分の息子や亭主がそんな富閥に當らうとは思はんのですナ。だから疑が起るんです。そこを見込んで安心させてみたり心配させて見たり、いろんなやつを賣るんです。もう其時は私らのやうな人間でも、まるで神様か佛様のやうで、其の人の心はすつかり自由自在に出來ますナ。若し私に先生達のやうな學問があつたら、日本中の人を自由自在にして見せますがなア。人間の心てものは淺墓なものですよ。はゝゝゝは。』

男は得意らしく語つて、腰の煙草容を靜かにはづして蓆の上に置いた。

『ふん、さうですかなア。』音無は全く感心してしまつたやうな態度で二三度うなづいた。

『旦那のやうな立派なお方が、私の乞食小屋へお出で下さるのは不思議な事ですが、それは商

買柄が違ふから不思議なんで、これが博奕となると面白いもんですナ、又た一種特別で乞食小屋も墓場もありませんよ。私が新宮の磧にゐた時、毎晩々々樗蒲一をあれにやらせたのです。すると、町の立派な金持衆が五人も十人もやつて來ましてナ。をかしいもんです、平生なら私共は其旦那衆のお家へ伺つても、内庭へも入れてくれないんでせう？　まして私達が座敷へ一足でも上らうものなら、乞食奴が！　と大目玉でせう。ところが博奕になると私の汚い小屋へお出かけですからナ。おまけにちよぼいちをやる時は、みんな妻に自由自在にせられてるんですもの、其時の金持衆はまああれの家來か足輕ですなア。』

男が洞のやうな口を開けて笑つた時、かみさんは『そんな事を、あんた……』と亭主を窘めるやうに言つた。

『なアンの、田原さんの御友達ですもの、かまふもんですか。のう旦那。』

男は音無の顏を覗き込むやうにした。

『大丈夫です、アケスケに話して下さい。』

『失禮な話ぢやが、旦那方のお宗旨でも私らのやる博奕のやうに、此の人間の魂を有頂天にさ

せられるものだつたら、あんな大きな立派なお堂を建てないだつて、乞食小屋へでも御説教を聽きに來る筈ですナ。』

『さうだ！』と音無は自分ながら驚くやうな強い聲で言つた。『殿をこぼちて三日に建つるものよ。』といふ言葉があるのです。大きな立派なお堂でなくつても、三日で落成する小屋の中で十分なんだ！』

其の言葉の意味は男に解らう筈はなかつた。音無もあまり獨り合點の言葉を少々恥ぢた。

『旦那、も一つ面白い事がありましたよ。私が此の川奥へ辻占を賣りに行きました時、一日賣歩いても誰一人として買うて呉れんのでせう。私も弱りましてナ。すると山の上の一軒屋に博奕があるといふ事を子供の話で知つて、早速其所へ駈付けてみまと、旦那！　大變でせう！ベラ札から銀貨から……どうしても一人前百圓以上も積んで、ぐるりと二十人近く環になつて居るぢやありませんか。私は緣側からぢい－ッと座敷の中を見てゐたんですよ。實は私の心はムヅ／＼して居たんです。けれども風體は汚し、お金は二三十錢しか無し手の出しやうが無いのです。褌襠の中へ七百何十兩といふ金を捻ぢ込んで山を越えた時の事が、私の眼の前にちら

つきましてナ。すると其中の一人が默つて緣側へ五十錢銀貨を一つコンコロリと投げ出して（おい！　それを持つて行け！）ッて云ふんでせう。辻占賣だッてやつぱり人一人の魂はもつてるんですもの、銀貨の一つぐらゐ投げつけられちや氣持の善ェものぢやアありませんよ。私は一寸癪に觸つたので默つて知らん顏をしてゐました。すると又た五十錢銀貨を一枚、別の旦那が投げてくれました。けえども私はまだ默つてゐました。私が五十錢銀貨を二枚とも受取らないんですから、みんな驚いたやうに私を見ながら、何だかヒソ／＼話をしてゐましたが、三十恰好の一寸宮相撲でも取りさうな大きな男が、つか／＼と出て來て其の銀貨二枚を私の袂へ入れようとしたんです。私は一二尺後退りして、ふッと其男の顏を見上げた時、チラ！　と眼の前に何かが飛んで來たと思ふと私の頭はガアーンと鳴りました。私はそこへぶッ倒れました。（こりや此の乞食奴！　貴樣は賭場荒しぢやナ、テラ取りぢやナ。）さう言つて毆られたの毆られないのッて、まア石のやうな拳骨で四五十はぶたれましたよ。其時私は思ひました、手向へば殺されるだけぢや、どこまでも向ふ任せにして置かう。）さう腹をきめて一言も言はないでゐると、サア向ふは薄氣味が惡くなつたと見え私を引起しましたナ。私は毆られたので眼の上

がすつかり腫れ上つてしまうて、まぶたが開かんのでせう。それでも私は默つてゐました。すると先方も氣味惡くなつたと見え、私を立派な宿屋へつれて行つて、醫者を傭ふやら旦那衆が平あやまりにあやまりに來るやら大騷ぎなんです。私は氏も素性も言はず旦那衆に一言も物を言はずに、其宿でお酒の飲放題、御馳走の食べ放題で二十日も遊んで、スツカリ腫も引きかすり瘍も癒つてしまつてから引揚げて來ましたが、宿を立ちシナにそこの主人が草鞋錢ぢやというて、二十五圓包んでくれましたよ、私ア今に其金は貯金して居りますがネ。』

音無は貯金といふ言葉に驚かされた。少し狐につまゝれたやうな感じで、『あなた方にも貯金をする餘裕がありますか。』と問うた。

『ありますとも、乞食ツてつまり襤褸をサゲて憐れな聲を出す商賣ですもの、商賣に上手な奴は貯めますサ。旦那、さうで無きやア乞食に夫婦なんてあるもんですか。旦那達が見てゐらッしやるやうな、かわいさうなもんなら、一日だツて連れ添ふ馬鹿な女はありませんよ。奉公なり日傭稼ぎなりに出ますサ。お坊さんは托鉢といふから上品ですし、にせ廢兵さんは名譽の負傷といふから氣の毒がられるんですが、みんな同じ事でサア。私の繩張りへ能く來る勢州とい

ふ男なぞは、三百兩位はいつも懐に容れてますナ。此間も面白い事があつたんですよ。其の勢州があの洞穴で‖右手の方の絶壁を指さしながら‖一錢二錢づゝ賭けて骨牌をいぢつてゐたんです。そこへ駐在さんがやつて來ましてネ。直ぐ三人は現行犯で引揚げられました。一體博奕てものは金持が財産を無くしたり、若旦那がうちのお金を盗み出すてんで、罰金だの監獄だのツて騷ぐんでさアネ。だのに乞食が洞の中で一錢二錢の取引をしたつて、それが世の中に何の關係も無いぢやありませんか。けれども若い駐在さんは、正直に乞食三人を引揚げましたよ。まアしかし乞食も一つの商賣と思やア、町の旦那方と同じやうに縛られて行くのも不思議はないが、』男は自分の話に論理の矛盾を見出したかのやうに、『ねエ、私ン所へでも〇〇の旦那樣がお出でになつたんぢや。勝負事といふものは不思議な力をもつたものです。』

『それから其の勢州はどうなりました？』

『乞食を監獄にぶち込んでも、それは河童を川へ追込むやうなもんですから、罰金三十圓づゝ言渡しましたよ。』

『罰金三十圓？　其の乞食に？』

『へエ、乞食に罰金三十圓を言渡す檢事さんも一寸風變りでせうが、言渡されると直ぐ三人分の罰金を、一人で綺麗さつぱりと渡してしまつた勢州も變り者でせう。檢事さんも一寸呆れましたらうよ。』

『勢州が他人の分まで出してやつたのですか。』

『えエ、そりやア思ひ切つたもんですよ。』

『ふうーん、さうかなア。』音無は溜息をついた。

『旦那、御案内致しませうか、そこら邊を。』男は煙草容を腰にさした。

『では案内して下さい。』

音無はステッキの把手に載せて居た顎を少し横に躍らせて言つた。

二人は小い谷を渡つて砂濱傳ひに絶壁の方へ出て行つた。屏風のやうな出ッぱつた岩蔭に黑い物がチラと見えたので、音無は好奇の眼をみはりながら急ぎ歩でそこへ近寄つて見ると、何

百種かわからない程小い布片を縫合した天幕やうのものを張つた中で、二十歳位な若い女が、小石で巧みに築き上げた竈(へつひ)で御飯を炊いてゐた。ブル、ブル、と吹き出す白い沫が、眞黑い蓋を少しづゝ撥ね上げてゐる。

『おうい、おやぢさんは?』

男は首を天幕の中へさし込むやうにして言つた。

『きのふから串本の方へ行きました。』

女は愼ましく、きちんと筵の上に坐つて答へた。

『あの娘は孝行者でなア。』男は感心さうに言つた。

十四五間向ふの洞の中からも炊煙が細く立昇つてゐた。音無は少しく氣味惡いやうな感じを懷きながら男の後に跟いて洞の前に行つて見ると、そこには七十ばかりの老人と、五十恰好の老婆と、頭を蒼白く剃つた三十七八の坊さん姿の男と、三人が額をあつめて何だかムシヤ〳〵と食べてゐたが、音無の姿を見るとすぐ、竹の皮包のやうなものを茶色の古ぼけた風呂敷の中へ隱してしまつた。

『おい安珍！　どうぢやナ？』

男は三間ばかり離れた所からきいた。安珍と云はれた男は頻りにペコ〳〵おじぎをしてゐた。

『安珍？　それは名ですか？』音無は小聲で尋ねた。

『なアに清姫の聟さんぢやから、さう云ふんですよ。』

『清姫？　それはまた可笑しい名ぢやないですか。』

『やつぱり私と同じ日高川のものぢやで、みんなが清姫々々ツて云ふんですよ。彼の婆アさんが清姫です。』男は洞穴の方を指した。

音無はザクリ〳〵と砂を踏みながら洞穴の間近まで歩いて行つたが、老婆の顏を見た時思はず『あーッ！』と聲を立てようとした。しかし強いて兩手で心臟を抱えるやうにして、ぢつと其の顏を見詰めてゐた。

『お清？　お清？　たしかにさうだ。さうに違ひない。』自問自答しつゝ立つてゐた音無は、

『婆アさん、あんたは日高のどこですか。』

『へゝどこでもこゝでもありやアせんのう。』

『何村ですかッて言ふんですよ。あんたの產れた所は？』

『へゝゝマア奥の方です。あんたらの知らんとこです。』

老婆は薄氣味惡い笑ひをして、音無の質問から逃げよう逃げようとした。

『おい、清姫どん、言うたら善ェぢやないか、此の先生もやつぱり日高奥のお方ぢやよ。』

男は吐るやうに言つた。

『へゝうそばアかり……また私を欺すんぢやらう。チョツコラ其の手にやア乘らんのう。』

『うそを言ふもんか……』男はチェッと舌打をした。音無は少し身體を屈めるやうにして洞の中に上半身を入れながら、

『婆アさんは寒川村のお清さんぢやらう。長志（ちやうし）といふ家に居つた……』

『違ふのう、へゝゝゝ』相變らず苦笑ひをしてゐた。しかし長志と云つた時、老婆の眼の色が異常に輝いたので、音無はいよ〳〵さうだと斷定する事が出來た。

『お婆アさん、僕はあんたと話して見たい事があるんだから、又た此所へ來ますよ。それからネ、あの晩雅樓へお出でなさい、明日の晩はあすこでお話しがあるから……』

『さうかのう、わしらアもう、あんた方の話を聽いたて何にもなるんぢやア無いし……』
『そんな事を言ふもんぢやア無い、婆アさん！』と男はたしなめるやうに言つて、『私が伴れて行つて上げるよ。』
安珍は傍から『有難うございます。』と言つて頭を下げた。
『私も行きます。宜しうございませう？』
默つて始終の會話をきいてゐた老人は、音無を見上げながら傍から口を出した。
『宜しいとも、ぢいさん！　此の婆アさんと御一緒にお出でなさい。』

音無は外の洞穴は見ないで、男に別れて、もと來た路の方へ取つて返した。そして芝生の所まで來て振返つて見ると、男は兩手を膝頭に突きながら、まだ話し込んでゐるやうであつた。
雜木林の蔭に入つて、路傍の石に腰を掛けた音無は、青葉蔭れにきら〳〵光る海を見ながら、子供時代の事を追憶してみた。
頭の眞中を二錢銅貨程の大きさに剃り拔いて、ぐるりを繪に描いた河童（かつぱ）のやうな罌粟（けし）坊主に

した信次は、『さア此所から見とつてやるさかい獨りで行け。何にもオトロシイ物は居りやアせんよ。』と、叔母のお熊に言はれて、御用の多和といふ丘から棕梠畑の中にある細路へ、ぽたりぽたりと藁草履を引摺りながら入つて行つた朝な〳〵の自分の姿があり〳〵と見えた。

夏の朝だつた。信次＝音無の名＝は、お熊を見返り〳〵淋しい薄暗い路を、たツた一人で歩いてゐると、路の下の大きな柿の樹の所から、棕梠の葉を動かしながら上つて來た男は、信次の顏を見るとすぐ、
『おう、信ぢやないか、音無の信次ぢやないか。』と言つた。
『はア。』信次はこは〳〵答へた。
『學校へいくんか、えらいなア。』
『……』信次は男の顏を見上げた。
『信！　おれを知つとるかい？』

『知らん……』

『おれは與助ぢや、學校から歸つたら、ぢいさんになア、與助に出逢うたと言へよ。』

男は腰の煙草容から二錢銅貨を二つ取出してくれた。そして、『おれは、今お前の朋輩の孫四郎ン所に居るさかい、遊びに來いよ。』と言ひ足した。

信次は夕方學校から歸つて、其の二錢銅貨をぢいさんの與兵衛に渡しながら、今朝の出來事を詳しく話したのであつた、其時信次は始めて、自分が產れ落ちると直ぐ、あの背の低い口の大きな、ゴト蟇に似た與助といふ男の所へもらはれて行つたといふ事件が、自分の歷史の一部分になつてゐるといふ事を知つた。

其後信次は、此の與助がお鶴といふ妻を置去りにして、お清といふ女と手に手を取つて、大和の十津川へ逃げて五六年も歸つて來ないうちに、お鶴が狂人になつて死んだのだといふ事を誰に聞くとも無く聞いて知つてゐた。のみならず其のお鶴が信次を抱いて、『こりやア私の子ぢや。』と言つて村の誰かれに見せびらかしたといふ話も聞いてゐた。だから信次は子供心にお清を惡い女だと思つてゐたのである。

或日孫四郎と二人で山から花を採つて歸ると、お清は死物狂ひになつてきやア〳〵泣いてゐた。鼻の紅い與助は、眼に一ぱい涙を浮べて、ぶる〳〵顫へながら、『うぬ何をぬかしくさるんなら、こいつメ！』と言つて思ひきり其の頰べたを、ぴしやり！とぶん毆つた。すると、ず、たいの大きいお清は、さんばら髪になつて與助に武者振りついた。不意を食つた與助は苦もなくお清に組敷かれて、圍爐裡の緣で頭をゴツ〳〵と小衝かれた。家の中には恐ろしい混亂の空氣が充ち溢れた。

信次は產れて始めて大人の喧嘩といふものを見たので、ホロ〳〵涙を流しながら、後をも見ずに逃げ歸つたのであつた。其後も時々此の喧嘩を想ひ出して、自分が若しも、あの與助夫婦を、父ウさん母アさんと言ひながら、あの家で育てられたなら、今頃どんなになつてゐるだらう？　といふ事を、考へて見たこともあつた。

其の大喧嘩のあとで間も無く、與助夫婦はどつかへ行つてしまつて、村へは歸つて來なかつたのであつた。

『自分の本籍、それは與助の子となつてゐる。あのお清が與助の妻なら、取りも直さず自分は彼の女の伜といふわけになる。』

斯う思つた時彼は何だか言ひ知れない悲しさに襲はれた。ぢつと眼を閉ぢてゐると、大きな黒い手が闇の中から現はれて、牧師のガウンを引剝いで、そのかはりに乞食のぼろを被せに來るやうに感じる。

『ぼろでいゝ、ぼろを着て乞食に傳道するのが僕の使命かも知れない！』と心の中で叫んだ彼は、『乞食の子！　乞食の子！』と呟くやうに言つて起ち上つたが、一二間よろめくやうに歩いた時、

『若し自分が乞食の群に入つたなら？』といふ氣分がかなり眞面目に心をゆすぶつた。と、同時に彼は、天幕の中に愕ましやかに坐つてゐた、圓顏の色の白い女の顏がはつきりと眼底に浮んできた。

『ばか！　どうかしてゐる？』彼はやゝ激したやうに、ステツキで路傍の雜木の枝を思ひ切り毆つた。小い枝が白い肉を見せながら、幹から引裂かれてぶら下つた。

『さうだ。乞食も一つの商買だ、光明遍照十方世界！　何と大きな言葉ぢやないか。まるで宇宙を包む程の言葉だ。こんな立派な言葉を唱へながら人の門に立つて、一握りの米、五厘銅一つをもらふのが乞食なら、愛だの慈悲だのと說教して、ミツションから金をもらふのも、金襴の袈裟法衣で檀家から金を集めるのも同じ乞食だ。みんな乞食だ。ぼろを着るか金ピカを着るかの相違だ。乞食々々！　みんな乞食！』

斯んな事を思ひながら田圃の所まで上つて來た彼は、振返つて雜木林の方を見た。それは孝行だといはれる乞食の娘が、其所へ上つて來るのでは無いかといふやうな、薄い期待があつたからであつた。しかし彼は何とは無く急に氣恥かしくなつて、むやみに杖を振廻しながら坂路を駈け降りた。

墓場の所から車道へ出て、町の方へ急いで歩いて居ると、左手の小さい丘の上から、『おういイ。』と呼ぶ者があつた。見れは印度服のやうなものを着てゐる田原であつた。

『來給へ、其の畑の所から上つて來給へ、車の置いてある所から……』
『はア、參ります。』
音無は急いで丘の上に駈け上つた。そこには小い家があつて、五十恰好な男と田原とが緣側に腰を掛けて話してゐた。家の後には細長い牛小屋があつて、大きな牛や小い牛が閂(かんぬき)の間から四五疋頭を突出してゐた。
『どこへ行つて來ました?』
田原はニコニコ笑ひながらきいた。
『御手洗の濱へ……』
『い丶景色だらう?』
『景色もい丶ですが……今日はあすこの洞穴に居る連中と話して見たいと思ひましてネ。』
『あすこには切目といふ、面白い乞食の親方が居るよ。』
『名前は聞きませんでしたが、其の親方に逢つていろ〳〵面白い話を聞いて來ました。』
『あれはなか〳〵面白い男だよ……』と云ひながら田原は立つて主人の方を振向いて、『久保

君、此のお方が音無君……今度教會へ來た牧師です。』と言つて、音無を紹介しながら、『音無君、この久保君も洗禮を受けた事のある人です。am ぢやア無くツて was の方だよ。もう卒業しちまつたんだネ。』
田原は無邪氣に笑つた。久保は眼の緣に小皺を一杯寄せながら、『耶蘇教會も學校のやうなもんですから、卒業するのが當然ですネ。私なぞも教會へは出ませんが、洗禮を受けたといふ事はどうしても忘れられません。それに耶蘇教のお蔭を蒙つた事は、死んでも忘れられん程澤山ありますから……亞米利加で深い山奥へ樹を伐りに行つてゐた時、ストライキが起つて、我々日本人はストライキの仲間へは入られず、と云つて働きはならず、いのちから〳〵に山を逃げ出して、何度も土人に殺されかけたか知れなかつたが、何とかいふ小い町へ=もう名も忘れてしまつたが=出て來た時、救世軍(サルベーション)が太鼓をたゝいて軍歌をうたつてるのを聞いた時、私は思はず、『サルベー……サルベー……』と云つて友達の腕を掴んでかう搖りましたよ。
久保は兩手で物を掴んで振る眞似をした。
『ふん、それからどうしたのかネ。』田原は笑ひながら聞いた。

『もうサルベーションに出逢つたら生命は大丈夫だと思つて、其の士官にへんてこな英語でわけを話すと、早速其の町の鑵詰商へ世話をしてくれましてネ。其時は基督教の有難さを始めて知りましたネ。何百回か聞かされた說教には、何の力もなかつたが、其のサルベーションに助けられた時は、耶蘇の力といふものを見せてくれましたから、有がたかつたネ。』

音無は久保の話を大變面白いと思つた。と、同時に自分が神學校で習つて來た、辯證論だとか汎神論だとか一神論だとかいふものが、果して實地の傳道にどれだけの遣ひ途があるだらうかといふ事を考へずにはゐられなかつた。

『今日濱で出會つた乞食の親方でも、此の牛乳屋の主人でも、確かに實際の世間を見て來た人だ。そして生きた神學や哲學を握つて居る。こんな連中に我々の薄つぺらな說教が何の功果があらう？』

二人は牛乳一合づゝ御馳走になつた。久保が自分で燒いたのだと言つて、いろんな形のビスケットを出して來た、三人は四方山の話を三十分ばかりもしたが、田原と音無とはやがて其所

を出て、あか〳〵と權現山の上に美しい光りを投げて居る夕映を見ながら丘を降りた。

『おうい、先へ行つて中學校の所で待つてくれ、そこまで歩くから……』

田原は丘の中程から大きな聲で呼んだ。車屋は二つ三つおじぎをして、ゴロ〳〵と空車を曳きながら中學校の方へ行つた。

音無は途々今日の出來事を詳しく田原に語つた。すると田原は、

『しかし、それは役場の戸籍簿に、其の與助といふ者の名が書かれてあるだけで、親でも子でも何でも無いぢやないですか、まして其の後妻といふのは、君と何の關係も無い閼伽の他人ぢやありませんか。』と慰むるやうに言つた。

『それは勿論他人です。私は彼の婆あさんを母親だとは思つてゐませんが、あんまり奇遇でしたから。』

『さうだらう、しかし君のやうな、そんな奇遇と經驗とを有つてゐてこそ、（我が母我が兄弟

とは誰ぞや！）といふ言葉の意味が本當に理解出來るんだネ。』

『私もさう思ひました。我が父我が母？　それはみんな（誰ぞや？）といふ大きな疑問に包まれたものです。』

『さうすると、君は君の父親を知らないんですネ？』

『いゝえ、知つてゐます。父だ子だとは名乘らないが、當人同士は能うく知つて居ます。しかし精神的には何の關係もありません。寧ろ私の敵ですネ。』

音無の言葉は捨ばちのやうに强かつた。

『敵？　それはどういふわけで？』

『私の母に私といふ者を孕まして置いて、足を擧げて蹴散らかして逃げたんでせう。母は其後どのくらゐ私といふもの〻爲めに人知れず苦しんだか知れません。母は子を產んだのでは無くつて恥を產んだのです。私は七八ツの時、母と小梅といふ＝同じく私生兒を產んだ＝女と二人の會話を聞いた事がありました。母はどうかして私を血のかたまりのまゝ流し出さうとしてあせつたらしい。高い石垣の上からとんでも見たらしい。唐がらしを煎じて、死ぬやうな思ひで

それを飲んでも見たらしい。しかし何の因果か、私といふものは母の胎內を離れないで、グン〳〵おほきくなつて達者で飛び出して來たんでせう。つまり僕の母は僕を產んだのでは無くて、恥辱の塊を產んだのです。斯うした間柄でも血緣が繫がつてゐるといふだけで、親だの子だのと言はなければならないものなら、僕には大いに異議があるんですが……』

『それはまア、產んだのが親か、養つたのが親かといふ問題から解決しなけりやア解らない大問題だよ。』

『さうです〳〵……』と音無は頻りに輕くうなづいた。

『先生！　これからどちらへ？』

掛茶屋にゐた車夫がだしぬけに言つたので、田原はびつくりしたやうに、

『おう、そこに居たんか、これから一寸熊野地の晩雅樓まで行つてくれ、直ぐ用事はすむんだから……』と言つて車に乘りながら、『では音無君失敬します。明晩は晩雅樓で說敎して下さい、相手を乞食だと思はずに、さいぜんの話のやうに、あゝいふ商賣人だと思つて……』

田原の車を見送つてゐた音無は、コツリ〳〵と歩き出したが、何だか頭の中に重い冷たい石

でも容れられたやうで、直ぐ牧師館に歸る氣になれなかつたから、ツイ畑途を通つて時子の家の前に出て行つた。

音無は久しぶりで時子を訪問した。

『マア暫くでしたワネ、さアどうぞお上り下さいまし、たツた今田原さんが、俥の上からお聲をかけて下さいましたのよ。私其時何だかあなたもお出で下さるやうな豫感がありましたの。久しぶりで又た文學談でも承りませう。』

『近頃は文學談でもありません。文學よりも、もつと私には研究しなきやアならない問題がありますから。』

『社會問題でせう。』

『まアそんなもんですなア。モーゼがどうだの、エリヤがかうだのとばかり言つてゐたつて詰らないですからネ。』

『本當ですワ、血の出るやうな生きた問題が、目の前に澤山あるんですからネ。』

『さうですよ社會を知らず人間を知らないで、傳道も何も出來るものですか。』

『私もさう思ひますワ。だから私、小説を讀むのよ。』

時子は兩手の指を胸の所で組合せ、少し身體を後の方にそらしてにつこと笑つた。音無の眼底には乞食の娘があり〳〵と見えて來る。乞食の娘に較べて、何といふ時子の美しさだらう？

しかし時子のきら〳〵した髮飾り、指に光つてゐるダイヤ入の指環などが、一種の輕蔑の資料ともなる。

『さ、お掛け下さいまし、今日はどちらへ御訪問？』

『御手洗の濱へ山窩（さんくわ）の連中を訪問しました……。』

『山窩？　あの物乞ひの？』

『さうです。大變面白い話をきいて來ましたよ。』

『さう？　どんなお話？　ゴーリキーの小説に出て來るチェルカシツユのやうな人？　でなきやイブセンのブランドの中に出る Gerd のやうな娘？』

音無は俯向いて默つてゐた。時子は甘へるやうに肩を搖ぶりながら、

『どうして默つてらッしやるの？　面白いお話ッてどんなお話？　言つて頂戴よウ。』

時子は雪のやうに白い手を机の上に伸して可愛い指尖をピク〳〵と動かした。音無の頭では小い三疊敷の乞食小屋—繼々の天幕（其の横になつたり縱になつたりした、縞やかすりが目に殘つて居る）焚火で眞黑く煤びた岩穴、そんな場所から突然こんな美しい部屋、しかも總ての男性を惱殺せねば置かないといふやうな、美しい愛嬌のある彼女の前につれて來られた自分を、怪まずにはゐられなかつた。それは餘りに激しい變遷であつたから。

『音無さん、あなた大變しほれて居らつしやるワ、御氣分でもお惡くッて？　どうしてこんなに默つてらッしやるの？』

『いゝえ、どうもしないです。一寸外の事を考へてゐたのです。失敬しました。さ、文學談でも承りませう、謹聽します。』

『何です？　そんなに俄かに……』時子は滴るやうな愛嬌を見せながら、『音無さん、あなたは誰の小説が一等お好き？』

『僕はやつぱりツルゲーネフだネ。あなたは？』

『私？　私はゴーリキーなの、牧師さんには叱られるか知らないけれど、本當にゴーリキーが

好きなの、小説ッて云ふより寧ろ論文でせう。私なんかにはカール、マルクスの資本論なんか讀む根氣がありませんから、ゴーリキーの小説をマルクシズムだと思つて讀んで居ますの、本當に面白いですワ。だけど私、ゴーリキーを唯物論者だとは思つてはゐないのよ。』

『元來、宿命論者が社會組織を呪ふといふ所に、論理の矛盾はあるでせうが……』

『もういゝの。もう議論は御免下さい。マルクスだのキヤビタリズムだのを持出した私が悪かつたのです。生意氣に一寸そんな事を言つて見たのよ、御免下さいネ。……私、今日あのテレサとボレスの話を讀んで本當に感心してしまつたの。』

『どんな點に感心なすつたのですか。』

音無は氣乘りのしないやうな返事をした。

『テレサは世間に對手にしてくれるものが無いので、ボレスといふ空想の戀人をこしらへて、其男に宛てた優しい文句の戀文を、隣の室に居る書生さんに代筆してもらつて、それが戀人の所に屆いたと空想して滿足してゐるのよ。そして今度は其の戀人ボレスから自分に宛てゝ甘い文句の返事が來ると空想するんです。しかも其の空想の返事を、同じ書生さんに代筆してもら

つて、それを讀んでおろ〳〵泣くんですワ。憐れなテレサは自分の頭の中に、美しい優しい可愛いテレサと、自分を愛してくれるボレスといふやさ男とを創造して、そして理想の戀を味つてゐるんですワ。私、本當にテレサに同情したワヨ。』

『面白い話です、つまり第二の自己が第三の自己を戀するのですネ。』

『世間の多くの人達、大抵の夫婦と云ふものは殆どさうぢやあないの？　奥様は完全無缺な旦那様を心の中に創造してゐらつしやるし、旦那様は高尚で優美で貞節無二な理想の奥様を頭の中に描いてゐらつしやる。ところが、どつちも其の創造された者には似ても似つかない現實の者を愛し合つてゐるんですワヨ。私の知つた人に斯んなお方があるの。御自分の作つた和歌を、奥さまのお名前で新聞へ投書して、其の和歌が新聞へ載つたのを讀む刹那だけ、自分の奥さまも歌人であるといふ幸福を味ふのです。今一人のお方は、亡くなつた奥様の事を世にも稀なる賢婦人であつたかのやうにお書きになつて、それを變名で新聞へ投書なさるのよ。そしてその記事をお讀みになつて、頻りに亡くなられた奥様の事を仰しやつてはホロ〳〵泣きなさるのよ。つまり其人達は詩人や賢婦人を奥様にもちたかつたのでせうが、それがリアライズしな

かつたので、餘儀なく空想の奥様を心の中にクリエートなすツて、それで憐れな滿足をなさるんですワ。（秋の田の刈穂の庵のとまをあらみ……）ツて歌ガルタの文句をお讀みになつても

それが（……君がうなじを捲かんには餘りに細きわが腕かな）ツて云ふやうに聞えるのネ。金色夜叉や不如歸を假字を辿つて讀んでゐらしつても、それがクロイチエル・ソナタやウエルテルの悲しみを讀んで居るやうに見えるんだワきつと。だけど私、そんな詩人肌の人をちつとも輕蔑しないワ。實際身も心も美しい立派な奥様を、奴隷か玩弄物かのやうに思つたり、御自分の肉を滿足せしむる機械になさる人達よりも、こんなお方の方が百倍千倍高尚ですワ。私には理想と空想とが一つにしか思はれないのよ。』

『面白い話ですネ。自分の頭で勝手に創造するんですから、どんなノロマでも英雄になり、手紙一通書けない女でも紫式部以上になりますからネ。』

『だツて音無さん、さうぢやア無くツて？　私共はやつぱり自分の創造した空想の人を愛する程度で滿足しなければなりませんワ。夫婦は一體なりツて聖書にも書いてはありますが、元々別々の人間ですもの。それが一つになれるなんて思ふのは迷信でせう。いとしいの可愛いのつ

て愛し合つてゐるつもりでも、本當は（こんなに優しい人だの、あんなに可愛い人だの）ツて御自分の頭で作り上げた空想の人を愛してるんですワ、やつぱり對照は空想よ。客觀的に實在してる當人と、主觀で愛してる人とは似ても似付かぬ別の人かも知れませんワ。』

音無は時子の議論にも一理あると思つた。

『だから私、すつかりテレサに同情してしまつたの。ね、音無さん、聞いて下さいましヨ、私はかう思つてるの、……どうせ人間の戀ツてものは空想なんですから、私、もう一生結婚なんかしないで、心ゆくばかりに其の空想を味つて見たいの。』

時子は机に身を投げかけるやうにして、可愛いパツチリした眼で音無をぢつと見た。音無は恍惚として時子を見詰めてゐたが、ふと自分の體内で、恐ろしい强烈な焰が風に煽られ、燃え廣がつてゐるのを知つた。

『空想の戀を味ひたいと仰しやるんですか。』

『えエ、さうなのよ。私、そんな戀がして見たいの。肉を離れた清い〳〵靈と靈との鎔け合つた……』

時子は急に耳朶を紅くして俯向いた。

『時子さん、あなたはそんな事を、眞面目に思つてらッしやるんですか。』

音無は心を引締めながら斯う言つて、口を一文字に堅く結んだ。其時彼はもう、堅牢な楯を心に用意してゐた。

『えエ、本當にさう思つてますワ。』

『時子さん、それこそ大變な空想です、清い心と心とが鎔け合つて一つになるなんて、そんな事が出來るものですか。』

音無は言葉に力を籠めて言つたが、其の語尾は少しく顫えてゐた。

『出來ると思ひますワ。私の今もつてゐる此の清い處女の心と、肉から離れた清い童貞の心とを一致させる事が出來ない筈はありませんワ。私はそんな美しい清い心を、女に對しても男に對しても、一日でも長くもたして置きたいのよ。』

『すると、あなたは天下の人々を悉く、比丘、比丘尼、優婆夷、優婆塞にしてしまはうと仰しやるんですネ。』

『いゝえ、違ひますワ。昔の宗教家は人間本性の愛情を無視して、したゝるやうな人間の心を無殘にも干乾にしてしまひました。私はそんな事を賛成しません。思ふ存分に愛の翼を擴げて清い〳〵戀を漁るのが人間の本性です。けれども戀と性慾とを一つにして考へるから愛情が誤解されるんですワ。』

『すると、あなたは性慾を汚れたものと思つてゐるんですネ。』

『いゝえ、汚れたとは思ひませんが、悲慘だと思ひますワ、私達の生活には、少しでも悲慘を少くしなければなりません。』

『では人類が滅亡するぢやありませんか。』

『えエ、其の御質問は當然ですワ。しかし私、いつも考へてゐますの。女といふ女で本當にあの恐ろしい出産といふ苦痛を意識して、そして子を産みたいといふ願ひから性慾を肯定する人が何人あるでせう。私、本當にさう思ふのです、子を産みたいといふ切なる希望に基く以外の性慾はみんな無意味です。子を欲しくない、子を産む事を恐れる人が性慾を肯定するのは矛盾です。世間の女が子を産んで行く、五人十人子を産んで行く。その女はみんな自分の意志で、

その子を欲しくつて產んだのでせうか。恐ろしくッて嫌で堪らないのを、强いて〳〵男に產まされたのぢやないでせうか。男の腕力は、女を壓服する爲にのみ用ひられてゐるのではないでせうか。男つてものはみんなタイラントです。童貞を捨てゝしまふと、もう愛も戀も無くなつて肉ばかりになつてしまひます。私なんかも亡くなつた夫の事を考へてみますと、あの人が本當に優しかつたのは結婚前だけでした。長く學問ばかりしてゐらしつたので、まだ童貞の美しさを保つてゐらつしやいました。しかし結婚すると間もなくすつかり暴君（タイラント）になつてしまひました。しつこくて我儘で、無作法で、性慾以外に何等の清いものをもたなくなりました。だけど、私は表面だけ屈從したやうに見せかけて、自分の處女の心を逃がさないやうに大事に〳〵保護してゐました。ですから……氣の毒な話ですが……私が肉の壓迫から脫れた事を嬉しく思ひましたのは、夫が瀕死の重病に罹つて肉體が衰弱し切つた時でしたワ。』

『あなたの御議論全體には贊成出來ませんが、大抵の男子が暴君だといふ一事だけは僕も承認します。』

音無は椅子を離れて、わざと大樣（おほざま）に歩きながら壁の油繪を見に行つた。

『音無さん、あなた、女の心を知つてらつしやる？』

『さア、知つてるか知つてゐないか、僕にはわかりませんナ。』

『あなたは、弱い女に心の奥底を打あけさせて、御自分ばかりは聖徒のやうな顏をなすつて、勝誇つて御歸りなさるんでせう。』

『どうして？　僕はあなたの心を探りに來たのぢやありませんよ。勝誇つて歸るなんて、飛んでもない。』

『いゝえ、何とでも仰しやい。どうせ私のやうなお轉婆は、ナオミさんのやうなおとなしいお方には及ばないんですから。』

時子は廂髮のほつれを、右の手で搔上げながら眼鏡を直した。

『何を仰しやる？　ナオミさんとあなたとを較べてどうするんです？』

『おかくしなすつたッて駄目です。學校時代には一緒にお芝居をなすつた事を能く知つてゐます。それからあなたがナオミさんに對して、どんなに清い同情を捧げてらッしやるか、ナオミさんがどんなに苦しんでゐらつしやるか、私能うく存じてゐます。おかくしなすッたつて駄目

ですワ。』

音無は俄に沈鬱な顏をして、默つて机の上を眺めてゐると、時子は急に勝誇つたやうな顏をして、

『ナオミさんは大伴堅爾さんと御結婚なさるのよ。あなたは其事を御存知？　御存知無いでせう？　ナオミさんの此頃のおやつれにお氣が付かなくツて？』

『本當にナオミさんは結婚するんですか。』音無は俄かに言葉を和げた。

『そら、御覽なさい。御心配でせう。』

時子はいよ／＼勝誇つた顏をした。

『いゝえ、僕は別に心配もなにも致しません。しかし、ナオミさんは、まだ氣心を十分知らない堅爾さんと、結婚なさるお氣にはなれますまい。』

『私だつて、確實な事は知らないのよ。けれども、そんな問題が起つて、ナオミさんが苦しんでゐらつしやる事は本當よ。』

時子はしげ／＼と音無の顏を見たが、音無はまだ無言でゐた。

『音無さん、先刻から失禮な事ばツかり申しましたワネ、お氣にさへないで下さいまし。私はあなたが、ナオミさんの一件で、大へんお心を痛めてゐらつしやるだらうと思つてゐましたのよ。』

『いや、有難う。時子さん、僕も今までかなり苦勞をして來ました。私生兒に生れて、一家が沒落して、勞働者の群に入つたり、居候になつたり、物心付いてから今日まで一日だつて面白い日影を歩いた事はありません。酒も飲んで見ました。博奕も打つて見ました。口で言へないやうな罪惡も散々犯しました。さうした揚句の果の宗教呼はりですもの。今更戀を失ふの愛を見失ふのと、そんな事は問題ぢやアありません。』

『では、そんな問題には超然としておいでなさるの？』

『さうではありません。僕だつて、あなたにさう云はれてみれば、そりゃあナオミさんを心の中で愛してゐたかも知れません。私はナオミさんと一緒に話してゐる時、誰と話してゐるよりも優しいナオミさんと一所に居るといふ事の喜びの方が、遙かに大きいと思つた事もありました。それを戀と言へば戀だとも言へませう。』

『では音無さん、ナオミさんを堅爾さんと結婚させて上げなさる？』
『若しさうなれば非常な幸福だと思ひます。』
『あなたは其の結婚式を能く御司會しなさる？　あなた御自身で……』
『それは出來ますとも。』
『本當にそれがお出來？』
『えエ、出來ますとも、僕はさういふ運命を甘んじて受けます。』
『では音無さん、假りにナオミさんよりも十倍百倍增した愛を、あなたに捧げるものが、外にあるとしたなら……あなたはどうなさいます？』
『僕だッて血のある人間です。』
『あなたが？　血のある人間？　私だってやつぱり血のある人間ですワ。』
『僕は殊に野性の强い男です。僕は時々本當に下らない人間になつてしまひます。けれども自分と自分を叱つて、鞭つて、宗教に引摺られて、神に追立てられて、やつとの事で足もとを踏外さず、溪間にも落ツこちないで此所まで漕ぎ着けたのです。世間の人は僕を僞惡者だと云ひ

ます。しかし僕は本當の惡人かも知れません。惡人が善人にならうと悶えてゐるのかも知れません。僕は頗る弱い男なんです。一歩踏み外すと大變な事になる危險な男なんです。ですから時子さん、あなたは僕の內に潛んでゐる野性を呼起さないで置いて下さい。僕は高壇で說敎しながら、しかも愛する者と心中しかねない男なんです。僕は野性の强い男なんです。ナオミさんもそれはようく知つてゐて下さいます。ナオミさんと僕と二人で麻布の廣尾附近を散步した時ナオミさんは、僕と話してゐると『肉薄して來るやうだ。』と言つた事があります。僕は其時僕の心をようく見拔いてゐるナオミさんを小面憎く思ひました。しかし自分の心を本當にようく見拔いてくれる人が、本當の友人ですからネ。』
『では、音無さん、若し私がナオミさん以上に、あなたを理解してゐるとしたなら、あなたはどうなさいます？』
音無は眼を閉ぢて俯向いた。二分、三分、五分と沈默が續いた後に、つと座を立つて、
『イヤ、お邪魔致しました。ではまた……』とことさら沈着を裝ひながら室を出た。
時子は沈んだ調子で、

『音無さん！』と呼びかけたが、音無は後を振返らずに、そのまゝで、
『何ですか。』と問返した。
『あなた、今晩の會話をナオミさんに祕密にして下さるでせうネ。』
『勿論！』
『左樣なら、これで失禮してよ。』
時子も其のまゝ起ち上らなかつた。音無は段梯子の所まで來て暫らく躊躇してゐたが、ふツと氣を變へて急ぎ足でトン〳〵と階段を降りた。

降り續く雨はまだ晴れない。空模樣が惡いので、熊野川原の假家に居る人たちは簑笠で荷物を運んでゐる。お常と須基子が緣側の欄干にもたれて、往きかふ人々を眺めてゐると、お末が來て、
『田原先生がお見えになりました。』
『さう、どうぞこちらへ。それからナオミさんに、こゝへお出で下さるやうに……須基子さん、あんたはあちらへ行つてらつしやい。』
須基子とお末が引さがつてから間も無く、田原とナオミとが入つて來た。
『やア今日は、雨續きで困りますなア。暫く御無沙汰しました。』
『今日はまた態々御呼立致しまして誠にすみません。』お常は田原に挨拶しつゝナオミをちらりと見、『ナオミさん、今日は彼の話をきめてしまひたいと思ひますから、どうぞ御腹藏無く仰しやつて下さいまし。』

ナオミは顏を紅くして俯向いた。田原は手帳を取出して、

『では御隱居、順々に片付けてしまひませう。考へて置くの相談するのッて云ひッこなしに、ずん／＼解決して行きませう。』

『さう致しませう、お互ひに氣心を知合つた同士ですからネ。』

『ナオミさん、』と田原は言葉をあらためて、『度々申上げた事だが例の結婚問題はマダ御決心が付きませんですか。』

『私、いろ／＼と考へましたが、』ナオミは言葉靜かに、『やつぱり御斷り致した方が双方の爲に宜しいかと存じます、どうぞ惡しからず。』

『さうですか。』田原は當惑したやうな顏をして、『お氣が進まないなら、やむを得ません。しかし堅爾君とあなたが、須基子さんの後見になつて下されば、大伴家の爲にも太地家の爲にも幸福ですがなア。』

『此事だけは我儘のやうでございますが、私の理性できめさせて下さいまし。』

お常は膝に置いた手を組合せながら、二人の會話に耳を傾けてゐたが、

『こればッかりはネ、仰しやる通り、たッてとは願へませんが、若し此の縁談が纏らないとなると堅爾がどんな自暴(やけ)を起すまいものでもないと、私はそれを頻りに心配致して居りますので……出來る事ならネエ……』

『再考の餘地はありませんかネ。』

田原は氣の毒さうにお常の顏を見た眼をそらして、ナオミを振向いた。ナオミは首を垂れて暫く無言でゐたが、

『十分熟考してから申上げたのでございます。』ときつぱり言切つた。

『ぢやア、此の話はこれで打切りませう。』

お常は俯向いたまゝ默つてゐた。田原は平生の笑顏も見せずに、

『第二の問題は、ナオミさん、あなたの將來です。此の縁談を謝絶なすッても此家を出てしまふお考へぢやア無いでせうネ。』

『須基子さんの教育と此の縁談とは別問題でございます。私の我儘な御挨拶を皆さんが許して下さるなら、私は無論須基子さんが御結婚なさるまで教育して見たいのでございます。此點に

就いても私はいろ〳〵と考へました。』

『それで私も安心しました。』とお常はほつと安心したらしく、『私はそれを心配してゐました。こんな事で氣まづくなつて、萬一にもあなたが此家を出るとでも仰しやッたら、あんなにお慕ひ申してゐる須基子がどうなるかと思つて……』

『有難う、利雄君の靈も喜んで居ませう。』と田原が言つた時、須基子が入つて來て、

『先生、先生は東京へ御歸りなさるツて、本當？　ね、先生。』と云つて眼に一杯涙を溜めてナオミにもたれ掛つた。ナオミは強いて涙を見せないで、

『須ウちやん、私はどこへも往かないのよ、何時までも〳〵こゝにゐますワ。』

『須基子さん、大丈夫です。』と田原は嫌すやうに、『ナオミ先生がどうしてあなたを捨てゝ東京へ歸られるもんですか。』

『ナオミ先生が東京へ行らつしやるなんて誰に聞いたの？』お常はわざと笑顏を見せた。

『お末が言つたの。』

『しやうが無いネ、末はからかつたんだよ。今ネ、先生は御用があるんだから、あんたは安心

してもう少しあつちへ行つてらッしやい。』

お常がさう言つたので、須基子は澁々襖の外へ出て行つた。その輕い足音が廊下の彼方へ消えてしまつたと思ふ頃、田原は元氣な聲で、

『さ、次に移りませう。第三は太地家の財產問題です。現在の貯金三十一萬二千圓の內、十萬圓を大伴堅爾君に、二十萬圓を太地須基子さんに、それから一萬二千圓を太地常の名義にして据置貯金とし、其の利子は古座ナオミさんの月給として差上げる事、さうでしたなア、御隱居。』

『はい左樣でございます。』

『第四は太地常の名義にしてある貯金を、最後にどう處分するかといふ問題です。』

『つまり、私が死んだ時の問題ですネ。』

『まアさうですネ、手ッ取り早く言へば。』

『その貯金は、今からナオミさんの名義にいたして置きませう。』

『さうですか、さう出來れば何よりですが……』

『えエ、さう致して置きます。さうして其の利子を御隨意に御使ひ下さるやうに。』
『では、さうきめませう。』 田原は手帳へ其通りを記入した。
『それでは田原さん、此の約束は公正證書にでも……』
お常の言葉の終らないうちに、田原は強く頭を掉つて、
『必要はありません。知らぬ他人のお役人に證明してもらはねばならぬやうな約束なら、むしろ約束しないがいゝです。』 と言つて手帳を懷にいれながら。『先づこれでみんな解決しました。堅爾君には今晩詳しく話して置きませう。では失敬します。』
『有難うございました。では私も二三日中に堅爾を伴れて、暫く京大阪を見物して來ませう。久しぶりで濱松の方へも墓參りに行つて來ませう。何から何まで御厄介をかけましたが、お蔭で私もこれで一安心致しました。』
お常が丁寧に頭を下げた時、田原はもう起ち上つて襖の引手へ手を掛けてゐた。
お常とナオミが田原を玄關まで送り出した時、丁度時子が訪ねて來てそこに立つてゐた。
『やア、時子さんか。』 田原は靴脫の上に立つて、『此間は失禮致しました。隨分文學談が盛

んでしたでせうネ。』
『えエ、』
時子はいつになく沈鬱な顏をして、いつものやうにハキ〳〵した返事をしなかつた。
田原が歸ると、時子はナオミの室へ通された。
『暫く御無沙汰致しましたワネ。』
『私こそ。』
『あなたは御用がおありですが、私は遊んでばかりゐるくせに御無沙汰ばかりして。』
言ひつゝ時子はナオミの顏をぢつと見つめて、
『ちよつとの間に大變お痩せになつたワネ。』
『さう？ そんな事ア無いワ。』
『あの事で御心配なのでせう？』
『心配て事もありませんが、義理がありますから……』

『どうきまつて？』
『きッぱり謝絶しましたの。』
『あの、大伴さんの方を？』
『え？　私には大伴さんの一件一つしかありませんワ。問題てのは……』
時子はさすがにあわてゝ、『さうです〳〵、私の言ひ方が悪うございました。』と取りつくらふやうにして、『だつて、亡くなられた兄さんの御遺言ださうぢやありませんか。』
『誰がそんな事を申しました？』
『ようく知つてゐますワ、誰から聞かなくッても……』
『遺言だとしても、結婚ばかりは自分の理性を棄てゝ定めるわけには出來ませんからネ。能く〳〵考へた末、キッパリ斷りました。』
『さう？』と言つた時子の顏には冷やかな微笑が浮んだ。
二人の間にはちよつと沈默が續いた。俯向いて膝の所を指先でいぢつてゐたナォミは、憶ひ出したやうに時子の顏を見上げて、何か言ひ出さうとしたが、また急に默つてしまつた。それ

は二日前の晩に、堅爾が時子の宅を訪問したらしい形跡のあつた事を憶ひ出したからであつた。遺言云々の出所はナォミに直ぐ了解できた。

六月十八日の朝、お常と堅爾とは女中のお末を伴れて、京大阪の見物に出かけた。いつまでに何所へ行かねばならぬといふ急ぎの旅で無いから、紀三井寺から根來、粉川から高野と氣散じに二週間餘りも經過つて、伊勢の山田まで來た。

熊野の荒々しい男性的な海を見馴れたお常の眼には、女性的な伊勢の海岸が非常に氣に入つたので、二見館の別莊を借切つて、當分そこで保養することにした。

七月の半頃であつた。堅爾はひとりで山田の町を散歩してゐると、『あら、大伴さん』と摺違つた俥の上から聲を掛けた者があつた。

『やッ、時子さん？』

『まア、いゝ所でお目に掛りましたワ。』

俥から下りた時子は、堅爾の顏を見ながら少し首を傾げて嬉しさうににつこりした。

『昨日來たばかりなのよ。獨りで淋しくッてネェ。』時子の聲は甘へてゐた。

『僕は淋しくは無いが退屈した。』

『おッ母さんと御一緒でせう？』

『二見館にもう三週間もゐるので、行く所が無くなつてしまつた。』

『毎日何をしてらッしやるの？　海水浴？』

『いゝ加減黑いから、此上色上げする必要もないさ。』

『ぢやア何をして？』

『何にも仕事が無いから、二三日前から山田の町中をぶらついて、標札調べをしてゐるんだ。面白いネ、長尾魯鈍馬て公證人がゐる、白髯長次、黑髮烏羽太夫てな素敵な名が發見されましたよ。今に伊勢甚宮だの、五十鈴川みそぎだのといふのが出て來るかも知れないよ。』

『隨分のんきだワネ。』

『仕方無しののんきサ。二三日中に京都へ行くつもりなんだがネ。』

『京都へ？　御用でもおありなの？』

『米國で同じ學校にゐた男が、京都で事業を創めるといふので、一緒にやらうかとも思つてゐ

るんです。』

『さうですか、ではネ、斯うして下さいナ、私も京都の方へ行きますから御一緒に伴れてツて下さいナ。今晩の終列車でお立ちにならない？　ね、さうして下さいナ。』

『さア、さうしてもいゝネ。』

『まア嬉しい、一緒に行つて下さる？　あのネ、此間の晩新宮でお話したあの續きのお話を致しますワ。』

『又た文學談ですか。あれには閉口しましたよ。』

『だツて、あなたは文學がお好きだと仰しやツたぢやありませんか。』

『文學は好いが、あなたのは御説教ですもの。處女主義（パアジニズム）とでも云ふのかネ、あなたのは。』

『えエ、イズムですワ。私のイズムですワ。まアそんな事はどうでもいゝでせう。今晩伴れてツて下さるでせう。ね、堅爾さん。』

二人はいつとなく外宮の外まで伴れ立つて來た。

『では斯うしませう、僕は二見館へ行つて母に其事を言つて仕度をして來ますから。』

『えエ、御待ちしてゐますワ、早く入らツしやいネ。』

『お宿は？』

『此通りを眞直ぐに行つた彼の右側の瑞穗館、御承知でせう？』

『あゝ瑞穗館か、能く知つてゐます、では後程伺ひます。』

堅爾は一町ばかり向ふに客待をしてゐる辻俥の所へ急いだ。

『きつとですよ、大伴さん。』時子は念を押して後から呼びかけた。

『さう〳〵彼の時だツた。』と堅爾は獨りでふきだしてしまつた。

『何です？　をかしな人ネ、想出し笑ひなんかなすツて。』

『いや、こんな事があつたんだよ、今から十二三年前の暑中休暇にネ、僕は此宿へ泊つて二三日遊んだが、いよ〳〵勘定となると、東京までの汽車賃が足りないといふ騒ぎで、丁度七圓ばかり不足だから、電報爲替で金七圓瑞穗館まで送れといふつもりで『七デンカワタノムミヅホ』と字數を儉約した電報を打つたのです。所が返事が來ない。愚圖々々するうちに又た勘定

が殖えて來たので今度は長文の電報を打つて十五圓送つて貰つて東京へ歸つたのでした。後から母の手紙を讀んで見ると、七の字が『ヒ』に間違つてゐたんださうで、『ヒ殿下綿呑む三粒』と讀んだから、さア解らない。おまけに差出人が解らぬと來てゐたから、テツキリ誰かの惡戯だらうといつて、うつちやらかされたのサ。ヒ殿下綿呑む三粒は振つてるだらう。』

堅爾はたまらぬやうに笑つた。

『落語ネ。』時子も顏を紅くして笑つた。

二人は食事を濟して緣側へ出ると。そこに籐の長椅子があつた。

『お懸けなさいナ堅ちやん！』

『堅ちやんは驚く、だが堅ちやん時代はよかつたナ。』

『堅ちやんは隨分いたづらッ兒でしたのネ。』

『いたづらと云へば、あの頃あなたの頭の後に、五厘銅貨程のお禿があつたネ、今でも有りますか。』

『能く覺えてゐますのネ。あのお禿ではドンナに虐められた事でせう。あなたは歌まで作つて囃したんですもの。』

『さう〳〵何とかいふ歌だッたけなア。』

『私、今にちやあんと覺えてますワ。怨骨髓に徹してますからネ。ホラ煙草屋の良作さんと米屋の菊造さんと私たちは同じクラスでしたから、あなたは私たちの名前を歌にしたのよ。其歌ッてのは——

時子に禿頭病
瘠子に蓮根
蓮の花いつ咲く
今日咲く良作
さう言うな
人皆なきく藏！』

『感心に能く覺えてますナ。だが、時といふものは恐ろしいもんだ。そんなタワイも無い事を

云つた堅ちやんが、今は荷もバチエラア オヴ アグリカルチユアーでゐらッしやるから……』
『さうネ、あなたは農學士さん。敬意を表さなくちやア。』
『敬意を表するは恐れ入るネ。』
『本當よ。振分髪のお友達が、名譽の學士におなりなすッたんですもの。』
『もう〳〵冷かしッこなし〳〵。』と堅爾は手を振つて、『それよりは喉が渇いたから茶でも飲みたい。』
『ではシトロンでも、』
『ビールがほしいネ。』
『ではさうしませう、本當に召上るなら……』
『飲んでもいゝ？』
『御自由ですワ、召上れ。』
『あなたは僕がビールを飲んでも、僕を輕蔑なさらないですか。』
『そんな事があるものですか。』

時子はベルを押してビールと果物を命じた。
『もう十一時すぎよ。』
『梅田の驛前に新築の宿屋があるから、あすこへ行つて泊らう。』
二人が湊町から車を飛ばして梅田の旅館へ着いたのは、もうかれこれ十二時すぎであつた。二階の八疊へ案内された時子は坐に着くや否や、『此のまゝ朝まで話しませう、いろ〳〵きいていたゞきたい事も、あなたからお聞きしたい事もあるんだから、ね、堅爾さん。』
『朝まで？』
『えエ、朝まで話しませう。お互ひはエマオに旅した二人ぢやありませんか。was not our heart burning within us? といふ言葉を御承知でせう？』
『僕の心は燃えてゐる。今にも僕を陷沒させようとする肉慾の地震が恐ろしい響を立てゝ襲つて來さうだ。』

『さうですとも、其の恐ろしい響がもう私の心の底に聞えてゐますワ。だけど負けてはいけません、肉に墮ちた時はもう戀ぢやアありません。悲慘です。』

『なにが悲慘です？』

『私、去年山羊が仔を產む所を見ましたの。知己の齒醫者さんの所へ遊びに行つてると、裏の小屋から氣味の惡い聲が聞えるんでせう。行つて見ますと、藁の中に臥てゐる山羊が首だけ擡げて憐れな聲で陣痛を訴へてゐるんです。暫くすると袋に包まれた仔が產れました。產れると直ぐ親はその袋を綺麗に舐めて、それから臍の緒を嚙んで、直ぐ自分で自分の乳をちゆッ〳〵と吸つて仔に飲ませる用意をしてゐるんです。私は其時人間でも動物でも母性愛に變りは無いと思つて感心して見てゐましたが、其中に二度目のお產になつたのです。二度目のは倒兒でしかも初めの子の二倍も育つてゐましたから、何度陣痛が來ても容易に產れないで、苦しんで悶えてやッとこさと產れるには產れたが、あゝいやだ！　血がたら〳〵流れて……そりやア見てゐられませんでしたワ。三ッ目のもやつぱり倒兒でドンナに苦しみましたらう、私は（あゝ悲慘だ！　何の爲に？）とかう思ひました。それだのに堅爾さん、牝が斯んなに九死一生の苦みをしてゐるのに牡は平氣な顏で、まるきり自分の知つた事ぢやア無いといふやうに樂々と寢てゐるぢやアありませんか。私、男性といふものは斯うした殘酷なものかとつく〳〵知りましたワ。本當に腹が立つて憎くなりましたの。ね、堅爾さん、人間は戀の結果必ずこんな悲慘な苦みを見なきアならないものでせうか。あんな獸にでも蟲にでも存在するあんな汚い悲慘な殘酷な行爲が伴はなければ戀ぢやア無いと云ふなら、私は戀を呪ひます。戀！　神聖な清い戀は人間ばかりのもつてるものですワ。私は其の神聖な清い戀にあこがれてゐるんです。あんな悲慘な非道な罪を犯さないで清い美しい戀に私の魂を捧げて見たいの。ね、堅爾さん。あなたと私とたッた二人ッ切りで、あの權現の境內で椎の實を拾つて、あの石段の所でお餅搗のまねをして遊んだ頃のあの清い心、其心の進化した、情熱に燃えた戀が、もう一度出來ない筈はありません。ね、堅ちやん！』

時子はトロンとした眼で堅爾の顏をぢつと見詰めて居たが、やがて兩の眼には涙さへにじんで來た。

二人は朝の七時に七條驛へ降りた。都ホテルの出張店で朝餐を濟まし、驛前から車に乘つて其の終點で降りた。そしてそこから途を訊き〳〵比叡山へ登つた。

時子は護謨草履を新聞紙にくるんだ上をハンカチーフに包んでぶらさげ、茶店で買つた草履をはいて遠者に歩いた。

溪に沿うて山又山を分登つて行くと、一軒の堂とも茶店とも付かぬ家があつて、七十ばかりの爺さんが薄汚ない箱に駄菓子を列べて賣つてゐた。

時子は煙草の燒穴だらけな毛氈をかけた床机に腰を卸して、額から流れる汗を拭き〳〵爺さんが汲んで出した茶澁だらけの茶碗を受取つて、

『おぢいさん、こゝへ泊つてゐるの？』

『いゝえ、わしア二十町下の里から巳の日だけ上つて來るんです。先祖代々辨天樣への御奉公

にかうして來てゐるんです。此の茶釜をごらん。寛永二年正月巳の日と書いてある。寛永二年と云やア三代將軍樣時代で、今から二百四十五年前ですぜ。』

『さう？　二百四十五年も御奇特だッネ。』　時子は首筋の汗を拭きながら言つた。

『無勤寺の辨天樣は巳の日が命日で、寅の日は毘沙門、土用の丑の日は鰻を食べる日で……』

と老人はツベコベしやべつてゐたが、默つて扇子を使つてゐた堅爾は、

『行かうや、ぼつ〳〵。』　と云つて牀机を離れた。時子は白銅一つをそつと盆の上に載せて置いて出て來た。

少し行くと小い天滿宮の祠があつて小學生徒の清書が何十枚も萬國旗を飾つたやうにつるされてある。

『日本の教育はマダ寺子屋式だネ。今にこんなくだらない四角な字を骨折つて習つてるんだからなア。』

堅爾は蝙蝠のさきで其の一枚をぷつりと突破つた途端、エヘンと咳拂ひの聲がしてうすよごれた浴衣を着た四十恰好の男が祠の後から顔を出したので、二人はあわて〻歩き出した。そし

てうね〳〵した坂を汗みどろになつて、やつと根本中堂まで登りついた時はもう一時すぎであつた。

文珠堂や大講堂、戒壇堂、大乘院などを覗いて、茶店で晝食をしたとき、そこの『辨慶』といふ黑犬が時子の裾にまつはつてぢやれるので、時子は向付の鹽燒をソツクリ投げてやつた。

『これから石山へ行かう？』

『えエ、參りますワ。』

『ぐづ〳〵して居ると眠くなつて來るから、直ぐ行かう！』

堅爾は先に立つて坂路を降りた。そして坂本まで來たが、小蒸汽に乘り後れたので茶店の牀机で船待をしてゐるうち、堅爾はもう高鼾で眠つてしまつた。時子は扇子で堅爾の顏に群る蠅を追ひながらいろ〳〵の想像に耽つた。男性といふものに就いての其の淺ましい姿が頻りに幻のやうに彼女の前にちらつく。

其うちに小蒸汽が來たので、大津の町に一はしりして京の三本木の信樂（しがらき）に着いたのは、もうトツプリ日の暗れた頃であつた。

『くたびれた〳〵、ずゐぶん引張り廻されたものだ。夕立旅行はもうこり〳〵だ。』

堅爾は風呂から上つて來てあぐらをかきながら言つた。

『昨晩、私のレクチユアーが長かつたもんだから。御免なさいネ。』

時子はにつこり笑ひながら下女に案内されて浴室へ出て行つた。そして歸つて來て見ると堅爾はもうビールを三本も空けて、眼はトロ〳〵と赤味を帶びてゐた。

時子が食事のすむのを待ちかねたらしい堅爾は、

『時子さん、今晩はもうあなたのレクチユアーは御免だよ。中學、高等部、ハイスクール、カレヂと長年レクチユアーにあき〳〵してるんだからネ。もうあなたの戀愛哲學の講義も當分御預けにする。それよりも僕が米國でペルシヤ人の娘と……面白いローマンスがあつた其の話でも聞いてくれ給へ。』

時子にしなだれかゝつて其の膝を枕にしてゐた堅爾は晝間の疲れに堪えかねて、いつしか其のまゝぐつすり寢込んでしまつた。

翌朝眼を覺してみると堅爾の枕もとには一通の手紙が置かれてあつた。堅爾は起きようとしたが頭がギン〳〵と痛むので、眉を寄せながら其のまゝ手紙を披いて見ると、

堅ちやん、さやうなら。

暫くお眼にかゝりません。

私の哲學を輕蔑なさらないで下さい。

と書いてあつた。堅爾はムツクリ起き直つて暫く其の手紙を見詰めてゐたが、丁度そこへ女中が入つて來たので、

『おイ、時子さんはどうした？』

『お伴れ樣ですか、あのお方は昨晩十一時にお歸りになりました。』

『昨晩十一時に？　どこへ行くと言つたかい。』

『何にも仰しやいませんでした。』

『さうか。』

と言つたまゝ堅爾は默つて考へ込んでしまつた。

神戸で開かれた牧師會に出席しての歸るさ、音無は大阪へ一晩泊つて噂に聞いてゐた千日前と道頓堀の夜景を見に行つた。雜踏中を揉まれながら門並の繪看板を見るとは無しに見つゝ中座の前まで來ると、大きな立看板に墨黑々と『文藝活動寫眞、講師高木助雄』とあるのが眼に留つた。

『高木助雄？　學院にゐたあの高木ぢや無いか知ら？』と呟きつゝ講師の名前に牽かれてツイ入つて見ると、表の景氣とは打つて變つた不入で、場内はガランとしてゐる。

一二分經つと電氣が暗くなつて、映し出されたのはミルトンの失樂園惡魔の評定の場であつた。辯士は普通の活辯であつたが、寫眞が面白いので夢中になつてフキルムの跡を追つてゐると、やがて一時間ばかりして、幕間のヴアイオリンの獨奏が終つて、次のフキルムに移る前、小柄で色の白い長髪の男がフロツク姿で舞臺に現はれた。

『高木君だ、高木君だ。』と音無は一目見て我知らず下足札で膝をたゝいた。

高木は物柔かな沈着な口調で、先づミルトンの生立から二十七年間の失樂園の苦心、しかも其の辛苦に對する報酬が僅かに十パウンドであつた事を述べ、更に英國魂の說明から轉じて我日本魂の英國魂に劣らぬゆえん、此の清い日本魂がマンモンや、モーロックのやうな惡魔に汚されざらん事を欲する希望をまで陳べ終つた時、喝采は先づ二階の正面から起つた。やがてフキルムは一時間程掛つて人間の最初の悲壯なる歷史を段々と展開して會を終つた時、音無は夢幻の世界から初めて現實世界へ歸つたやうな氣がした。

『まア、音無さんぢやア無くツて？』

木戸口の所で後から聲を掛けたものがあつたので振向いて見ると、そこには思ひがけも無い時子が立つてゐる。

『やツ、時子さん、どうしてこんな所に？』

『どうしてツて、』と時子はおちつきはらつて、『私、半月も前から大阪にゐるのよ。あなたこそどうして？』

時子は眼の覺めるやうな蔦模樣の中形に大きな渦卷の葉出た帶を締め、思ひ切つて出したひ

さし髮にはピカ〳〵した櫛やピンを飾り立てゝ、どうしても二十前後にしか見えなかつた。

『兎に角外へ出ませう。』音無は靴を下足番から受取つて外で待つてゐると、左手の木戸口から高木が出て來た。

『高木君！』音無は其側へ駈けよつた。

『やア、音無君ぢや無いか。僕もたうとう活辯ぢやア無くて『活講』になつたよ。』

『面白かつた、なか〳〵面白かつた。』

『時に音無君、君は今どこにゐるのだい。』

『僕は紀州の熊野にゐる。』

『さうか、えらい所にゐるんだネ。』

話してゐる所へ時子が來て、『音無さん、御紹介下さいましナ。』と小聲で言つた。

『高木君、此の方はネ、熊野の町の松本時子さんて、ウキルミナ女學校の御出身です。』

音無が紹介した時、時子は初々しげに『どうか宜しく……』と丁寧に頭を下げた。

『久し振だネ音無君、お差支が無けりやア御一緒にカフェーにでも御伴致しませう。』

高木はポケットから一寸時計を出して見ながら言つた。
『參りませう。』と言つた音無は時子を顧みて『いゝでせう、ね、松本さん……』
『えエ、お伴致しますワ。私、』
高木について行くと程なく（旗野バア）と硝子戸に書いた家の表まで來た。
三人はそこに入つてコーヒを飲みながら暫くいろんな話をしてゐたが、高木は、
『どうだらう、君、あの活動寫眞を熊野へ持つて行つては。』
『それはいゝね、しかし收支償はないだらう。』
『實はネ、あのフヰルムは杉本商會がパテ會社から數千圓で買つたのだ。フランス一流の俳優が何百人も掛つて演じた長尺物だから價値はあるが、日本ではマダあア云ふものは向きませんナ。ジゴマのやうな物で無くツちやア。そこで何とかして元金だけでも回復しようといふので、僕が活動講師といふ觸れ出しで文藝活動寫眞會といふのを組織して、市内の宗教家や教育家を頼んで最初失樂園の講演會を開いて入場無料で二千人ばかりを集めて置いて次にあの大石板を出したんだが、御覽の通りの不入で小屋代も取れないといふ不始末さ。これぢやアとても

やり切れないから實は秋頃から教育會や、教會へ交渉して會費制度にでもしてやつてみようかと勘考中なのサ。そこでだ、僕が兎に角文藝活動寫眞會なるものを組織した功勞に對し、杉本商會は十日なり半月なりはあのフヰルムを無料で僕に貸してくれる事になつてるんだ。だから僕も觀光かたゞ〳〵、熊野へ行つてみようかと今一寸思ひ付いた所サ。』
『それは大變結構ですワ。しかし一晩の費用がどれ位かゝりませう？』
時子は胸に考へをもつてゐるらしく訊いた。
『さア、機械は無料で使ふとした所で、技師、辯士、往復の旅費……さうですネ、やつぱり可なりかゝりますよ』と言つて高木は何か考へ込んでゐたが、『音無君、あの活動寫眞へ僕達の組織してゐる新劇協會の一座を加へて乘込まうか。』
『それは大變だよ、經費が。』音無は不安さうな顏をしながら言つた。
『なアにそんなに澤山はいらないよ。新しい芝居とあのフヰルムを持つて行くんだもの、少くとも一日に五百人來るだらう。平均一人前三十錢の入場料として三晩で四百五十圓、稅金、小屋代、旅費、給料、……さうさナ百五十圓も出せば十分だよ。』

『毎晩五百人づゝ入るとして百五十圓の損だネ。』
『さうだ、其の位の金は何とか出來るだらう。教育會とか教會とかで……』
『さア、教會と云つた所で、どこの教會も貧乏だし、教育會は活動寫眞を生徒に見させるかどうか、それが疑問だし。』
『新聞社が應援してくれないかネ、割引券でも刷込むやうにして。』
高木がさう言つた時、音無はハタと手をうつて、
『さうだ、君、石塚君を知つてるだらう。石塚覺也君を！』
『あア、知つてる〳〵、三陸海嘯の孤兒だらう。あの自修寮にゐた。』
『さう〳〵、あの石塚君が今熊野の町にゐて新聞記者をしてゐるよ。』
『え？　夫れは好都合だ。どんな新聞かいそれは？』
『其の新聞はネ、隔日刊行の小い新聞ではあるが、田原といふドクトルが資本を出してゐる『サンセット』ちふ氣の利いた新聞だ。東京あたりの一流の文士達も投書するので、文藝欄なんぞは振つたものだよ。』

『あア、あの新聞か。僕もどこかで見た事がある、石塚君がそこにゐるのか、それはいゝ都合だ、新聞社の方で缺損を引受けてくれりやア、僕は協會の一座を率ゐて直ぐ乘込むよ。』
『では、僕、歸つてすぐ石塚君に相談してみる。そして出來さうなら電報を打つから。』
『ようし、行かう！　中座の方も三日後に打揚げるんだから……』
音無も高木も非常に乘氣になつた所へ時子は傍から、
『音無さん、斯うなすツて下さいナ。其の缺損は私がお引受致しますから、あなた石塚さんと御相談の上、新聞社の主催として發表して下さいませんか。お金の事は決して新聞社へ御心配をかけませんから、主催者になつていたゞくやうに、それを田原さんと石塚さんにお願ひして下さいましョ。』
『え？　缺損はあなたがお引受下さいますか。』高木はにつこり笑ひながら言つた。
『あなたがお金の方を引受けて下さるなら、私は新聞社の方を引受けて談判致します。』
音無は事既に成れりといふやうに輕く右の掌で机をたゝいた。
高木は更にコーヒを註文しながら、『さう〳〵學院では芝居といふ言葉を宣教師が嫌ふので、

表情演說といふ名目でハウプトマンをやつた事があつたつけネ。あの時にケエテヲツケラアトに扮した……』と言ひかけた時、時子は直ぐ其の言葉の後を拾つて、

『古座ナオミさんでせう、其のお方も熊野にゐらツしやるのよ、新宮に。』

『さうか、それは面白い。』と高木は驚いた顏をして『學院時代の芝居仲間がみんな集つてるんだネ。それは是非行かなきやならない！』

三人は思はず顏を見合した。

音無は翌日川口から汽船に乘つた。二日目の正午過に新宮の町へ歸るとすぐ田原の家を訪問した。

『早かつたネ、東京へは行かなかつたですか。』

藥局の所から首だけ突出した田原はニコ〳〵笑ひながら言つた。

『大阪から引返して來ました。少し御相談したい事が出來たので。』

『さう？　まア上り給へ。』

音無は奥の一室へ通つて待つてゐると、間もなく入つて來た田原は、

『どうです。牧師會には面白い問題がありましたか。』

『いゝや何にもありません。まア友人の顏を見に行くんですナ。』

『さうだ。それは大變意味のある事だよ。僕等のやる醫會だなんてやはり一種の親睦會さ。』

『所が、僕は旅行中思ひ懸けない友人に遭ひましてネ、それで御相談に上つたのですが……』

音無は道頓堀で高木と時子とに遭つた話から、高木の率ゐる新劇協會一座を新宮へ招く事に就いて詳しく話した。

『それは非常に面白い事だ、一體此の町の芝居といふものは、こりやア何とかしなけりやアならないんだ。僅かに人口二萬足らずの町に劇場が三つもあつて、そしてそれが年中興行してるんだからナ。』

『さうですか、そんなに芝居好きなんですか、此町の人達は。』

『町の人が好いても好かないでも、役者の方で芝居をせねば死んでしまふんだからネ。』

『どういふ理由ですかそれは？』

『まア大阪邊から一座二十人位の俳優を傭つて來るだらう、木戸錢十五錢に中桝五十錢位取つて、やつと給金と船賃が一杯々々だ。十日なり二週間の興行が濟んで興行主と俳優との總勘定は濟むが、偖俳優は歸る旅費が無い。そこで今度は興行人と分合で木戸錢十錢中桝二十錢位に引下げるんだネ。それでもつて一錢の給金も拂へなくなる。すると役者の中でも少し善い衣類を着て居る連中や、故郷から金を取寄せられる連中は、旅費を工面して一座から逃げだすんだ。あとへ殘つたヘボ連中ばかりが興行主に泣ついて木戸錢二錢位で芝居をやるんだ。それも三劇場の競爭でも起ると、木戸錢無料平場行次第といふので一人前石錢の下足料を取るんだネ、さうなるとどんな下らない芝居でも二錢で觀られるんだから五六百人は入るサ。すると十一二圓あるだらう。稅金と小屋代と小物料を差引いて三圓は殘るだらうぢやないか＝小屋代が五圓だから＝で十五六人の役者が、粥をすゝつて香の物をかぢつてやつと露命を繋ぐのサ。助五郎といふ歌舞伎役者なんかは可なり腕はあるんだが、熊野へ落込んだきり、もう十何年此の町にくすぶつてるんだよ。僕は時々劇場へ診察に行くが、あの化粧部屋の長い座敷の虱だらけ

な所に多勢がゴロ〳〵寢こけてるゐざまツたら無いよ。そりやア可愛さうなものさ。食ふや食はずに居る連中に藝術もへちまもあるもんですか。だから出來るツたけ下等な卑猥なことをして舞臺の上で見物の機嫌を取る、さうすると芝居といふものはあんなものと相場がきまつてしまふんだ。だから時たまいゝ俳優が來たツて三日と續きやアしない。音無君、君なんかの說教も高い〳〵雲の上を飛んでるんだよ、二萬人中たツた五人か七人を一週に一度集めてゐるだけぢやア無いか。劇場ではこんな卑猥な芝居が毎晩少くとも千五六百人を吸收してるんだからネ。こりやア決して小い問題ぢやアないよ。』

『さうですかなア、すると高木君の一座は高尙過ぎて誰も觀ないでせうか。』

『いゝや、さうでも無からう。これで此の町には案外理窟のわかつた連中がゐるんだからネ。いゝだらう、やつて見給へ、新聞は石塚君と相談して勝手に利用してもいゝよ。』

『さうですか、では今晩石塚君と相談致しますから。』

音無は起ち上らうとした。田原は引止めるやうにして、

『君、興行人に知合があるんかネ。』

『いゝえ、誰も……』

『それはいけない、先づ専門の興行人に會つて萬事を頼むんだネ、大體の見積りを立てゝそれから着手しなきやア、興行てやつはうるさいもんだよ。』

『ではどうすればいゝでせう？』

『さうだなア。』田原は暫く考へてゐたが、『湯桁牧太郎に頼めばいいだらう、あいつ一寸義俠な男だから……』

『湯桁？　興行人ですか、其人は？』

『興行人です。元は今東京の淺草あたりにゐる佐藤年藏の興行人だつたさうだが、四五年前に此町へ興行に來て大失敗した結果、今度は儲けよう、今度こそはと……もがけばもがく程借金が重なつて足拔が出來ないでゐるのさ。若い頃東京の丸善で番頭をしてゐたとかで、一寸した横文字の表紙位は讀めるし、話も解る男だから行つて相談して見給へ、或は一肌脱ぐかも知れないよ。』

『では行つて頼んで見ませう、あなたから紹介されたと言へばいゝですネ。』

『うん、さう言ひ給へ。兎に角彼の男は此町の興行界の大將だから、事によると君と湯桁と二人が協同して新宮の演劇界を大刷新出來るかも知れないよ本當に。戯談ぢやないよ。』

書生の平石が次の室から患者が來たと知らしたので、田原は診察室の方へ出て行つた。

音無は田原の最後の言葉が現實になるやうな心持がした。そして希望に導かるゝやうな感じを懷きながら田原の家を出て湯桁の居宅を訪問した。それは町外れの裏長屋であつた。

湯桁は浴衣がけでちやぶだいの前に胡坐をかいて酒を飲んでゐた。四十三四歳の中肉中背の顏の四角な男であつた。最初の程はうろん臭い奴が來たと言はぬばかりの顏で、ぢろ〳〵音無の顏を見てゐたが、名刺を渡して田原からの紹介だと言つたので、湯桁は俄かに顏色を和げて、『やア、どうも失禮致しました。こんなあばら屋へ恐れ入りました。何か御用で？』といんぎんにおじぎをした。音無は上り端に腰を掛けたまゝ用事を手短かに話した。

『高木助雄君は、私も大阪でお目にかゝつた事がございます。高木さんが新劇協會の一座を率ゐて入らつしやるなら、私も十分御盡力致します。しかしそれは大分缺損を見込まねばなりま

せんネ。』

『缺損は引受けてくれる人があるのです。』

『さうですか、それならまア一杯々々に行きませう。』と云つて湯桁は一寸思案らしい顏をしてゐたが、『實は私も、もう興行界を引退しようかと思つてゐるので、高木さんの劇團が來るなら、それを打納めに致しませう。御承知の通り私は興行で飯を食つてゐるのですが、今度の興行は一つ無報酬で働きませう。そしてこれを最後に新らしい途を發見するのですナ。』と言つて、ちやぶだいの方に躙りよつてもう冷たくなつた酒を一口グツト飲んで、さもうまさうに唇を舐めた。

『先生は無論絶對の禁酒でございませうネ。』

湯桁は空の盃を提げたまゝ訊いた。

『えエ、以前は飲みましたが、今は一滴も飲みません。』

『さうですか、私はもう中毒してゐます。今日も酒を買ふ金がありませんので、藥屋へ行つてアルコールを買つて來て、それへ水を混ぜて薄めたのです。今飲んでゐるのがそれです。』

『さうですか。』音無は憫れむやうに湯桁の顏を眺めた。

『先生、私もこんなにまで落込んでしまはうとは思はなかつたのです、私は子供上りの時辻新次さんの紹介で丸善の小僧に住込みまして、大分都合よく勤めて番頭にまで經上つてゐたのですが、暑中休みに故郷へ歸つた時友達に勸められて、碌々知りもしない花合せをやつたのです。私は到つてあゝいふ博奕めいた事が、嫌いといふよりも下手な方で碁も將棋も骨牌も殆ど知らないのです。所が因果なもので、其の知りもしない骨牌をいぢくつてゐる所を、ぱツさり捕まつて、一ヶ月投り込まれたのです。で、店の方は解傭される、出て來て仕事はなし、たうとう其頃の壯士の仲間に入つて演說會の妨害を仕事にしてゐたのですが、妙な關係から壯士芝居の興行人になりましてネ。五味だの井上だのは私に世話になつた方です。高田などゝもよく一緒に遊んだものです。所が五六年前に、此の町へ興行に來て、ドエライ暴れ者に出あつたのです。其男には乾兒が多勢あつて、其の連中が芝居を見に來た時、木戸錢を出せとでも言はうものなら、默つて出して置いて、そしてひどい復讐をするんです。』湯桁はアルコールを又た一盃飲んで、『其の暴れ方が風異りなんです。芝居が段々面白くなつて、さア喧嘩だとか讐討

だとかいふ急所へ來ると、いきなり『助太刀！』といつて舞臺へ飛出すんです。そして下駄の雪駄だので思ひ切り役者の顏をぶん毆るんです。人情物だと愁歎場で見物がウンと泣かうと構へてゐる頃ゾロ〳〵花道から出て行つて舞臺の上で踊り廻るといふ始末なんです。私は其の話を聞いて考へましたネ。どうかして其奴を取ッちめる方法が無いかと思つたが、腕力では無論かなはないし、たうとうこんな事を考へたんです。』

湯桁は德利のアルコールを又た盃に七分目程ついで、そして德利を靜に振つて見た。中でチョビ、チョビと音がしたのでかすかな笑みを湛へながら又た話を續けた。

『で、私は興行する前に、（今度來た興行師は東京で名高い俠客だ。あれが興行中伴れてある役者はみんな名高い亂暴者ばかりで、日本中どこへ行つても喧嘩に負けた事は無い。）と言ひふらしたんです。すると間もなく其話が連中の耳に入つたと見え、やつて來ましたネ、九寸五分を懐に呑んで……そこで私は其の連中二十何人をお茶屋へ呼んで底拔騒ぎをした末、鎗でも鐵砲でも來い！　と云つて空威張りに威張つたんです。可笑しいもので、それ以來私はすつかり親分にせられてしまつたばかりか、たうとう警察までが、私をドエライ博徒の親分だと睨

んでしまつたのです。所が興行は其後御難つゞきで……アルコールに水を混ぜて飲むといふ始末、あの提灯が泣きますよ、あの提灯が……』盃をちやぶだいの上に措いて長押（なげし）の提灯を見上げた。そこには芝居の喧嘩場に能く見る細長い提灯が二十ばかりズラリと並んでゐた。

音無は湯桁の話を非常に面白く聞いた。そしていろんな事を頼んで置いて歸つた。

吾社聊か考ふる所あり、社會改良策の一助として來る十五日より三日間當町朝日座に於て、少壯文藝家として聞ゆる高木助雄氏の組織せる日本新劇協會一座を招聘し、佛國文豪ビクトル、ユーゴーの傑作『エルナニ』を公演致し候。同座には特に哲學博士、荒川重人氏舞臺監督兼技藝員として加入致し候。

且右新劇の外、英國詩聖ミルトンが三十年間の苦心に成る大傑作失樂園の大活動寫眞を御覽に入れ候。

右は一般觀覽者を謝絶し、本紙刷込の入場券（一日分九百枚）御持參の方に限り入場料金四

十錢にて、蒲團、火鉢、茶、一切無料にて差上げ、且つ粗菓進呈仕るべく候。

此の廣告が新聞サンセットの第一面に二號活字で掲載された時は、小い町は俄に動搖して町中どこへ行つても芝居の話で持切つたのであつた。

九月十三日の朝。高木助雄の一座二十四人は新宮の町へ乘込んで來た。荒川博士は出發間際に俄に發熱して一座に加はる事が出來なかつた。

高木は宿へ着くと直ぐ音無を招いた。田原も覺也も來た。四人が相談の結果先づ朝日座で文藝講演會を開く事にした。入場無料が人氣を呼んで場内は破るゝばかりの大入で、失樂園とユーゴーに關する四人の講話がいづれも聽衆を感動せしめた。

講演會の成功はいやが上にも人氣を煽つて、翌日のサンセット社は新聞購買者で上を下へと混雜した。

愈々其の日となつた。開幕前から滿場爪も立たぬ程の大入であつた。六時半に『エルナニ』の幕が開いた。高木のソル姫を始め、三浦の山賊エルナニ、水谷のカルロス王、素人ではあるが、みんな相應に舞臺慣れてゐて、一同車輪にやつてのけたから見物はいづれも片唾を飲んで大喝采をした。殊に松本のシルヴ城内の老侯は非常に能く出來た。いよ／＼三幕目のエルナニが戀の仇カルロス王を殺しに行かうと決心する所で一先づ演劇を終つて活動寫眞に移つた。

幕の閉ぢた時、見物席から『芝居をやれ、活動寫眞は明晩にせエ。』などゝ叫ぶものもあつたが、いよ／＼樂園歡樂の美觀や、天魔波旬の壯觀が映し出された時は、見物は靜まり返つて觀た。其晩はアダムとイヴが智慧の樹の實を食ふ夢を見る五卷目の初めまで映して閉會した。

雪崩を打つて出る見物の誰も彼もが、みんな芝居も活動も面白かつたと取々に評判してゐた。音無は群集に紛れて評判を嬉しく聞きながら歸つたが、何だか頻りに興奮して眠られなかつた。

三年前に高木が牧師をやめて劇壇の人となると云つた時、牧師間で一寸問題にしさうであつたが、極力高木の辯護をしたのは音無であつた。其の高木が舞臺の上から數百數千の人々を自由自在に泣かせたり怒らせたりして居るのを觀た時、聲を嗄らして說敎しても五人十人しか集つて來ない自分の境遇に引較べて聊か高木を羨ましくも思つた。

翌日は觀客が開場を待兼ねて一時にドッとなだれるやうに入場し、即時に滿員となつて、リカルド王が長々しい獨白をやつてゐる時、大木戸で『入れろ、入れろ！』とひしめく聲が聞えた。

四幕目の末にリカルドが神聖帝國の帝座に陞つて、山賊エルナニにソル姫を與へ、『仕合せなドン、フアン。姫は御身の妻にしろ、御身は愛する姫を手に入れた。朕は神聖帝國の帝位を得た。エルナニ！　今までの事は一切忘れたぞ！』の臺詞で幕切れになると滿場は破るゝばかりに喝采した。再び幕が開いて第五幕目の幕切れのエルナニとソル姫とが毒を仰いで天を指しつゝ『美しい國へ！』と抱合つた時、臨監の巡査は突如として『中止！　中止！』と叫んだ。しかし實はこれが終りであつたので警吏の中止は無意味であつた。

續いて活動寫眞となつて、昨夜の殘卷の第五卷の後半から映し初めたが、九卷の初めの惡魔が毒蛇を尋ねる所まで來るともう十二時近くなつたので、高木は舞臺に現はれて、明晩は寫眞の殘部を最初に映し、エルナニを序幕から大切まで演じ、最後にチエホフの傑作『犬』を一幕

演ずる旨を廣告して打出しとなつた。

音無と覺也とは化粧部屋に入つて行つて、高木と握手しながら成功を祝した。

『中止とはひどいネ、あんな所で。』と覺也は憤慨した口調で言つた。

『日本の舊劇にはもつとひどいのがあるんだけれども、』と音無は笑ひ乍ら、『新の字が付くと何でもいけないのだ。』

『さうだ、新宮なんていふ地名も改めなきやアいけないよ。』と高木も笑つた。

『さうさ、此節は新といふ字と社會といふ字が大禁物だからナ。會社の看板を倒に置いても首が飛ぶかも知れんぜ。』音無は喉をかするやうに笑ひながら言つた。

『實際、敏感だからナア。』と覺也は眞面目に言つた。

音無は其晩、どうしたものか興奮して眠れないから、二時頃まで新聞を讀んだり小說の口繪を見たりした。三時近くに漸くウト〳〵と眠氣ざして來たので蒲團を引ッかぶつたが、睡り付いたかと思ふと忽ち惡夢に驚かされては覺め〳〵したあげく、隣の妻君が水汲の足音に眼をさました朝の八時頃から初めてグツスリと睡る事が出來た。

暫くするとドン〳〵戸を敲く音が聞えた。あわてゝ寢まきのまゝ玄關へ出て行くと、そこには一通の手紙を投込んであつた。

封筒に『熊野警察署』と書いてあるので不思議に思ひながら披いて見ると、

相尋ね度儀有之候條此通知書受領次第實印携帶の上卽刻當署まで出頭すべし

若し事由なくして出頭せざる時は相當の處分する事あるべし。

といふ蒟蒻版摺の召喚狀であつた。音無は或はエルナニ劇の事に關しての質問ではないか知ら……と思ひながら警察へ行つて見ると、警察署には召喚狀を持參した男女が四五十人も詰かけてゐて、署長、警部補、部長等七人係りで必死に聽取書を作つてゐる。音無は柱の傍に立つて四十二三歳の女が八字鬚の巡査に取調べられてゐるのを聞くとも無しに聞いてゐると、果して此の多數の召喚がエルナニ劇に關係した事であると知つた。

巡査は女の姓名年齢を一通り聞きたゞしてから、

『朝日座の芝居へ行つたか。』

『へえ參りました。』

『お前さんの家にはサンセツトちふ新聞を取つてゐるんだネ。』

『へえ、讀んでゐます。』

『あの新聞は何主義だといふ事を知つてゐるのか。』

『主義？　そんなものは知りません。』

『社會主義の新聞だといふ事を知つてゐるのかと云ふのサ。』

『知りません。そんな事は……』

『芝居は面白く無かつたらう？』

『私らにはむづかしうて。異人さんの芝居ですさかい。』

『四十錢出したのか。』

『へえ拂ひました。』

『四十錢が惜しくなりはしないか。あんな芝居を見て。』

『私らのいつも行く芝居の木戸錢は二錢三錢ですさかい。』

『其金を返してやらうと云つたらどうする？』

『そりやア返していたゞきます。』
『では切符を貰はなければよかつたと思ふんだナ？』
『まア、さう言へばさうです。』
『サンセツト社にだまされたと思はないか。』
『さうです、評判程で無かつたさかい、まアだまされたも同じことです。』
『宜しい、これへ印を捺しなさい。』
音無は初めて聽取書といふものを知つた。女の向ふには五十ばかりの小柄な男が部長に調べられてゐる。
『えエ、欺されましたとも、エライ目にあひました。まるで役者は素人ばかりですもの。あれで三等鑑札を持つて居るものが、たつた八人しか無いのです。活動の機械は杉本商會からたゞで借りて來たのぢやと云ふ話ぢやし、役者には全體で一日二十圓もやれば十分ぢやらうし、どうしても一日に三百圓は儲かりましたナ。田原さんもなか〳〵食へん人ですよ。』と聲高に言つてゐた。音無は憤然として一二歩部長の方へ近寄つたが、部長はおとなしさうな顏をして、

せつせと聽取書を書いてゐた。音無は頭の中で『罪と罰』の小說にあるラスコーリニコフが警察で召喚された時の記事を想ひ出して、あの二等警部のやうな横柄な警部が自分を取調べたなら、そして二等警部が、あの Ich danke（イヒ ダンケ）と獨逸語で答へた白い着物を衣た立派な婦人を罵つたやうに（うぬ、貴樣、たわけめ！）などゝいふ亂暴な言葉でくつてかゝつて來たならどうしよう？　などゝ考へてゐると部長は頭を上げて、
『何か御用で？』と問うた。音無は召喚狀を出して見せると、部長はそれを持つて別室に行つたが、やがて再び現はれて、丁寧な言葉づかひで、
『どうぞ二階へお上り下さい。』と階段の所を敎へてくれた。音無は下駄ばきのまゝ二階へ上つて見ると、ガランとした廣い正面に一間幅の黑板を背にして、色の淺黑い鬚のない警部が机を控えて頻りに書ものをしてゐたが音無の來たのを見て、『どうぞお掛け下さい。』と言つて机の呼鈴を二つ鳴らした。
十五六の小使が上つて來たので警部は卷煙草をひねくりながら、『加納巡査に來て下さいッて、直ぐだよ。』と言つて煙草に火を吸ひつけたが、巡査の來たのを見て、

『君、一寸聽取書を書いてくれ給へ。』
『ハツ承知しました。』と巡査は警部の傍の椅子に腰をかけた。
例の如く族籍調べを濟ましてから、警部はしづかに訊問を始めた。
『新劇協會の高木君とはどういふ御關係ですか。』
『白金學院の同窓です。』
『あなたはエルナニ劇を、日本の國情に適した劇だとお思ひですか。』
『必ずしも日本の風俗に一致すると言へませんが、別段風教に害があるとは思ひません。』
『帝王と泥棒とが女を爭ふといふやうな事は不穩當ぢやないでせうか。』
音無は默つてゐた。
『それから何とかいふ女が短劍を拔いて『一足近寄れば王のいのちは無い。』と言ふ所があつたやうですが、あれはどうお思ひです？』
『さういふ部分々々の御質問では。』と音無は頭を搔きながら、『エルナニ劇其物に就てはずゐぶん議論の餘地もありませうが、さう抽象的にお尋ねになられると、一寸困ります。』

『中傷的？　僕は決して中傷なんかしないです。』
警部は眞面目であつた。そして姿勢を正した。音無は今少しで失笑する所であつたが、急に他人の無學を笑はうとした小い自負心を愧かしく思つた。
『あの興行に就いて金錢上の御關係はありませんですか。』
『少しもありません。』と音無はキツパリ答へた。
音無は警察から直ぐ其足で田原を訪問した。すると、『やア、やられたナ、君も。』と田原は笑ひながら玄關へ出て來た。
『今調べられて來た所で……』
『さうか、まア入り給へ、高木君も來てゐるよ。』
音無が奥へ通ると、高木はクシヤ〳〵した容子で、
『朝ツぱらから警察へ呼ばれて、ウンと油を取られて閉口したよ。』
『露西亞の警察だつたら、ラスコーリニコフのやうに洒落の一つでも言はれるんだが、どうも

日本の警察は威儀堂々としてゐるからネ。』
『所が僕を調べた加藤何とかいふ警部は、イリヤ、ペトロ并ッチだからな。』
『どんな事を訊かれたかい？』
『どんなもこんなも無い。エルナニは秩序紊亂の恐れがあるんだとサ。』
『ぢやア興行停止かネ。』
『マダ今夜の興行屆はしてないんだが、どうせ藝題變更を迫られるだらうよ。』
『藝題を變更しちやア、入場券を買つた連中が其のまゝですまさないだらう。』
『だからやるさ。うんと思ふさまやつてやるよ。』
『それはいけない。喧嘩腰になる必要は無いよ。王と言つて悪い所は大將と言つても善いぢやないか、淨瑠璃の文句でも、太閤記十段目で（天子將軍になつたとて……）と云ふ所の天子と云ふ二字を抜いてしまつたり、一ノ谷嫩軍記では（敵と目ざすは安德將軍）などゝいふ時代だもの、讓歩し給へ、警察へ楯を突くのはいけないよ。』
『ぢやア君はユーゴーの大作を勝手に改作しろと言ふのだナ。』

『さうぢア無いが……』
『ぢやア堂々とやるより外は無い。七十八年前から全世界の何千萬人に讀まれた大作が新宮の町の人にだけ不穩だといふ理由があるか。大いに爭ふネ。』
『大變なけんまくだな。マダダでもノラでも、日本の舞臺ではみんな肝心な文句を引抜かれてるぢやアないか。展覽會の裸體の彫刻へは赤い腰卷をまかせる時代だもの。』
『ぢやア音無君、君は新約聖書のキリストといふ文字を弘法大師、パウロを行基菩薩と改名して讀めと言はれた時どうする？』
音無は默つて俯向いてしまつた。暫くして高木は顏色を和げながら、
『なアに、言はゞ今度の事も一種の喜劇サ。今朝僕は警察であんまりいろんな事を訊かれるから少々面倒臭くなつて。西洋物がおいやなら高山彦九郎でもやりませうかッて言つたら、警部はけゞんな顏をして、（高山彦九郎ッて俳優が居るのか）ッて御質問ぢやないか。』
田原も音無も思はずふきだした。最前から始終沈默して二人の問答を聞いてゐた田原は微笑を含みながら、

『何でも警察へひどい投書をした者があつたらしい。今度の興行は第一思想がいけないのと、一つは誇大の廣告をして不當の暴利を貪らうとするめたで、俳優の給金は一座二十四人に對して一日二十五圓、活動寫眞のフヰルムは無料だから一晩で貳百圓以上は儲かるなどゝ密告したものがあるのらしい。劇場料も電氣料も稅金も船賃も一切無料にしてくれゝば、それくらゐは殘るかも知れないが、稅金だツて三日で百二十圓もいるんだがネ。』

『そんな投書を警察署は信じたのでせうか。』

音無は腹立たしさうに言つた。

『なアに敵は本能寺にありさ。第一廣告に社會改良策の一助としてといふ文字のあつたのが、惡かつたんだよ。義主會社が祟つたのだよ。』

田原はさう云つて、はッは、はッは、と笑つた。

『義主會社？　義主會社？』と高木は首を捻つてゐた。

『會社の看板を倒にして置けない土地だもの。』

『成程！』と高木も拳で膝頭をたゝきながら笑つた。

鮒田富士に入殘つた夕日が權現川原の白い砂を照してゐる。遠見には胡麻を撒いたやうに集つてゐる熊野鳥の群が、水際から駈けて來た小犬をからかふやうに、ぱッと低く飛上つては虛を見てまた降りて來る。小犬は右に左にかけめぐる。

五六艘の炭船が靜に帆を揚げて熊野川を下つて來るさまが得も言はれず美しいので、其の景色に見とれてゐた高木は、

『もう六時だ。五時半といふ約束だつたが、どうしたんだらう？』と云つて、高い城壁の上から坂路の方を見てゐると、ハンカチーフでも振るらしく木の葉がくれに白いものがチラホラしたかと思ふと、『お待遠さまでした。』といふ聲と共に、薄色の羽織を着た時子の姿が眼の前に現はれた。

『明日出立するつもりで支度をしてゐましたので、ツイ遲れてすみませんでした。』

『明日お立ち？』

『えエ、九時の船で立たうと思つてます。』と云ひつゝ時子は、『其所らへんを少し歩かうぢやありませんか。歩きながらお話する事にしませう。』

二人は大手門の方へ伴れ立つて行つた。

『あなたも私と一緒に伊勢へ行らつしやいナ。座員の方は四日市の方で興行してらつしやるんでせう。』

『さア、どうしませうか。僕はこれから先きもステージの人として立つか、それともすつかり思ひ切るか、其の決心がマダきまらないんです。いつそ有罪の判決を受けて監獄にでも入つたら頭がはつきりして、どつちかへ固まるのだらうと思ひます。』

『まア、そんな事を……検事さんはどんな論告をなすッたの？』

『検事はなか〳〵頭のある男らしかつたが、何さま芝居の内幕を知らないもんですから、湯桁君と清水君とに四ケ月の體刑、僕に一ケ月の體刑を求刑しましたよ。』

『まア、エルナニ劇の公演者に體刑を求めたなんてフランスの新聞にでも通信されたら、それこそ日本文明の不面目ですワ。』

『罪と罰に出て來るイリヤペトロヰツチは酷烈な意見書を出してありましたよ。田原さんの發行してゐ新聞の商買がたきと、劇場の商買がたきと兩方からの下らない投書を材料に、ひどい事を書いてゐましたネ。（誇大の廣告をなし巨額の不當利益を占め）なんていふ文句があつて、田原君も石塚君も僕も、みんな詐僞取財といふ罪名の下に、一束にしられてるぢやありませんか。驚きましたよ僕も……』

『詐僞取財？　御損をなすッて、名譽を毀けられて……詐僞取財？』

『まア仕方がありませんサ。最初廣告した荒川博士が俄かの發熱で來られなかつたし、觀覽者の中でたツた一人でも詐僞されたと申立てる者があつたなら、それでもう法律上、誇大廣告をして金錢を詐取した事になるんだから……何しろ六百何十人といふ町内のサンセツト新聞購讀者を片ッぱしから一々取調べたんですもの。其の聽取書を辯護士から借りて見ますと、中にはお話しにならない申立をした連中があるんですもの、おかげで新聞の讀者はパタ〳〵と二百何十人減つたさうです。』

『だッて、詐僞取財とはあんまりですワ。其のイリヤ、ペトロヰツチてのは彼の色の黑いお方

でせう？』

『人身攻撃はよしませうや。』

『だツてあのイリヤ、ペトロ弁ツチは拘留されてゐる藝者を口説いたんですもの。』と云ひかけて、『そ はロシアのお話よ。』

『ロシア人にでも日本人にでも、美しい者は美しく見えるのサ。』

『えエ、そりやア、同じ人間ですから孔子さんがクレオパトラを口説いたツていゝワ。だけどあのイリヤ、ペトロ弁ツチは私、名前を聞くだけでも蟲酸が走るの。それから、あそこでは繪に描いた青鬼が胃酸を舐めてゐたでせう。』

『はッはは、繪に描いた青鬼は能く出來た。』と笑つたが急に思直したやうに、『なアに法律の運用なんて個人の感情でどうとでもなるから、あの事件の主任がイリヤ、ペトロ弁ツチで無かつたなら、頭から取上げなかつたかも知れないのサ。僕は最初調べられはじめた時、（こいつはぶち込まれるワイ）と思ひました。それから裁判所で檢事に調べられた時は（無罪だなア）と感じましたが果して無罪でした。』

『本當にようございましたワネ、そして湯桁さんや清水さんは何といふ罪名で……何ケ月？』

『清水君はサンセット新聞の署名人で、湯桁君は興行人で、二人は警察犯處罰令に由るたツた二十日の拘留で濟みましたが、それだつて本當に氣の毒だネ。』

二人はあづまやのベンチに列んで腰を掛けて、自然木の杉のテーブルにもたれた。二分、三分、二人の間には沈默が續いた。夕闇の中に高木の白い顏が肩まで垂れた長髪の中から名工の塑像のやうに浮出してゐる。

『僕も此際何とか決心しなくちやならない。有罪になつて、人間が人間を審いてゐる恐ろしい世界の探險に行つて、此の長い髪をふツつりと切取られて來た方が、僕に取つては善い經驗だつたかも知れない。』

高木は輕く頭を振つた。時子は高木の肩に、浪のやうに流れてゐる髪の端を、指先でなぶりながら、

『私、大阪で始めてお目にかゝつた時、あの少年ゲエテを憶出しましたのよ。ブリュール街の

酒屋（ファインエントラル）にゐた少年ゲエテよ。だけどいけないワネ、私にはカタリナの美貌が無いんだもの……』

『僕は少年ゲエテのやうに、あんな華やかなロマンチックなところはありません。一切が幻滅です。駄目です駄目です。』

高木は起ち上りざま、顔に振掛る髪をうるささうに後へ拂ひ除けながら、

『時子さん、櫓跡（やぐらあと）へでも登つて見ませう！』

二人が櫓跡へ登つてベンチに腰をかけた時、太平洋の靜かな波間から登つた片破月（かたわれづき）は、王子ケ濱の松ケ枝から町を覗くやうに製材所のトタン屋根を白く照してゐた。

『好い景色ネエ。』

『自然にかなふものはありません。人間の藝術なんか駄目です。』

『高木さん、あなた大變興奮してらつしやるワネ。』

『興奮もしますサ、僕は今瀬戸ぎはに立つてるんですもの……』と云つて高木はさも感慨に堪へないやうに、『時子さん、此の絶景を見ながら僕の身の上話を聞いて下さいませんか。』

『伺ひますワ。』時子は兩の袂を膝の上に載せた。

『一體僕が藝術に携つたといふのはやはり宗教的動機からです。學校を卒業してから暫くは牧師をしてゐましたけれど、牧師ではイクラ教壇で聲を嗄らしても教會へ來る少數信者しか教化する事は出來ない。これでは駄目だ、どうしても社會全體人間全體に訴へて理想を吹込まうとするには教壇の説教よりは藝術だ。殊に日本人全體の頭を改革しようとするには歴史や因襲の除き切れない宗教では駄目だと思つて、僕は斷然牧師をやめたのです。勿論其時の僕は今にも日本全體を藝術化してやらうといふやうな空想に燃えてゐましたが、さていよ〳〵着手して見るとやつぱり駄目でした。まだ〳〵日本人の藝術的理解は浪花節程度で、それ以上の藝術は殆んど顧みられないです。それから僕一人がどんなに眞劍であつても一座のものがみんな僕と同じ心持に成つてくれない。最初の程はみんな眞劍だがいつの間にかいはゆる藝人根性になつてしまふ。『素人（しろと）に！　素人に！』といふが僕の口癖のモットオで、素人といふ事を忘れちやな

らないとしつこく戒めて置いても少し舞臺馴れると直ぐくらうとになる、自分の技藝の未熟にも失望しましたが、それ以上藝人根性といふ眼に見えない因襲の氣分が根強く附纏つて、新しい藝術家を腐敗させるのには殆ど匙を投げました。今まで旅興行で御難を食つて死ぬ程の目に遭つたり、女優と男優との間にいざこざが起つて新聞の三面で惡口されたり、學校時代の友達からは殆ど絶交同樣にされたり、散々な憂目を見た結果が詐僞取財の刑事被告人！』

高木は俄かに言葉をとぎらしてほつと息を吐いた。

『しかし全く失敗ぢやアありませんワ。マダ〳〵前途がありますワ。』

『さ、どうかネ。金森さんでも押川さんでも横井さんでも、成程世間からはいろ〳〵の風評をされてゐます。しかしみんなあんなになる動機は善かつたのです。金森さんは同志社の校長時代に米國宣教師と衝突して（なアに日本人は日本人の手に因つて傳道する！）ッて傳道界を飛出して先づ金を作る事に手を出したんでせう。そしてみごと失敗サ。押川さんだつて東北學院の院長を辭して、獨力で立派に宗教學校を起して見ようと思つて事業に手を出したのでせうが、やつぱり結局は罐詰の中に石ころを容れたなどゝいふ途方もない惡口せられただけでし

た。横井さんだッて本郷の教會で二百や三百の信者に說教するより、政治家になつて大いに國家の爲に盡さうといふ心から議會へ出たのが抑もの失敗でした。つまり時機が早かつたのです。もつと隱忍してゐれば善かつたのサ。內村さんなんかは何にも事業に手を出さないで、忍び通して來たから成功したんです。燃ゆるやうな活氣を胸一杯に包んで、ぢつと日本國を睨んでゐたんだからよかつたのです。金森さんでも押川さんでも横井さんでも牧師をやめた頃は本當に日本を呑んでゐたんです。所が實際社會に乘出して見ると萬事が生一本では押通せない。』

時子は餘り面白くもない、知らぬ人達の身の上話に空耳を貸してゐたが、もう堪へられなくなつたと見え、

『よしませうヨそんなお話……私、それよりもつと〳〵大事のお話があるのよ……』

『大事のお話？　伺ひませう、どんなお話ですか。』

『そんなに固くお成りにならなくッてもいゝワ。』

時子はすねたやうに身體を搖ぶつて袖を輕く顏に押當てた。

『時子さん、さういふ僕にも女優との間に可なり縺れたローマンスが有る事はあつたのです。

僕は女には落第者なんです。』

突如に斯う言つた高木は何と思つたか右の腕を前に突出して、それを左の手でしごきながら起ち上つた。

『高木さん、あなた、本當に女ッてものをどう思つてらつしやるの？』

『落第者ですから女を論ずる資格はありません。イヤ女ばかりでは無い。一切が幻滅です。もう僕も藝術を斷念して、トラピストへでも入つて一生を無言で暮さうか知ら？』

『え？　それは本當？』

時子が驚いたやうに其の袖に縋つた時、丁度月は黑雲にかくされて二人は暗黑に包まれてしまつた。

『名古屋！　名古屋！』といふ聲にびつくりして眼を覺した時子は、窓から赤帽を呼んで荷物を預け、そゝくさとブリッヂを渡つて改札口を出ようとした時、一人の青年紳士がツカ〳〵と近よつて、

『松本さん！』と聲をかけた。

『おや、廣井さん？　まア暫くでしたワネ。此頃こちらにゐらッしやるの？』

『えエ、とうから來てゐます。』と廣井は微笑しながら、『今日、大伴君――あなたもお承知でせう。あの大伴君がひよつくら尋ねて來て今の汽車で歸つた所です。』

『まア、大伴さんが？』時子は殘惜しさうな顏をした。

『あなたはどちらへ？』

『私？　私、東京へ行つて來ようと思つて……』と一寸言葉をきつて、『あなたがこちらの教會にゐらッしやると聞きましたので、急に御伺ひしたくなりまして……』

『さう、有難うございました。僕も一度あなたに御目に掛りたいと思つてゐました。今日も大伴君とあなたの御噂をした所です。』

『噂？　どんな事を言つてらッしやいましたの？』

『別に詳しい事は聞きませんでしたが、新宮で一寸お目に掛つたッて……』

『さう？』と時子は事も無げに言つたが、さぐりを入れて見るやうに、『大伴さんは今どちらにゐらッしやるんでせう？』

『京都の三本木の信樂とかいふ宿に……』

『マダ信樂に……』と半分口まで出かゝつたのをかみ殺して、『廣井さん、どッかの宿へ御案内願へませんでせうか。』

『さうですナ。』と廣井は一寸考へてゐたが、『御夕飯は？　マダなんでせう。』

『マダですよ。』

『ぢやア、どこかそこらで濟して參りませう。』

『えェ、さうしませう。』言つて時子は恥かしさうに俯向いた。

『持ちませう。』と廣井は時子の手から手荷物を奪ふやうにして歩き出した。時子は雨上りの途を泥を用心しながらしなを作つて歩いた。廣井は時々振返つて時子の容子に眼を注いだ。

『こゝへ行きませう。』廣井は停留所の所からカフェめいた洋食店の二階を見上げるやうにして言つた。

『參りますワ、どこへでも……』

二人は二階へ上つて片隅のテーブルを中に差對ひに席に就いた。

『五年振ですナ。』廣井は椅子を前の方ににじらせながら言つた。

『本當にネ、暫くでしたワ。』時子は室中を一通り見廻して、誰も他の客が居ないのを安心したらしく、『私、お眼には掛らないでも、ようくあなたの事は覺えてゐます。忘れられませんワネ、學校時代の事は……』

其中註文の皿が來たので二人は無言でフォークとナイフを取つた。

『殊に僕にはあなたを忘れられない理由が幾つもあります。』と廣井はやがて思ひありげにフォークを休ませ乍ら、『あなたには何の意味も無かつたのでせうが、あなたがウキルミナ女學

校を御卒業なさる前に讃美歌集を僕に下すつた事があります。』

『えエ、覺えてゐますワ。』 時子は優しい眼で廣井を見た。

『其の讃美歌の中に、Love（ラヴ）といふ字を編出したレースの栞が挾んでありました。僕は今だに其の栞を大切にしてゐます。』

言ひつゝ廣井はそつと時子を見た。しかし時子は何にも言はなかつた。廣井は云ひたい事が澤山ありさうにしてゐたが、時子があまり白々しいので默つてしまつた。そして食事を終つた時、時子はサツサと勘定をすまして、

『さア、廣井さん、御案内を願ひませう。』

支那忠旅館の裏二階へ二人が通つたのは九時過であつた。女中が二人を夫婦扱ひにして廣井に上座の蒲團をすゝめた時、廣井はきまりの悪い顏をしてテレかくしに床の間の軸を眺めたり長押（なげし）の額面を見たりしてゐたが、時子は平氣な顏で下手（しもて）の蒲團に坐つて、

『廣井さん、さあお座んなさいナ。』

『はア、』 と廣井はモヂ〳〵して立つてゐたが、『僕はおいとまいたしませう。』

『どうして？』 と時子は白い美しい指を火鉢にかざしながら、『五年振ぢやアありませんか、いろ〳〵御話があるワ。』

時子は少しく頭を傾けながら廣井を見上げて、言葉以上の強い暗示を投げて、苦も無く廣井を火鉢の前に坐らせた。

『夢のやうですナ。』 廣井は少しふるへながら言つた。

『本當にネ、不思議な御緣ですワ。おわかれして以來、私もいろ〳〵の經驗を致しました。』

『廣島で御不幸のあつた時も、お悔みは申上げなかつたが、影ながら御同情してゐました。』

『ありがたうございます。しかし私、おつとに別れた事なんか何とも思つてゐませんワ。結婚（マリード）生活（ライフ）なんて實は幸か不幸かわかりませんワ。廣井さん、あなた、奥さんは？』

『僕はまだバチエラアです。』

『バチエラア？ 結構ですワ。もう一生御結婚なんかなさらない方がいゝワ。』

廣井はマジ〳〵して時子の顏を見ながら默つてゐる所へ、女中が『お湯におはいりなさいま

し。』と言つて來た。

『あなた、一風呂浴びてらッしやいまし、隨分お疲れでせう？』

時子は女中の手前、二人を夫婦のやうに見せかけたばかりか、長い〳〵旅路を一緒に疲れて歸つたやうに取つくろつたのであつた。廣井には其の心情が歷々と見え透いてゐた。しかし心の底にはそれを輕蔑するやうな感じと、何だか嬉しいやうな感じとがいりくんで、ぼうーッと顏のほてつて來るのを覺えた。

『僕はよします、あなた浴つてらッしやい。』

廣井は自分の言葉と態度とが餘りに馴々しかつた事を愧かしく思つた。

『さう、では私、一寸浴つて來ますワ。』と時子は次の室へ行つたが、やがて靜に障子の開く音が聞えた。廣井はわけなく眼を閉ぢて俯向いた。そして廊下をつめたく消えて行く足音にぢつと耳を澄してゐると、雪のやうな白い素足が鏡のやうに拭込んだ板の上を小刻みに辷つて行くのがアリ〳〵と見えた。

時子が階段を降りて廊下を曲つて化粧部屋の戸を引開けたのも、そこで着物を脫いだのも、

湯氣の立籠めた生溫い浴室の中へ入つて行つて、足元に氣を付けながら愼ましやかに少し小腰を屈めて浴槽の方に近づいて行つたさまも、浴槽の中にずッぷり浸つて襟足を濡さぬ用心しつゝ顎を胸の所に付けて白い兩の腕を前方に伸したさまも、右足をキチンと折つて左の膝を立てゝ首筋を洗つてゐるさまも、みんなアリ〳〵と透視する事が出來た。やがて兩の足を組交したまゝ鏡の前にすッきりと立つて髮を撫付けてゐるいでゆの精のやうな美しい時子の姿がはつきりと見えた時、廣井は熱火の鞭で毆られたやうに全身の燃えるのを感じた。そして自分で自分を疑ふやうに四邊をキョロ〳〵見廻してゐるうち、襖の傍にちやんと袖疊みにせられた浴衣が自分を待つてゐるのを見付けた時、矢庭に起ち上つてそれを攫んで二歩三歩障子の方へ駈け出さうとしたが、はッと氣付いて浴衣を元の所に投げた。

廣井が思ひ直したやうに火鉢の前にどつかと坐つて溜息をついた時、トン〳〵と階子段を上つて來る優しい足音が聞えた。廣井は思はずきちんと坐り直して兩手を膝の上に突いた。

時子は大島に伊達卷のなまめいた湯上り姿に金紗縮緬の羽織を引掛け、ホカ〳〵した頬を摩

りながらべたりと坐つて、

『いゝお湯だつた事！』

小首を傾げて廣井を流し目に見た。廣井はやつと夢の國から現實の世界に歸つたやうに、

『あなたの湯上り姿を拜見するのは大濱以來ですが、』と顫へ聲で言つた。

『えエ、さうでしたネエ、私、あの時の事をようく覺えてゐますワ。』

時子は湯上りの透通るやうな美しい片頰に微笑を浮べつゝ『さう〳〵……My heart is a part of your heart. ておつしやつたんでしたワネ。』

『あなたには可笑しかつたでせう。しかしあの文句を覺えて居て下すツた事を感謝します。』

『私には能うく御心持がわかつてゐてよ。』と言つて時子は火鉢の前に坐り直して、『あなたはあの頃私を愛してゐて下すつたんでせう？』

廣井は眼を圓くして時子の顏を見詰めた。時子は廣井が要求するなら何時でも唇を與へようといふやうな態度を見せた。若し二人の間に火鉢が無かつたなら時子は其のなまめかしい嬌態を廣井の胸に投げ掛けたかも知れなかつた。

『私だツてあなたのお心持が嬉しかつたワ。私、あの時のお言葉を時々憶ひ出してよ。』

時子は眞鍮の細い火箸で白い灰の中に樂書をし初めた。ふと氣付いた廣井は其の時子の手の動き方から時子の心の中に動いてゐる或物を發見しようとした。

最初時子は快速に、『All of my heart is under your power.』と書いたが、次には少しく靜かな手付きで、『You have the absolute power on my heart and mind.』と書いた。二人の間には灰の中を走る微かな火箸の音の外に何物も無かつた。しかし廣井の心は躍つた。

時子は何氣なく火箸を深く灰の中に突さして廣井の顏を一寸覗くやうにしたが、又俯向いて、You are the king of my heart. と書いてそれをぢつと見詰めてゐた。

廣井はワク〳〵身をふるはせながら少しく詰寄つて、『今になつて愚痴を言ふのぢやありませんが、あなたが樋口さんと御結婚なすつた時、僕はもう一切の望みが失なはれてしまつたと思ひました。』と言つて火鉢の緣に手をかけた。此時廣井の心には此のなまめかしい時子が『あなたは私の心の王樣ネ』と言つて縋り付いて來るだらうといふやうな豫想があつた。しかし時子は案外平然とした態度で、火箸の上にきちんと揃へて載せた眞白い指を輕く動かすやう

にしながら、

『まア、本當にあなたがそれ程に思つてゐて下すつたなら、なぜプロポーズなさらなかつたの？　今になつてそんな事を仰しやつて……』と言つたが、急に娘々した羞恥を見せて俯向いてしまつた。

『そんな事が出來ますか。一ケ月たつた十圓の給費を受けてる貧乏な神學生であつた僕が、如何に厚かましくつても、あなたにどうしてプロポーズが出來ますか。あのまづい英語が精一杯だつたのです。あなた方は、あの頃私たち神學生をボロ神だと云つて輕蔑なすつてゐたぢやありませんか。』

『だツて廣井さん。』と時子は廣井の言葉を遮つて、『男てものは忘れッぽいから、そんなことを仰しやつて、直ぐ私を忘れておしまひなすつたんでせう？』

『忘れなくては罪惡ですから、むりに忘れてしまひました。』

『だから、私、男の方を信じないのよ。男てものは愛しても愛されても、ずんずと忘れてしまひますのネ。女は一度愛してくれた人は何年たつても忘れやしないワ。私は樋口と結婚しましたッ。けれどもそれは樋口の私に對する愛情の發表が、あなたより猛烈だつたからで、あなたは砂へ字を書いたばかりぢやありませんか。あの時もしあなたがプロポーズして下すつたなら、私はあなたと結婚したかも知れませんワ。其頃の私達は口では檻樓神（メロン）だなんて惡口はしてゐましても、やはり牧師は總ての職業の中で一番尊い神聖な職務だと心から信じてゐたんですもの……ですから五年前に大濱で私に投げて下すつたあなたの愛情は今でも私の胸にしまつてあります。かうして五年振でお目に掛つたのは、今まで私の胸に祕めてゐた其の貴いものを取出す時節が來たのぢやあないでせうか。』

時子の語尾は聞取れないほど低かつた。

『おッ、もう十一時だ。では失禮します。』廣井は起ち上つた。

『どうして？』と時子は落着いた調子で、『十一時だつて十二時だつていゝぢや無いの？』

『しかしあまり遲くなつては、』

『なぜ？　深夜だらうが何時だらうが、かまはないぢやないの？』

廣井は恐ろしいものに取憑かれでもしたやうに身顫ひしながら、

『僕は弱い男なんです。』と云つて俯向いてしまつた。

『私だツて弱い女よ。一人は取られ一人は殘さるツて言葉がありませう。かうしてゐる間に、もう御互の心の中には大變な戰が始まつてゐます。饑饉、疫病、地震、そんな肉體的な苦痛なんぞに比べられない眞の恐ろしい苦痛が襲つて來てゐます。廣井さん、今お互の心に一寸でも隙があつたなら、私達は一生取返しの付かない恐ろしい墮落の淵に落ちて、光も輝も無い肉の衝動ばかりに生きて行く憐れな者になるかも知れませんワ。さもなければあなたが私をいたづら者と罵るか、私があなたを墮落者とさげすむか、お互ひに聖人振つて惡口の言合ひツコをする位がおちですワ。ネエ廣井さん、恐ろしい惡魔が日を晦くし、月の光を隱し、星を飾ひ落して私共を突落す苦しい／＼奈落の患難と思ふさま戰つて、そして苦しい苦しい患艱を思ふ存分味つて見ませう。ね、廣井さん。そして東から出て西に閃く電光の光に御互の清い／＼心を底の底まで照してみようぢやありませんか。其時本當に人間の權威が神の姿となつて現はれて來るでせう？　ね、廣井さん、あなたが殘されるか、私が取られるか、私共の心はドンナに堅固

だか、弱いものだか、朝までかうして試錬をうけてみようぢやありませんか……』

時子は熱火の中に鎔け込んでしまひたいやうな、焔に燃ゆる言葉を吐きながら、眼に一杯涙を泛べてゐた。けれども廣井は眼を閉ぢたまゝ動かなかつた。

『廣井さん何を考へ込んでらッしやるの？　ね、廣井さん！』時子の聲は甘へるやうであつた。けれども廣井はまだ默つてゐた。

『廣井さん、私近頃こんなことを考へてゐるのよ。宗教つてつまり神の聖い靈と人の清い靈との接觸なんでせう。その二つが、ぴつたり結びついた時、信仰といふものになるんでせう。』

時子は廣井の答を促すやうに少しく膝をにじらせた。

『無論さうでせう。』廣井は重苦しく口を開いた。

『ね、さうでせう、神の聖い心と人の清い心との接觸が宗教で、人間同志の清い心と心との接觸が戀愛なんでせう。だから宗教は人と神との戀だといつてもいゝんぢやないですか。戀愛を神聖だといふ意味も、神は愛なりといふ意味も、つまりは一つなんでせう？、ね、廣井さん。私はこんな事を考へてゐるのよ。私の考へは間違つてゐて？』

時子は吾知らず感奮して膝を進めた。

『失禮します。』と廣井は起上らうとした。

『お歸んなさるの？』

『えエ、歸ります。僕は實に弱い〳〵肉の子供だといふ事を今更のやうに、しみ〴〵悟りました。』

『私だッて弱い女だと申上げたぢやないの？』

『イヤ、時子さん、あなたはこれまで燃ゆるやうな情火と戰つた御經驗が澤山ありませう。けれども僕には其の經驗が無い。だから僕は今夜あなたを女王と崇めて、あなたの脚下に蹲まる捕虜の心持になるか、さもなければ、あなたに對して情火の擲彈を投ずる恐れがあります。危險です危險です。解放して下さい。僕を解放して下さい。』

『卑怯よ、廣井さん。あなたは捕虜だの解放だのと仰しやらずに私の王者になればいゝぢやないの？』

『王者になれる位なら僕は決して悶えません。僕には其の資格が無い。お恥しいが僕は超人では無い。兎もすれば肉の奴隷になりたがる弱い〳〵男です。ですから僕はかうしてあなたといつまでも同座してゐれば、いつあなたの清いお心に對して反逆を謀るかも知れません。萬々一其の反逆が穗に現はれたなら、其時あなたの其の強いお心は僕を影も形も殘らないまでに粉微塵に粉碎しておしまひなさるにきまつてゐます。敗北にきまつた戰ひを敢てする愚策を取る馬鹿はありません。では時子さん、お暇いたします。』

『いけません。それだけ自覺してゐらつしやるならお逃げなさる筈はありません。其のお心持でさへゐらつしやるなら、お互に清い愛の空氣に滿ちた美しい一夜を神聖に過す事が出來るぢやないの？　私は今まで、どんなにか此の時を待つてゐたでせう？　全世界を、たつた二人限りの世界にして、純潔な愛と愛との焰が燃える！　なんといふ莊嚴な光景でせう！』

時子は全身を起して廣井の腕に縋つた。そしてさも堪え難いやうに縋つた兩腕の間に自分の顏をぐつたりと落し込むやうにして、脊を浪打たしてゐた。廣井は俯向いたなりに眞蒼になつてブル〳〵と慄えた。

『時子さん！』とあわてゝ其の手を振りほどいた廣井は、『駄目です、僕は弱い！』と言つて其所に投げつけられたやうに坐つたが、眼を閉ぢて一心に默禱し初めた。

二分、三分、五分、十分小い〳〵妖魔の姿は矢のやうに廣井の周圍を飛び巡る。深い噴火口の中から呼ぶやうな熱い〳〵聲が焰のやうに身邊に渦卷きながら聞えて來る。白い手が招く。美しい乳房が見える。漆のやうに黑い髪がミルクのやうに白い膚の上を紆る。水晶のやうな瞳が輝く。そして廣井の全身がはじけて飛散りさうに思はれる。しかし、やがて總てのものが影を潜めて、廣井の前には唯廣い〳〵曠野ばかりが見える。赭黑い石がそこ〻に轉がつてゐるばかりで、草も花も何にも無い。しかし砂の上に小い人の足跡が一つ見えた、ぢつと見てゐると、それが段々大きくなる。足跡は沙の上に一尺程の距離を置いて縱にクツキリと刻んだやうに印せられてゐる右と左との親指の痕まではつきり見える。フイルムのやうに砂濱は廣井の眼の前を果なく過ぎ去つた。そして最後に大きな岩が現はれた。岩の上には若いナザレ人が横に臥てゐる。美しい若い女が、ナザレ人の眼を覺さまいとするやうに、そつと岩に近寄るべく爪

先で歩いてゐる。手にはナルドの香油を持つてゐる。それはナザレ人の髪に注がうとする爲であると知れた。しかし女の近寄らない前にナザレ人は眼を覺して半身を起した。長い美しい髪が肩の所まで垂れてゐる。女はにつこり笑つた。ナザレ人は默つて點頭いた。一寸躊躇するやうであつたが女は手を高く差上げて瓶を倒まにした。透通つた油＝芳烈な香を放つ香油＝が白い美しい腕の中から溢れ出て細い指先から糸のやうに美しく流れ出るやうに見える。最後の一滴がナザレ人の頭に落ちた時、ナザレ人は極めて少しく微笑を湛へた顏を女の方に仰向けた。女の顏は其時滿足と喜悅に日の如く輝いてゐた。燃ゆるやうな眼でナザレ人をシゲ〳〵と見おろしてゐたが、女の顏は段々ナザレ人の顏に近づいて行つた。そして其の唇と唇とが辛うじて相觸れようとした時、女は驚いたやうに身を退けて、その足許に打ツ倒れた。そして其の足に接吻した。女の眼からは涙が雨のやうに降注いだ。女はナザレ人の足の上に落つる自分の涙を丈なす黑い髪で拭いては泣き拭いては泣いた。ナザレ人は憐れむやうに女を眺めながら、しかも女のなすがまゝに總てを打委せてゐる。何所からか聖い音樂が聞えて來た。それは遙か彼方で世に無く聖い麗はしい愛を讃美するコーラスのやうに思はれた。